

# 防衛軍幹部はリリィ達の 育成をする

影病

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

近未来の地球

ここには謎の巨大生命体ヒュージが出現

ヒュージを倒すリリイと

通常兵器でヒュージを倒すはずの防衛軍幹部

この防衛軍幹部は何かが違う…

普通ではない幹部がリリイを育成する物語が

今始まる

※恋の話も入ってます

# 目次

|                     |     |
|---------------------|-----|
| INTRODUCTION   紹介   | 1   |
| FIRST STORY   仕事    | 8   |
| SECOND STORY   信頼   | 30  |
| THIRD STORY   日常    | 57  |
| FOURTH STORY   再開   | 82  |
| FIFTH STORY   変化    | 120 |
| SIXTH STORY   感謝    | 156 |
| SEVENTH STORY   訓練  | 190 |
| EIGHTH STORY   外出   | 212 |
| NINTH STORY   反乱    | 241 |
| TENTH STORY   殺鬼    | 271 |
| ELEVENTH STORY   誕辰 | 299 |
| TWELVE STORY   昔話   | 336 |
| THIRTEEN STORY   合同 | 360 |
| FOURTEEN STORY   善悪 | 391 |



## I F S T O R Y — 紹介 —

レン・リエスタ 20才

この物語の主人公 色覚異常者 英語が苦手 幼い頃に父と母を亡くす  
両親が亡くなった後は姉であるイロハ・リエスタと共に数年暮らす  
中学の時に性格や色覚異常のことなどからクラス全員から虐めにあう  
ある日の授業で殺人能力が目覚める

高校時代に始めてヒュージにあう

ヒュージが現れた衝撃の地震でドアや瓦礫などの下敷きになる

救援にきたリリイ達からはもう助からないと判断され見捨てられる  
だが母と父の血の影響で死ぬ事が出来ず生き残る

その後、何もかも破壊をしようと試みる

リリイを殺している最中にマギの力が覚醒

外にいた防衛軍に助けを求めるも麻酔銃を撃たれる

その後防衛軍に捕えられる

防衛軍での実験の最中に防衛軍のトップである人間が勧誘

それに応じて勉学に励む

そして17歳という若さなのにも関わらず、防衛軍幹部養成所の大学へと入学

18歳—養成所を卒業

幹部として働く

配属先で蒼空・J・ヌーベルとあい、互いを深く信じ合う相棒となる

仕事終わりの後のコンビニ辺りで咲楽結月に出会う

咲楽を防衛軍に勧誘

3曹として配属されたクロエ・リスタリオ

他数名を部下として持つ

19歳—防衛軍トップの指示でリリイを育成

最初は怖がられるものの、後々信頼が暑くなっていく

N O D A T A

イロハ・リエスタ

金髪でスタイルがアイドルよりもいい

性格—自分の好きな物には命をかけて取り組む  
幼い頃に両親を亡くす

両親を亡くしたあと弟であるレンと共に暮らす

15歳の時に米軍により拉致られる

6年間アメリカで実験台にされる

研究により改造リリイとなる

21歳—マギの力が抑えきれず研究施設を破壊する

背中には翼が生え、顔は禍々しく荒れている

その後長時間の飛行により日本につく

そこでレンと再開する

NO DATA

リエスタ家

母—凄腕リリイ

マギの力が他のリリイと比べ物にならないほどに所有していた

これは遺伝であり、両親もマギの力が強い 不死身である

母の血はイロハに受け継がれる

父―防衛軍幹部

今のトップより仕事ができる人間 色覚異常者

マギが使える、マギを具現化できる能力を持つ

また拳や脛にマギをため、一時的に攻撃力が上がるという性質を持っていた 不死身である

父の血はレンに受け継がれる

父とレンの色覚異常について

どちらも赤と緑の区別がしにくい色覚異常

これにより防衛軍幹部になるのは苦勞したとの事

咲楽結月

ポニーテールの仕事ができる女

18歳の時両親を亡くし、自分で稼ぐために風俗店の仕事に就く



当時の客と揉め事になり、拉致られる

22歳—客に監禁されていたが隙をつけて逃げることに成功

夜中のコンビニ前でレンとぶつかる

追ってきていた客の男に戻れと要求されるもレンが止めに入りレンに助けられる

駐屯地に運ばれレンに勧誘を受ける

3曹として配属され、人を助けることに一生を捧げることを誓う

24歳—防衛軍の情報部へと転勤

SECRET—DATA レンに恋をしている

あいつはそれに気づいてない

NO DATA

クロエ・リスタリオ

ボブヘア—で少女のような見た目をしている

犬のように懐っこい性格

20歳の時に3曹として配属

配属先でレンに出会い、レンを尊敬する

格闘技術、射撃技術などお世辞にも上手いとはいえないが

根性だけはある女性

21歳—レンがリリーの育成に行ったため別の幹部に育てられる

だがその幹部からはセクハラを受け、任務で会ったレンに助けを求める

SECRET—DATA 咲楽と同様にレンに恋している

あいつはそれに気づいてない

NO DATA

蒼空・J・ヌーベル

見た目はチャライが信頼が厚い人間

リリーである楓・J・ヌーベルの兄

レンは頼れる相棒と見ている

蒼空もレンの事は頼れる相棒だと思っている

階級は2等陸佐

実はレンの方が歳は下である

NO DATA

佐々木燐

白髪のパニーテール

17歳の時のレンと戦う

佐々木藍の母

行方不明になったと、言われていたがレンは生きていること知っていた

人類史上最強なりリイと呼ばれており

ガーデンのりリイとは比べ物にならないほどだ

実績はリエスタ母を殺害

レンを仮死状態まで持っていった

ちなみにレンが唯一、恐れているりリイである

NO DATA

# FIRSTSTORY—仕事—

HUGE—ヒュージ—

それは謎の巨大生命体

ヒュージの出現により我々は破滅の危機に瀕していた

そんなこいつらに対抗する為にありとあらゆる国が一致団結し科学と魔法の力を結

集させた決戦兵器CHARM—チャーム—を開発した

その兵器は10代の女性に高いシンクロ率を示す

チャームを扱う女性の事を人々はこう呼んだ

「リリイ」と

「何—やってんすか—?!」

「っ!ビックリさせんな!」

僕が資料に目を通していると後ろから脅かしてきた

こいつは僕の同僚、蒼良・J・ヌーベル  
フランスと日本人のハーフ

仕事が一・倍でき、ムードメーカー

だがたまに良く分からない事をいいだす

「つーこれは！まさかまさかのマッカーサーではないか!!」

これだよ、これがよく分からない事だよ

おまけに僕の資料を見て何やら興奮してるし…

「おもんねえ事言うな」

「何故だ、何故今ので笑ってくれなかった…!」

ああ…もう訳分からん

笑って欲しいならもつと面白いことしてくれよ…

「むむむ…何故お前がリリーの資料なんか見ておるー?」

「急にどうした?お前も聞いているだろ」

考えていたのか少し間が空いた

数秒後に「あ!そうだった!」みたいな顔でこちらを見る

「俺の記憶が正しければお前は、百合ヶ丘に行くんだったな!」

「そう正解だ、僕は明日から百合ヶ丘に行くことになった…」

「?なんでそんなに悲しそうな顔してんだ?俺と離れるのが寂しいのかあ?」

「そんなんじやねえよ、ただなんで俺なんだろうって」

「どういう事だ?」

「だから、なんで俺が百合ヶ丘の子供達に戦闘訓練しないといけないのかっていう事だよ」

「そんなもん決まってるだろ」

「何が決まってるんだよ、僕らは防衛軍の幹部:他にやる事があるのに:」

「だからだろ?幹部だからこそだろ?」

不思議そうな顔をし首を傾けながら続けて発言する

「言っておくけどなーお前さんはめっちゃくちゃ強いぜー、格闘技術や射撃技術、共に優れてるし頭も普通に良い:そして最後の強いところは」

「マギを操れんだから」

「そんな事で僕が?正気か?」

「正気かどうかは上の人に聞いてこい、ただ俺はあんたが百合ヶ丘に行った方が良くと思うぞ」

僕は鼻で笑った

相変わらずの馬鹿だ

今までどんなけ馬鹿に助けられたのだろう

僕にはない発想、視点から僕の意見を論破したり助けたりくれたりした

だがそんな馬鹿とも今日でお別れ

「ま、頑張つてこいよ！妹によろしくな！頑張れよ！我らの最強幹部こと、レン・リエス  
タ幹部！」

「ああ！頑張るよ！お前も頑張れよ！蒼良・J・ヌーベル幹部！」

「おう！」

### 数週間前

レンは任務を終えた後呼び出しされていた

「いやいや！ちよつと待つてください！」

防衛軍のトップの人の部屋でどなる声が聞こえる

「何故です!?!僕は幹部ですよ?!ましてや最前線で戦っている人間ですよ?!」

「そうだ、だから君には行ってもらう」

「は、はあ?!」

「君はヒュージとの戦闘においてとても重要な人物である事は承知だ」

「んじやあなんで?!」

「だからこそ! 君のような人物をもっと増やすのにはこの方法しかないんだ!」

「く、くそが!」

「君がリリイをあまり好んでいない事も分かる…だが今はヒュージを1匹でも多く倒さないといけないんだ!」

「つー!」

確かにヒュージを倒さないといけない、だが僕はリリイがそんなに好きではない

しかしよくよく考えてみればここで僕が我慢して世界を助ける人材を増やすか、我慢せずに人類滅亡までいくか…僕の結論は…

「分かりました、行かせていただきます」

「おお! ありがとう!」

僕は世界を助ける方にした

人類滅亡なんてやだね

「あ、言い忘れていたが報酬はきちんとあるから安心したまえ」

報酬か…世界を救えるならそれでいい

「では、僕はこれで失礼させていただきます!」



互いに敬礼をし、部屋を後にした

これが百合ヶ丘に行くことになった流れだ

なのであの時の僕は行きますなんて言っただら

ああ、ダメだ！僕は人類に貢献すると考える！

とりあえず今日はもう寝よう！明日の事は明日考えればいい！

翌日

僕は朝早くから支度をし、所属駐屯地まで行った

駐屯地につくとみんなが戯れ、出迎えてくれた

僕はその中を通る

通っている最中に応援の声が沢山上がる

「頑張れー！」「死ぬんじやねえぞ！最強さん！」「強いリリイを作ってくれよな！」

まるで海外任務の時みたいだ

ま、言うて遠いか

声が飛び交う中、僕はヘリの所まで行った

その時も応援の声が聞こえた

みんな僕を応援してくれている、みんなの期待に応えるという意識が高まった  
僕はヘリに乗り出発準備を済ませた

その直後にヘリは離陸した

みんなは手を振っていた

「ありがとな、みんな」

思わず声に出してしまった

そして次第にみんなの事は見えなくなつた

僕はこの時決心した

必ず強いリリイを増やしてやると

百合ヶ丘に着くとまず最初は理事長さんに挨拶

3回ドアをノックし開けて入る

そして堂々と歩き、理事長の前で止まり敬礼をしながら挨拶をする

「防衛軍幹部を務めさせて頂いていた、レン・リエスタです、今回はリリイの育成という  
ことでここに百合ヶ丘女学院に来させて頂きました」

「協力感謝する、もうすぐ集会が始まるので是非参加を」  
「は、はいそうさせていただきます」

—集会—

この集会は生徒会が司会をしているようだ  
子供なのによくやるな—

もうそろそろ言われるんじゃないかな？

呼ばれたら出てきて自己紹介だったよな？

なんで来たばっかなのに：

「今日は新しい教導官の方がいらっしやてます、どうぞ出てきてください」

もう出ていいんだよな？よし出よう

僕はマイクがある所までゆっくり歩きそこで止まりマイクに向かって喋り出す

「初めましてみなさん、私は防衛軍の幹部をしていた、レン・リエスタという者です。訳あつてみなさんの訓練を担当する事になりました、よろしくお願いします」

礼をしゆつくり歩き元の席へと戻る

みんな不思議そうな顔をしている

それはそうだろう、なんせここは「女学院」男性が来るところではないし、来ても意

味はない

「今日からレン教導官の訓練が実装されます、みなさんくれぐれも失礼がないように」  
生徒会が司会として発言をした

え？今日から?!

ここにいるみんな思っただろう、僕も聞いていない

どういう事だ:

その後の集会の話は僕には関係無いので1mmも聞いていなかった

集会が終わりちよつとした休み時間

僕は校舎の内装などを把握しておきたかったので少し見て回った

綺麗な内装

充実した設備

ここは駐屯地と比べて天国だ

歩き疲れたので少し休憩しようとし、目に留まった椅子に腰をかけると周りのリリイ  
からの声が聞こえる

内容は僕の事ばっかだ

「あの教導官どんな人だろー？」とか

「私達より強いのー？」とか

疑問が様々だ

僕がここにいるとなんだが浮いているみたいで嫌だったので場所移動をするため立ち、歩こうとした

その時、誰かにぶつかってしまった

ピンク髪で目には希望のような光、一見普通の女性に見える

「あ、大丈夫ですか？」

「は、はい、すみません」

「ああ、こつちもすみません僕の不注意により転けてしまって」

「いえいえ！とんでもない！って次の授業に間に合わないー」

「あ、すみません、留めてしまって」

「こちらもすみません！ではまたいつかー！」

走りながら謝罪をしてきた

僕ももう授業がある

グラウンドに行かないと

って流石に軍服じゃ運動出来ないか

でも普段着はスーツ、スーツでいいのか？ いったか  
僕はスーツに着替えてグラウンドへと向かった

グラウンドへ向かうともう整列していたリリイ達の姿があつた  
流石お嬢様学校の方々だ

僕がみんなの前まで行くと号令係のような人が号令をしだした  
号令が終わるとみんな静かに僕の方を向いた

指示を待っている…どうしよう何も考えてなかつた  
少し焦っている…一人のリリイが手を上げ発言する

「なんででしょうか？」

「教官って私達より強いのか？」

その子の友達であろうリリイが笑う

これがお嬢様学校の方々か…少しガツカリだ

ま、みんながみんなこういう人じゃないだろう

「その質問については僕にも分かりませんが、なので今試してみてはいかがでしょうか？  
あ！今日はそれが良いな！よし！今日はみなさん全員が本気で僕を殺りにきてくださ  
い！」

「上等じゃない！みんな殺るわよ！」

どうやらこいつがリーダーっぽいな

ま、なんでもいいや

本気でやれるんだったらなんでもいい

リリイ達は僕を囲うかのような配置についた

風が少し吹く中でリリイ達は

一斉に動き出した

360度からチャームの刃が降りてくる

だが僕はそんなのも効かない…

「はっ！」

僕は全員吹っ飛ばした

これが僕の力である

「今何が起きて…？」

寝転がりながら僕の方を見るリリイ

「簡単です、原理は分かりませんが」

僕はリーダー的なリリイに話し続ける

「君たちのように兵器にマジを貯める…ではなく僕はこの手や足からマジを出してそれ

で攻撃する…なあ？簡単だろ？」

「じゃ、じゃあ今のつて…」

「そうです、マギを形にしてそれをみなさんに当てただけです

あ、もちろん僕のマギを兵器に入れることだって可能ですよ」

そうこれが僕の1つの力

マギを形にしてそれを自由自在に飛ばしたりする

2つ目の力は…

「拳の甲や足の拗ねにマギをため威力を上げる…」

どっからともなく現れた生徒会のリリイに言われた

「正解、よく知っているね」

「資料を読みましたので、それにしてもあなた達！先生に失礼がないようにと言ったは

ずですよね?!どういう事でしょうか？説明して頂きましょうか？」

怖いナリリイって者は

「後の時間は反省文の時間にしてください！分かりましたね？返事は?!」

「は、はい」

「生徒会は怖いですね」

「怖くありませんよ、それにあなた方防衛軍の教官の方が怖いのでは？」



「おお、本当によく知っているね」

生徒会のリリイは「はあ」とため息をつく

「1つ聞きたいんだけどいいか？」

「なんででしょうか？」

「僕の訓練意味はあるのか？」

少し考えた顔をしている…

それほどどうでもいいのか？

「…すみません、私にも分かりません…」

「そうか…まあ然か…ありがとな」

僕は生徒会のリリイに背を向けながら感謝した

「あの人…本当に殺人鬼なの？」

何か言ったと思うが聞こえなかった

どうでもいい事だと信じよう

にしても今日は眠い

昨日全然寝れなかったからかな

僕はあくびをしながらそんな事を考える

何処に行く訳でもないのにひたすら歩いている

ここは暇だ

仕事がない

初日ということもあると思うがな…

つてかなんでこんなにも騒がしい？

みんな焦って…？放送？

「レン・リエスタ教員至急門までお越してください」

生徒会か？僕が呼ばれている

とりあえず行きますかー

「今回はレギオンでの討伐任務です！みなさんくれぐれもお気を付けて！では任務開始

！」

「はいー！」

生徒会の開始合図で一斉に動き出すリリイ達

「なんの騒ぎだ？生徒会さん」

「私は生徒会という名前ではありません、私は…」

「分かっている分かってる、出江さんだろ？それで今の状況は？」

「ヒュージが近くで出現、順調にこちらに向かつて来ています」

「そうか」

確か警報みたいなの鳴ってたな…このせいかな

「それで僕も出ればいいのか？」

「はい…ですがまだ貴方への信頼がありません…なのであるレギオンと行動してもらいます」

「何故だ？僕への信頼？」

「忘れたとは言わせません、貴方元殺人鬼だったのでしょ？」

「?!よ、よく知ってるなあー」

そうだ僕は元殺人鬼、だから疑問なんだ、何故今僕はここに居るのかって まさか知られていたとは 本当に驚きだ

やっぱりそうだよな…信頼なんてないか

「分かった、それで一緒に行動するレギオンは？」

「一柳隊です」

「一柳隊？」

「はい」

「彼女らの事か？」

「はい」

確か、1年生の一柳？が隊長でこの学院で上位の強さを誇る白井夢結がいるんだよな？他に優秀なリリイがいるとか

「よろしくお願いしますね、一柳隊のみなさん」

みんな怖い顔でこちらを見ている

一部は怖い顔ではなかったが

よっぽど気に入らないのかな？僕の事

昔の僕を悔やむぜ…：なんであん時殺しまくったんだろうな

「一柳隊のみなさん、何かあればすぐに殺つても構いませんので」

「怖いこと言わないでください?!出江さん！」

「分かりました、梨璃行くわよ」

「は、はい！お姉様！」

「出江さん、きよ今日僕死ぬかな？」

「貴方の行動次第です」

「梨璃何かあつたらすぐに言いなさい」

「はい！お姉様！」

やっぱり僕浮いてんじゃないの

「！距離100mヒュージ発見！」

「撃破しに行くわよ！」

「いつもこんななのか？一柳隊って」

「そうじゃよ！戦闘の時は堅苦しいのじゃ！」

「へーって君は確か……」

「ミリアム・ヒルデガルト・V・グロピウスじゃ！」

「長いからミリアムって呼ばせてもらう」

「喋ってないで手伝えですの！」

「そうだな、ミリアムさん僕らも戦闘に参加しましょう」

「分かったのじゃ！」

「レン・リエスタ教導官、貴方の力見せてもらうわ」

「？お姉様何か言いましたか？」

「いいえ梨璃なんでもないわ」

「レン教導官！もうすぐそこまで敵が来てるぞ！」

「梅さん？だったけな、ご心配なく」

僕は袖を捲り右腕が関節まで見えている

目を閉じて

「すうー」と深い呼吸をする

「はあー」とたくさん吐き出す

息が吸い終わったと同時に敵が覆いかぶさってきた

目を開け右腕に集中をやる

この時の俺の右腕はモザイクのような物が覆っている

これが「マギ」だ

ヒュージが攻撃すると共に俺もヒュージに右腕を思いつきり当てる

当てた直後にはヒュージは真つ二つになっていた

一柳隊のみんなは驚いた顔で見ている

「やっぱり素手は痛いな」

俺の右腕は煙のような物が出ている

ヒュージとの摩擦による物だ

「白井つて言ったか？俺の事見てる暇あんのか？」

「つーしまっ…」

夢結は瞬時に前を向くがもう手遅れであつた

だがそのヒュージも真つ二つに

「手間掛けさせんなよ、最強の夢結さん」

夢結の前にはいたのはレンであつた

一瞬にして夢結の前までいきヒュージを倒した

「俺が指示していいのか分かんねえけど、ここにいたらみんな死んじまうぞ」

「どういう事ですか？」

梨璃が聞く、つてかこの子どつかで見た事あるようになつてそんなのはどうでもいい

「今俺らはレギオンで討伐している、だが周りのレギオンを見てみる、少し取りこぼしがある、そのヒュージ達が俺らを狙つてるかもしれない、ここにいれば囲まれるだろう」

「でもレン教員ならいけるんじゃないのか？」

「梅さん、確かに俺一人でもいける、だがあんた達を守れる自信はないそれに現時点で俺

らも取りこぼしがある、ここは百合ヶ丘まで後退して取りこぼしを倒すのはどうだ？」

「確かにそれは名案じゃ、百合ヶ丘まで後退すれば囲まれる心配はないし、このレギオン

「確かにそれは名案じゃ、百合ヶ丘まで後退すれば囲まれる心配はないし、このレギオン

なら取りこぼしなんじゃ楽勝じゃろ」

「さて、ここを守らないと後退しても数が増えるだけだ」

確かに……だが今百合ヶ丘にまで戻らなければ百合ヶ丘が潰されちまう

「分かった、百合ヶ丘までは俺一人で行く」

「いやダメだ、出江さんの言葉を忘れたのか？」

「忘れてなんかいないよ、しかもここから百合ヶ丘まではヒュージしかない、つまりリイへの影響は0、殺す相手もいなければ俺も殺しはしねえ、それに元々君らを殺す気はないしな」

「……我々一柳隊はここを死守します、レン先生は百合ヶ丘まで後退を」

「ちよつと梨璃……」

「責任は私がとります、私はこのレギオンの隊長です」

「理解がはやい隊長で良かった」

俺は急いで百合ヶ丘に戻る

「正気なの？ 梨璃あの人には元殺人鬼なのよ？」

”元”でしょ？ お姉様！ それに私にはあの人殺人鬼には見えませんでしたよ」

「梨璃……」

「あの人百合ヶ丘を助けてくれる事を信じましょう、お姉様！」



「分かったわ、梨璃」

何故梨璃は俺の事を信じてくれたんだろうな

俺の意見が通るとは思ってた

とりあえず百合ヶ丘を守らないとな…！

## SECONDSTORY—信賴—

「分かった、百合ヶ丘までは俺一人で行く」

「いやダメだ、出江さんの言葉を忘れたのか？」

「忘れてなんかいないよ、しかもここから百合ヶ丘まではヒュージしかない、つまりリイへの影響は0、殺す相手もいなければ俺も殺しはしねえ、それに元々君らを殺す気はないしな」

「…我々一柳隊はここを死守します、レン先生は百合ヶ丘まで後退を」

「ちよつと梨璃…」

「責任は私がとります、私はこのレギオンの隊長です」

理解がはやい隊長で良かった…

とつとと百合ヶ丘に戻ってヒュージを討伐しないと…

それにしてもなんだこの林は

なんでこんなに沢山あんだよ

このせいで視界が…！

「くっそおー！」

横から急に飛び出てきやがって…！

なんで今ここにヒュージがいるんだよ！

百合ヶ丘に向かつてるはずじゃないのか!?

俺の前にはヒュージが一体

所々からガサガサという音が聞こえる

あと何匹かいるだろう

ここで討伐するのもありだが百合ヶ丘が心配だ

ここは上手く切り抜けよう

俺は走り出した

木の枝を利用しヒュージの攻撃を上手く躲す

「案外動きが単純だな」

どのヒュージも対象にしか目がいつてない

俺は急いで百合ヶ丘に戻った

道中ヒュージの攻撃に合うも、上手く躲す

だがヒュージは俺の事を追ってきていた…

「やつと百合ヶ丘が見えてきた…まだここにはヒュージは…!!」

百合ヶ丘が見えたと共にヒュージも見えた

百合ヶ丘に残ってるリリイ達が心配だ、急いで行かねえと!

「よつ…と、やつと着いた…この状況は…」

「キヤー!!!」

!悲鳴?!

俺は悲鳴の元へすぐに駆け寄った

「お、おい!無事…っ!なんだよ…これ」

俺は膝から崩れ落ちた

悲鳴の主は無惨に殺された

それだけではない他のリリイも刺殺されたりしている

そこらじゅうに屍が転がっている

「な、な、なんでだよ…リリイは最前線でヒュージと戦ってたんだろ?なんでこんなにも無惨に…っ!あつたま痛つてえ」

なんだこの頭痛!まさかあん時を思い出したのか?にしても痛すぎるぞ

この屍達を見て俺が殺人鬼だった頃を思い出す…

あの時何人殺した？どれくらいの人間を悲しませた？

「ああ！もう訳わつかんねえよ！つ！クソ！治れ！治れ！」

頭痛は痛みを増していく一方

心の整理が追いついていかない、本当に訳が分からない

「先生！助けて！死にたくないよ！先生！先生！」

どこからか分からない助けを要請する声

「くっ！待ってろ！今助けてやる！」

俺は手を開きヒュージにマギを当てる

見事ヒットし、リリイを助けだす

俺はまだ立てない、頭が痛すぎる

「君はまだ生き残っているリリイを救ってきてくれ」

「え？教導官をここに置いてですか？」

「俺なら大丈夫だ、さあ行け！」

「了解しました！」

俺はどうとう倒れ込んでしまった

まだ頭が痛い

後ろで戦っている音が聞こえる今すぐにでも助けてやりたい  
だが体が重い…重すぎる

こんな事になるんだったら殺人鬼なんかならなかったら良かった

「先生！ヒュージが一体そっちに！」

猛スピードでこちらに向かってくるヒュージ

「先生！はやくしないと！きや！」

よそ見していたリイがヒュージの攻撃をくらった

お互い戦闘不能

「てええい！」

なんだ…目の前にいたヒュージが倒れて…

誰だ…この子

青髪ロングの女性？こんな子いたか？

いや、工廠科にいたような…

「立ってますか？」

手を俺の方に出し、笑顔で言ってくる

俺は手を借り立った

まだ体は重いがさつき程ではない

「ありがとう」

「いえいえー」

やり取りをしているとまたもやヒュージが突撃してくる

俺は足にマジを集中させた

ヒュージが突進すると同時に蹴りを炸裂される

ヒュージは真つ二つ

「ーそっださつきのリリイ！」

駆け寄るとそこにはもう瀕死のリリイが…

「大丈夫か？」

「ダメっぽい…嫌だよ死にたくないよ…」

涙を流すリリイ

「ありがとうな、我が戦友よ、ゆっくり休みたまえ…」

号泣するリリイ

まるで赤ん坊のようだ

「何言ってるんですか?!この子はまだ…」

「真島さん?って言ったか?この子はもう助からない、腹見てみるよ」

このリリイの腹には大きい空洞が出来ていた

もう助からない

次第にリリイの泣き声は収まってき、聞こえなくなつたと思えば

もう死んでいた

「また1つ命が消えた」

「真島さん、まだ生きてたい？」

「もちろん！」

「明るいな…真島さんここが最終防衛線です！2人しかいませんが食い止めましょう  
！」

「了解！」

俺は何をしていたんだろう

人を殺さなければ1つの命を救っていた

俺は何をしてたんだろう…

「っ！でや！」



「おりゃー！」

2人で何匹片付けただろうか

「もう腕が痛てえな」

摩擦で煙が出て、もう痛い

「私ももう限界」

互いに限界に等しいな

「！まだヒュージが……」

「う、嘘……まさか」

俺たちの背後にいたのは今までのヒュージとは比べ物にはならないほどの大きいヒュージが

「なんだよこれ、めっちゃデケエじゃねえか！」

「ギガント級……いやアルトラ級」

「資料で見た事あるがこんなデケエとはな」

「アルトラ級がここにいてるって事は……最前線のリリイは！」

「生きてると信じよう、今はこいつを殺さねえと」

「無理よ！アルトラ級はノインヴェルト戦術しか無理なのよ！」

「分かってる！だが今ここで止めないといけないんだ」

無理なのは重々承知だ

だが俺の任務はこの防衛

しつかり任務はやらないとな

「真島！とりあえず君は中に入っというて！」

「1人で戦うおつもりですか？！」

「あんた、もう限界なんだろう！」

「私はまだ……」

「こっちは君に死なれたら困るんだよ！俺の任務が完了出来ないんだよ！だから中に入っというて！」

「…分かりました、幸運を祈ります」

「さあ！かかってこい！ヒュージ！」

ノインヴェルト戦術並の破壊力がないとこいつは殺せない  
俺1人でレジオン1つになれって事だな

簡単じゃないか

だがマギを溜めるのには少し時間がかかるし、隙が生じる  
こいつを行動不能にする必要がある

宙に浮いてるから足がないし、おまけに

「あぶねー」

相手が撃ってくる砲弾のような物はデカいし当たると爆発する  
俺も遠くからマギを撃つがバリアのような物で弾かれる  
と言つて近接戦にもつていくと負けちまう：

ここは近接戦にかけるか：遠距離じゃ俺のマギは無理だ

「そのかつてえ腕を頂戴するぜ」

今更だがこのヒューズ蟹みたいだな

甲殻で自分を守り近接戦の時は、はさみの様な腕で相手を殺す

よし、行動開始だ

「当たれ！」

俺は空中でまずマギを当てる

弾かれるのは知っている

だが弾いた後はこちらを向くはずだ

その隙に背後に廻る

こいつの背後には甲殻が無いことを信じる、そう蟹のように無いことを

よし当たった

当たった直後に俺はヒュージの下を通り背後に廻る

案の定、こいつはさっき俺がいた所を見ている

「ビンゴーやっぱり甲殻はない！」

あとは攻撃を加えるだけ！

「おおお！」

俺は手刀で攻撃を加えようとした

しかし…

「図体がデカいから動き遅えと思ったがちがった…か」

俺の手刀を自慢の硬い腕でガードされた  
そして次は相手からの攻撃

次々と殴ってくる

バク宙で躲したり捌いたりしている

だが1つ1つとても重い

「くっ！押されてる！」

反撃の手がない

どうしたらこの場面を切り抜けられる？

「ぐっ！容赦ねえな……！」

左腕にいいストレート打ちやがって

人が考えてるつてのに……

左腕はもう使えねえか

こいつをしつかり観察しよう……

こいつ腕が太い

人間1人は乗れそうだ

この腕をつたって顔面かどっかに1発入れる  
なかなか良いかもな

そうと決まれば決行だ

「おい！どうした？さっきのパンチで満足しちゃったか？」

煽り気味で問いかける

その言葉に反応し俺にパンチを打ってくる

「ふん、かかったな」

鼻で笑ってやった

パンチが俺の所に届く前に腕にのった

「腕にのるっての1度はやってみたかったんだよ」

俺は胴体目掛けて走った

走っている時俺は手のひらにマジをためた

そして胴体はもう目の前

俺は勢いを殺さずに攻撃を与える

「くらいな！俺の本気の掌底！！」

直後爆発のような事が起きる

「なんだ、案外いけんじゃん」

何がノインヴェルト戦術だ

俺の本気の掌底で穴空くじゃん

ヒュージの胴体はともデカい穴が空いていた

さてトドメだ

俺はまた右手にマギをためた

そしてボールのような形にした

それを垂直の上に投げた

次は右足にマギをためた

そしてためたマギの力でボールの所までいった

「高っけえ」

率直な感想である

「さあ！もういい加減死んでくれよ！」

俺は右足でボールをヒュージ目掛けて蹴った

勢いよくヒュージに飛んでいき見事HITした

当たった直後に大爆発が起きた

爆発が起きた直後に意識を失ってしまった

次起きたのは最前線であつた……

「いつてて……リリイ？まさかここまで飛ばされたのか?!」

俺が想像していた倍飛ばされていた

だが飛ばされたのは好都合だ

俺は立ち上がった

宙に浮いて周りを見渡す

「!・梨璃!・後ろ!」

白井の声だ

梨璃がピンチだ

俺は梨璃の所までいった

着いた直後右腕にマギをためた

俺は手でヒュージを殺した

「!・柳!・後ろには気をつけろよ!」

「はい!・つてあれ?!先生なんでここに?!」

「話は後だ!・今は囲まれてる!・討伐を優先だ」

「はい!」



「俺と梨璃と白井でここを食い止める！ユージアと神琳で狙撃ポイントを探してそこか  
ら援護だ、他は自由に殺してこい！」

「了解！」

全員が承知したようだ

（凄いな…これが幹部の力…!）

「?どうした一柳？」

「いえ!何でもありません！」

「なら行くぞ！」

また無双だ

今日で2回目くらいだ

いつの間にか数は減っていた

だが所々煙が上がっている

視界が悪いな…

とりあえず今は隊員の安全確認だ

「梨璃!そっちは順調か?!」

「はい！大丈夫です！」

「白井は?!」

「……………」

「白井!?白井?!」

「夢結様?…」

「梨璃はここを見張っておけ！白井の様子を見てくる！」

「待ってくだ…！行っちゃった…」

「梨璃—！夢結は?!」

「多分ではありませんが…」

「まさか…！」

ある建物の上

そこに白井がいた

煙が凄く視界が悪く、長時間はいられない

「おい！白井！何やってんだよ、何呑気にリリーの死体なんか見てんだよ！」

「お…姉…様…」

掠れた声で何か言っている

亡くなった大切な人なのだろうか

「白井帰るぞー！もうヒュージはいない！」

そう言うとうと白井は自分のチャームを持った

「よしー！帰るぞー！」

白井が俺の方を向いた直後…

「おいおい…そんなデカい剣の戦い方は習ってないから反則だろ…」

向いた直後に俺の顔目掛けて自身のチャームを振った

「確かあんたのレアスキル…ルナティックトランサーって言ったな？狂気と紙一重…そんなんんん持ち歩くなよ…危ねえじゃん」

ヒュージと近い力…今までと一緒に、今までのヒュージとは違うか

どつちか分かんねえけどとりあえず失神させねえとみんなやられちま…

「チャーム!?誰のだ?!」

どっからか降ってき

地面に突き刺さった誰かのチャーム

辺りを見渡すも煙のせいで見えない！

誰のチャームだ?!

「あらあら…先生…奇遇ですねえ…」

ピンク髪の女の子…赤いなんかを着けてる

「何が奇遇なんだ？」

「あら？ 貴方も決闘を申し込みに来た訳ではなくって？」

「誰が今決闘なんか申し込む…！ 忠告だ！ 遠藤さん！ この白井は普通じゃねえ」

遠藤重羅椰…面倒なのが来たな…

「いいか！ 君は今すぐにも逃げるんだ」

「それは私が弱いと言ってますの？」

「違う！ 君たちのような優秀であるリリイに何かあつたら大問題って事…!!!」

言い合つてる途中に白井は猛スピードでこちらに突進してくる

俺は遠藤を庇いながらマギで白井を飛ばした

「許してくれ、白井」

「そんでどうすんだ？ 遠藤さん？ 戦うか戦わないか」

「戦いますわよ！」

以外だ…こんなにも危ない奴に立ち向かうとは

こいつ…リリイ的でも人柄でも見込みがある

「足だけは引つ張るなよ」

「私がへマなんてした事ありませんわ」

こいつを守りながら白井と戦う：防衛軍にいた方が楽だったな！：

亜羅椰が先行して攻撃を仕掛ける

見事に白井は全て捌く

が2人いれば話は別だ

1人が攻撃しその直後にもう1人が攻撃を仕掛ける  
隙が生じ攻撃を確実に当てれる

亜羅椰がチャームを振ると同時に俺は蹴りを当てる  
単純な作業って言うやつだ

だがどちらか1人が倒れば2人とも死んでしまう

「ぐっ！はっ!!」

白井が攻撃に耐え亜羅椰を吹っ飛ばす

俺は1人でとりあえず白井を抑える

「亜羅椰！大丈夫か?!」

「……」

失神してやがる、記憶があるといいが：

クソ、どうするこの状況

亜羅椰を助けるか白井を攻撃するか

どっちを選んでも1人は死ぬような気が…

「しまった！」

白井が俺の押さえをなぎ払い亜羅椰に攻撃を仕掛ける

「亜羅椰！」

「…ん？…っ！」

目が覚めたがもう反撃出来ない距離

だが俺も、白井とほぼ同距離

庇う事までは出来そうだ…！

「亜羅椰！ちよつと耐えてくれ！」

「耐えてくれて何に…ってちよつと…／／／」

俺は亜羅椰を抱きしめる形になった

直後に俺はマギを使ったシールドのような物で白井に攻撃した

その衝撃で白井との距離は離れた

「亜羅椰…大丈夫か？」

俺は亜羅椰の目を見て問いかけた

「私…ファーストネーム…許して…ない…／／／」

「あ、ああすまん、でもあんたが無事で良かった」

俺は微笑んだ、無事なのは本当に嬉しい

「…！／／／」

「とりあえず遠藤さんは救援を要請、俺は白井を通常に戻す」

「あ、貴方怪我して…」

「こんなの直ぐに治るよ」

さっきの白井の攻撃で背中に大きい傷口があつたが

今ここで白井を止めないといけない

「ほら、分かったならいけいけ」

「はーやつぱりスーツって戦いにくいな」

俺は羽織っていたジャケットを脱いだ

「さ、これで楽になった」

なあ白井、あんたどうやったら止まるんだ？

「うっ!!!」

まずは白井がチャームを振ってきた  
それを躲す

躲したあと手首を掴んで投げる

「ぬあ!!」

「やっぱり合気道はやつとくべきだな」

白井はすぐさま体制を立て直した

直後、素早い蹴りがとんでくるもしつかり手のひらでガードした

そしてみぞおちに1発と蹴りを入れる

顔を狙い上段蹴りをしたが躲された

あいにく俺は上段が得意じゃない

白井はチャームを振ってきた

俺は武器を持っている方の腕を反時計回りした

見事チャームは白井の手から地面に落ち、武装解除に成功する

素手対素手、俺の方が圧倒的に有利

白井は素手で俺に攻撃をくわえる

まずは頭に突き

それを軽々と受け止め一本背負い



「対人格闘訓練はしてなかったのか？ 隙がありすぎるぞ」

俺は白井を地面に抑えながらいう

「ちよつと眠つてもらおうぞ」

俺は白井の首に軽く手で刺激を与える

そうすると白井の力はどんどんと抜けていき眠つた

髪色が白から元の色へと変化した

白井が眠つたあと俺は

「はあはあめっちゃ疲れたー」

なんとなく関西弁で独り言を言っていた

そして白井と同様に寝転がった

「今日は一段としんどかったなー」

アルトラ級を倒し他の雑魚も殺し、白井を抑えた

本当にしんどかった

これからこういう日々が続くとなると思いやられる…

僕はいままで生きれるのだろうか

「流石だな…レン・リエスター等陸佐」

へりの音と聞き覚えのある人の声が聞こえた

後ろを向くと防衛軍のお偉いさん

「お疲れ様です、何故貴方がここに？」

立ち上がり敬礼する

「君の活躍を見に来たんだよ…」

「嘘は苦手ですか？」

「おや、バレたかい？」

「バレバレです、どうせ救援に来たんでしょ」

「流石だ、君の言う通り百合ヶ丘から救援の要請が防衛軍にも入ってな、だが私らは不必要だったようだな」

「まさか貴方もここら辺の駐屯地になったんですか？」

「もちろんだとも…まここから少し遠いかな…」

「レン教導官!!何処にいるんですか?!」

梨璃の声？

「おや君の救援が来たようだ、それじゃ私たちはここらへんで」

「お疲れ様でした」

敬礼をしながら告げる

すると相手も敬礼をしながら

「お疲れ様でした、君の活躍見ているぞ」と微笑んだ

その後ヘリはどこかに去っていった

「梨璃ー！！ここだー！！」

「あー！いたいたー！！」

煙から出てきたのは一柳隊みんなだ

「先生、大丈夫でした…かって、えー！！」

「んー？どうした？梨璃？…え！？」

「神琳！見てみて！」

「んーどうかしましたの？ユージアさ…っ！！」

「まさか、止めるなんて…」

「夢結様が寝てる…」

「レン教導官、あんた最強すぎじゃ」

みんな夢結の方をみて驚いている

「何でみんなそんなに驚いてんだ？白井が何かおかしいのか？」

「おかしいも何も、夢結を止めるなんて大した人間だな」

梅が苦笑いしている

「あ、そういえば楓って言ったか？」

「はい、わたくしが楓・J・ヌーベルですわ」

「ここに来る前に君のお兄さんが「大好きだ」と伝えといてくれって」

「な、何を言ってますの?!あの人!!」

—柳隊はみんな笑っていた

なんかこいつらとなら上手くやっついていけそうだ

## THIRD STORY—日常—

あの後、百合ヶ丘に戻り僕は自分の寮で寝た  
ちよつと汚かったので掃除した

戦闘後なのに掃除した

しんどかった

朝になると窓から日光が入ってくる

時計のアラームが鬱陶しいが起きないといけない

昨日買っておいた、ヨーグルトを食べる

朝はこれで充分だ

防衛軍の時もそうだった

僕だけヨーグルト1つのみ

朝は重いものは食べれない

ヨーグルトを食べた後はしっかりと歯磨きをし

ちなみに僕はネクタイを付けない

面倒だからだ

Yシャツを着、黒色のジャケットを着る

軍服があるが正直言つて動きにくいから嫌だ

用事が終わり次第仕事が始まる

今日は午前何もないので見回りになる

百合ヶ丘でも問題は起こる

授業がない教官は見回り

ま、正直サボりつてやつだ

だがその見回りでも生徒に話しかけられる時がある

話しかけられたら、勉強の事とか戦術など色々な事を聞かれる

と言われているがどうやらみんな僕の事が怖いらしい

そりやそうだな、女性ならまだしも僕男だもん

そりや怖えよ

外のベンチに座りながらそんな事を考えている

これが暇つてやつか

なんて平和だ

でもどこからか視線を感じる

「誰だろうなー？もしかしてピンク髪であるレギオンの隊長じゃないかなー？」

「！あはは…バレちゃいましたか」

「僕が見回りを初めてからなんでつけてきてるんだ？」

「え！そこまでー!!？」

「バレバレだよ、でなんでつけてきたんだよ？」

「えーと昨日の戦闘についてなんですけど…」

「戦闘？君たちには難しいと思うが？マギを形にして攻撃するの」

「あ、違います違います！戦い方じゃなくて、指示の仕方です！」

「指示？」

「はい！あんなにもはやくて正確な指示どうやったら出せるんだろうって思ってた」

指示…そんな事もやったな

「…こればかりは経験だからな、上手になるかは分からないけど僕が指示を出す時に気をつけている事を挙げるよ」

「はい！是非！」

「まずあーつは、周りの状況だね。人がどれだけ動けるか僕らは今どんな環境にいるのかって言う事を意識しているね」

「ほうほう」

「…? さつきから何やってんの?」

「メモです! どうぞお気に召さらず!」

「わ、分かった、2 つ目はできるだけそれぞれの人に応じた指示をしてあげる事」

「?」

「良く分からなかった?」

「はい…すみません」

「大丈夫だよ、僕も説明が下手でごめんね、話を戻すけど…例えばユージアさんなら狙撃が得意だから遠いところについて援護とか白井さんなら強いから先行して攻撃してとか」

「なるほど…」

「これが個人的に重要だと思う、先の事を考えるって事かな」

「具体的にはどのような事でしょうか?」

「例えば、ここに人を配置していいのかとかここ行ったら囲まれるとか、とりあえず先の事を考えて悪いと思ったら捨てるかな」

「凄いい、それをあんな短時間で?!」

急に顔の距離を縮めてくる

「か、幹部の仕事はそれだったから、慣れてるだけだよ…はは」



苦笑いをしながら言う

「なるほど：先生！ありがとうございます！参考にさせていただきます！」  
「力になれて嬉しいよ」

「あ、先生！放課後私たちレギオンの部屋来ませんか?！」

また、距離を一瞬にして詰めてくる

「じ、時間が空いていたら是非行かせてもらおうよ」

一柳はルンルン気分はどこかへ去っていった

僕も見回りを再開しないと

「サボりですか?」

移動しようとし、立ち上がった時に誰かの声が聞こえた

「いや、今から再開するところだよ、出江さん」

「なら大丈夫ですね」

僕は出江を退け、室内に入ろうとすると

「貴方が、夢結を抑えたと聞きました」

「だからなんですか？僕はそれが仕事です、驚かれるような事はしてません」

「どのようなにして夢結を止めたのですか?」

「ただ戦って気絶させただけです、あ、こちらからも話があった、近々

訓練に対人格闘を実装します」

「対人？不意味では？」

「僕らより大きいヒュージ、人に刃物を当てる事が容易くなればヒュージなんて簡単でしょう、それに今回は出ませんでした：最近のヒュージは凄いですよね、人型のヒュージも確認されてる、僕らと一緒にの身長で僕らと一緒にの体重、だが戦い方が僕らとは違うだけ、いつ現れても良いように訓練させてもらいます」

僕が防衛軍の時はもう人型は確認されていた、これからもっと増えるだろう、その為にも訓練しないと

僕は見回りを再開した

その後は特に問題はなく

お昼になった

お昼、特に何も無い

僕はお昼を抜いている

食欲が湧かないし、お腹空かないし

お昼でも見回りだ

正直しようもないがやらないといけない

「あ…教官」

後ろから呼ばれた

声的に

「どうしたんだ？ 亜羅…遠藤さん」

「なんかピンとこないですわね」

「ファーストネームで呼ぶなって言ったのは君の方からだろ？ 僕も苗字は読みにくいんだ」

亜羅椰の方が呼びやすいの事実である

「それでどうしたんですか？ 遠藤さん」

「あ…そ、そのこ、これ良かったら…食べて下さい…／／／」

「どうした？ 君はある意味で”食べる側”だろ？」

「う、うるさいわよ！ そんな事言うど没収ですわよ?!」

「あーすまんすまん、普通に頂くよ、ありがとう丁度お腹空いてたんだよ」

良かったーという顔で見ってくる

「弁当箱…放課後返してくださいませ」

「ああ分かった、美味しく頂くよ」

笑顔で去っていった

何がそんなに嬉しいのだろうか

しまったな…先程言った通り僕はお昼にご飯を食べない

「どうすりゃいい」

もらった弁当くらい食えと思われるが食えない…

それに箸を丁寧に分のやつ置いてるし！

「はあ…食べるしかないっか…」

覚悟しよう

自分の胃が小さいのは承知だ

だが貰った弁当は食わないと申し訳ない

僕は近くにあった椅子に座った

そして弁当の蓋を取った

とても美味しそうな弁当

野菜と肉のバランスがとれている

「いただきます」

両手を合わせ食べ物に感謝の意思を示す

まず食べるのは卵焼き

ふわふわとしている物を口に運ぶ

「!!なんとという美味しさだ……!」

美味しい、ただそれしか言えない

卵焼きを良く噛み飲み込んだ

次に食べるのは

「つくね?かな……?」

そう、つくね?の様な物

串刺しにされている

それを何も考えないまま口に入れる

口に入れた途端にお米が食いたくなつたので米と一緒に食べる

「うめえ、どうやったらかんなに美味しく出来るんだ……?」

つくねは米とあうように濃い味付けがされていた

これが名門女学院の生徒の力……

その後の僕は何も考えずに弁当を食べた

「ふー美味かったー」

久々にお昼にこんなに食べた

なんだか亜羅椰の弁当だと食欲が湧いて食えた

幸せだなーと思いつつながら時計を見る…

「いつけね！次授業じゃん！」

危ない危ない

みんなを待たせるところだった

「相変わらずはやいねー君達は」

「教官が遅いだけでは？」

「言ってくれんじゃん、出江さん」

1年生はみんな笑っていた

そんなに面白い事か…？

でも本当にはやいな、授業始まる前に綺麗な列作って

「？なんで出江さんがここに？」

「貴方の授業を見に来たんです」

「ふーん、ま今日は見れるもんしねえよ」

「何をするんですか？」

「3km持久走と1000m走」

「2つも?」

「いつも戦ってるリリイならいけるだろ、それに今日の1000m走はテストじゃないから、スタブプロの使い方フォーム確認ぐらいだ、持久走の方がメインだ」

「みんな集まってるなー?今日の流れは先に体操してその後3km走、終わった人から1000m走の練習、1000m走のテストは明後日に行く、ではまず体操してください」

まさか体操の時もこんなに真剣だとはな

防衛軍に欲しかったぜ、こういう人間

「教官、体操終わりました」

「ん、では3000m走だな、近くのやつとペアを組め」

「教官、今日は1人休みで生徒数が奇数になります」

「僕が組むから安心して」

そしてみんな個人個人ペアを組んだ

残ったリリイは

「一柳さんか」

「…」

なんだか不安そうな顔をしている

「ではペアで先に走るか後走るか決めろ」

素晴らしい僕はタイマーをいじりだす

そしてタイマーは0になった

準備は出来た

「あ、大回りねー」

ここのグラウンドは1周400、競技場と一緒

だが大回りだと500になる

「じゃあいきまーす、On your mark set

ピッ！」

笛がなつたと同時にみんなは走り出す

最初に飛ばしている人、ゆっくりな人

どっちもいる

始まってから3分20秒

1番速い人で1000を通過

順調にいけば600秒



僕のペアである梨璃は残り2000で1000を通過  
持久走が苦手なのか…？

6分40秒

はやいひとは2000を通過

「ペース崩すなよー」

通過した時に言葉をかける

だが崩すところかペースが上がった

「すげえな、あのリリイ…」

一方梨璃はというと

1800を通過、さつきとペースは変わってないが…全体的には遅い方なのか…

開始から10分(600秒)

1番のリリイはもうゴールしていた

持久走はあまり知らないのにはやいのか遅いのか分からない

だが僕からしたらとてもはやい

「10分…はやいなー」

梨璃は…

残り500

11分はきつてほしいな…

「一緒に走るか」

防衛軍でも持久走はあったが近くでみんなが応援してくれた

そのお陰でタイムが縮まった

リリイもそうだろう

よし一緒に走ろう

僕は梨璃の傍まで駆け寄った

みんな驚いている、急に一緒に走り出したらそりや驚くか

「持久走は苦手ですか？一柳さん」

「い、いえ趣味はスポーツ全般なんですけど、やっぱり私遅いですか？」

他と比べたら遅い方だが僕からしたらはやいはやい

「いやそんな事ないよ、僕からしたらはやい方だし」

「良かったー」

ホツとしたようだ

「ほら、持久走に集中しないとタイム縮まらないよ」

「はい！」

「柳はペースを上げた

「いいぞ、その調子！」

「はい！」

急にはやくなったのはビックリした

そして20秒後にはもうゴール直前

「ラスト！全力で！」

「はい！」

また一気にはやくなった

そしてゴールラインを通過した

タイムは…

10分40秒

11分きった

「柳、よくやった」

「ありがとうございます！」

笑顔でトラックを歩きだした

「レン教官走れたんだ」

「舐めすぎだよ出江さん、こう見えても僕中高大、全部陸上部だったんだよ？」  
「それは初耳ですね」

「よし、次のリリイ達入れ！」

僕はタイマーをリセットしまた0にする

「ではいきます、On your mark set ピツ！」

さつきと同じように笛をならした

「教官はなんで防衛軍なんかになったんですか？陸上の道進めば良かったのに」  
「中高の時はそう考えたけど人を守りたいって思いが強まったんだよね」

「なんで嘘ついてるんですか？」

「分かった？」

「はい、本当の事話してください」

「…分かった良いだろう」

リリイ達はそっちのけで出江さんに昔話をする

僕の中高の時は特にやばかったよ

中学の時は虐めにあってた

最初は小馬鹿にするだけだったけど

どんだんエスカレートしていった

僕の机に酷い落書き

花も置かれたことあつたな

綺麗なユリの花だったよ

まさかその花が赤色に染まるとは僕も思つてなかつた

「赤色？」

「そう赤色」

ある日の道徳の授業で虐めは良くないみたいなのやつたんだ

その授業の終わりに僕はとても笑つたよ

なんで反撃しなかつたのか　　なんでこいつらは中学生なのに僕に構うのかつて

僕のその時の顔は狂気に満ちていただろうな

僕は笑いながらもまず先生を殺したよ

ハサミで喉を切つたんだ

そして逃げようとするやつ怯えてるやつ

どつちも殺したんだ

僕は陸上部だったから足の速さにも自信あつたから確実に殺せた

クラスのリーダー的な人は拷問していたぶつて殺したんだ  
面白かったよ…

ギヤーギヤー叫ぶ女子だったかな？

僕の事が気に要らなかつたら殺せば良かったのと思つてたよ

爪を剥がして指の骨を一本一本変な方向に曲げて

右目をピンセットで取ろうとしたり、関節を曲がらない方に曲げて

最終的に、電気がしたら死んだ

僕もそれで死のうとした

笑いながら電気に包まれた

でも死ななかつた…

「つて言うのが僕の中学生の時…つて引いてんじゃん」

「良く考えればあなたつて本当に怖いわね」

「あ、この話もこれから話す高校時代の話も誰にも言うなよ？僕に怯える生徒が出来てしまう」

「どうせ評価の為でしょ」

「いやそんな事じゃない、怯えて僕の訓練受けなかつたら強いリリイを作れないだろ？それにリリイと仲良くするのも悪くないし」

「了解、秘密にするわ」

「んじゃあ高校時代の話するぞ」

高校時代：ここで分かった事が結構あつた

中学の時僕は沢山の人を殺した、けどどなか罪にはならなかつた

中学の教師が面倒と言うことで僕を起訴しなかつた

もちろんその教師はもうあの世に行っちゃつたよ

そして僕は警察にいき自主した

裁判もした

もう僕は死刑と思っていたよ

でも何故か僕は無罪になつた

なんてこいつらは馬鹿なんだろうと思つていた

ここで人つて馬鹿だと気づいた

僕は普通の高校に入学した

ここでは僕はパシリにされた

でも僕は喜んでパシられた

僕はこいつらを駄目にしたいがためにね

「それで中学生と一緒に虐めになっていった  
でも僕は我慢した

こいつらをもつと駄目にしたいって思った

んな事思ってたらなんとヒュージが来た

みんな怯えてたよ

ヒュージが現れたお陰で地震が起きた

僕はドアや瓦礫の下敷き

そこで僕はやつと死ぬると思った

けどまだ死ぬなかつた

リリイ達がやってきたけど僕を助けてくれなかつた

他のみんなは助けてもらつてた

そこから僕はリリイを嫌いになつた

ここで2つ目、気づいた事があつた

駄目なのは自分だつて

僕は怒りに満ちたよ

瓦礫やドアを自分で退けて

救援のリリイを沢山殺した



ひたすら殺した

リリイを殺してる最中になんとか強くなった気がした

マギが僕の身体に入ってきていたんだ

僕は嬉しくなった

「こういうのがあったから殺人鬼って呼ばれたんだ」

「…」

外をうろちよろしてる最中に防衛軍にあつた

僕は助けを求めた、けど奴らは麻酔銃を向けてきた

防衛軍の対象はヒュージではなく僕だと気づいた

眠らされた僕は防衛軍本部まで連れてかれ色々な実験をされた

これが防衛軍の裏だ

まず戦闘力をはかるためにヒュージの群れの中に入れられた

驚いたよ…こわかったよ…苦しかったよ

でも数分後にはヒュージがいなくなっていた

全部僕がやったんだと気づいたのは防衛軍に入ってからだった

そして次の実験に移った

内容は死ぬか死なないか

尖った大きい針がある

そこに飛べと言われた

飛ぶのを躊躇したが蹴り落とされた

地面についたら死ぬ高度

たとえ針に刺さらなくても死ぬ

そして僕は針に刺さった

10秒間意識はなかった

だがまた意識が戻った

心臓を貫いているのにも関わらず死ななかった

3つ目氣づいた事

僕は死なない

いや僕は死ねない

実験の最中に防衛軍のトップである人間が僕を助けてくれた

「この子は私が引き取る、君達にもう実験をする業務はない、抵抗するのであれば射殺する」

「デメエ…はあはあ…誰だよ？」

意識はあまりなかった

「私はあなたのお父さんのお友達だよ」

「はあはあ…あん…た…か」

「君、我が防衛軍に入らないかい…?」

「ふぎ…けん…なよ…はあはあ…今殺さ…ぐっ…」

口から血が大量に出てきた

「このまま死ぬのはやめてくれよ? 未来のエース」

「なん…だよ…もう入隊か…よ…」

「入ってくれるかい?」

「はあはあ…いいだ…ろう…でも…はあはあ…約束しろ…はあはあ

俺を見捨てねえ事と…俺を強くしろ…はあはあ…」

「ああ! 約束する!」

そこからの記憶はない

意識が戻ったのは病院でだ

そこにはトツプがいた

「付き添いはいらねえぞ」

「見捨てるなど言ったのは君だ」

「そうだったな…」

「先に言っておく、私たち防衛軍は誰一人も置いていかない」

「その言葉覚えておくよ」

その後俺は必死こいて勉強して防衛軍幹部養成所の大学へと進学した

「僕の昔話はこれにて終了だ」

「色んな事があるのは知っていたけどそんなにも残酷だったのは知らなかったわ…」

「本当に言うなよ周りの人に」

「分かってます」

「補足だが僕は生き返るまで10秒かかる、10秒の間にもう一度死ぬ行動されたら確

実に死ぬだろう」

「2回殺せばあなたは死ぬと？」

「そうなるな…おつといっつけねえ！もうすぐ終わるじゃん！」

開始から10分

もう終わりだしている

そして開始から15分後にはみんな持久走を終えた

その後は100をして、授業を終えた

「僕はいつ死ぬんだろ…」

死にたい訳じゃない

だが死ぬ時を知りたい

誰に殺されるのか何で殺されるのか

それか事件か

それが分からないから人生は楽しいのか…

# FOURTHSTORY—再開—

授業が終わり今は後片付け

みんなが使っていたスタブロ

とても砂がついている

砂を払い除け倉庫に片付ける

こういう事をするとう部活をしていた時を思い出す

先輩と話したり仲間と今日の練習について語る

それが片付けの時だったな…

「走りたいな…、そうだ！今走ろう！」

持っていたスタブロを持ち100mのスタート地点までいく

スタブロを設置し調節する

現役と変わらず左足と右足の距離は大きい

僕は右利きなので右足が後ろで左足が前

久々だ、スタブロを使うなんて

「タイム測定しますか？」

「君は何処にでもいるね出江さん」

「私はあなたの監視役を命じられておりますから」

「そうだったの?!」

「はい、それよりさっきの質問の答えは？」

「あ、ああじゃあ頼むよ」

「かしこまりました」

そう言い、ゴール地点まで出江はいった

「On your mark！」

「あ、知ってるんだ」

「set！」

「いい声だな」

「ピッ!!」

笛がなった

僕は爆発的なスタートに成功する

スタブロは蹴った力で「カクンツ」となった

序盤は低い姿勢で

50mをきつたところら辺で背中は真つ直ぐ

その後はもっと加速する

腕を思っいきり前に振り、後ろに伸びないように

足は反発を上手く利用するために高く上げ、足の母指球あたりで地面を蹴る

ゴールラインを越したら腕を横にひろげ減速する

そしてタイムをみる

「タイムは？」

「9秒98…」

「やっぱりこれ以上は縮まらないか…」

「どういう事ですか？」

「大学生の時もそのタイムから縮まらなかった」

少し落ち込んだ

「そんなに落ち込む物ですか？」

「ああ、なかなか落ち込むぜ」

はあとため息をつき歩いてスタート地点まで行く

「教官はどうやってそんなに速く？」

片付けている時に聞かれる



「さあな、いつの間にかこんなものになってた」

僕自身分らない

どうやって速くなったのか：そんなの分からない

スタブロを持ち上げ倉庫へいく

その時も話しかけてきた

「コツとかあるんですか？速く走るための」

「腕を前に思いつきり振る事と腕を後ろにした時に伸ばさない事」

「他にはあるのですか？」

「反発を上手く使うかな」

そんなの聞いても意味は無いのに聞いてくる

「なんでそんなに聞いてくるんだ？」

「あ、いえ何となく…」

「そうか…」

倉庫につきスタブロを決まった場所に置く

「よいしょっと、よし後は見回りだけだな」

「授業はもう無いのですか？」

「ああ、もうないよ」

倉庫から出て鍵をしめる

「そんじゃあな出江さん」

「ごきげんよう」

「はあーまた見回りか…」

教導官も大変だな

幹部の方が楽だったかもな

「あなたね！」

「?!」

密かに聞こえた声

喧嘩しているような声だ

近かったのでとりあえず様子をみた

「柳…?」

小さい声で呟いたのは僕の生徒の名前

名前の知らないリリイが梨璃を虐めてる

しかも一人じゃない

5人くらいで梨璃1人を虐めている

「補欠ごときで調子にのらないでくれる？」

「す…すみま…せん…」

「あんた前言ったよね、レン先生に近づくなってそれなのに今朝近づいたわよね？」

「あ、あれは」

「言い訳無用、お仕置が必要なようね」

そっぴいなながらポケットから何かを取り出した

「カッター？」

なんでカッターなんか…?!

目を疑った

リリイが梨璃の服を切ってる

何する気だ…

「身体にお仕置の跡をつけないとね」

これ以上は梨璃の身体に影響が出るな

そろそろ止めよう、これ以上見てられん

僕は隠れていたところから出て

「はいはい、そこまでだよ」

いざ出てみれば路地裏みたいなところだな

ちよつとだけ横幅はあるな

僕が出て近づいている時に虐めているある一人が僕の後ろにまわった

「一柳に何してるんだ？」

「あ！先生〜！こいつちよつと調子のとってー今お仕置するところなんですよー」

さつきより声のトーンが上がっている

これがいじめっ子か

確かに昔僕の中学校にもいたような…つて今はそんな事考える時じゃねえ

「へえー面白そうだね…」

「先生も一緒にしてくれるー？」

ここで僕がいいえと言えばみんな僕を殺しにくるだろう

ここは少し横幅が広いだけ挟み撃ちされたら梨璃を守るか心配だ

だから真ん中にいるこいつをまず潰す

「そんなことよりも僕とイイことしません？」

「えー？なにになー？」

「目、瞑ってください」

こいつは指示通り目を瞑った

「恨むなよ」

「恨むわけない…グハツ!!」

僕はリリイに頭突きをした

「女子なのに男みたいいな声出すね」

「……」

リリイは何も話さなくなつた

「先生…これ大丈夫なんですか？」

「軽い脳震盪だ、数分すれば意識は戻るよ」

「良くも姉貴を!!」

後ろにいたリリイが攻撃を加えてくる

「おいおい、そんな突きで僕を　”殺せるとでも?”」

「ひいひい!」

下から顎に掌底打ちをし足払いで相手を地面に叩きつける

「ぐっ!!」

他のリリイがこちらを見つめる

これ以上戦う必要はない

「梨璃! 僕の手を!」

「はいーってひゃ…／＼／＼」

梨璃は壁にもたれ座っていたので

立たせると同時にお姫様抱っこ？というやつをする

「ちよつと我慢してね」

「は、はい…／＼／＼」

「くっそー！待ちやがれー！」

残りのリリイが追いかけてくるが

「僕に追いつけるとでもー？」

僕は全速力を出した

そして見事撒いた

僕は抱えていた梨璃を下ろす

「大丈夫か？梨璃」

「怖かった…怖かったよ…」

梨璃は僕を抱きながら泣き出してしまった

「大丈夫だ、僕がいるから安心して」

梨璃はとても泣いていた

相当怖かったのだろう

そして段々と泣く声はおさまっていった

梨璃が泣きやみ、さっきのリリイがいないか確認する

追ってきてはいなかったが

「なあ梨璃、ここって墓場か？」

「そう…です」

「まだ泣きたいか？」

「大丈夫…です」

「そうかなら良かった」

「結梨ちゃんにこんな姿これ以上見せられないから…」

「結梨？」

「はい、海岸でみつけた女の子です…最後は戦死しちゃったんです…」

「そうか…すまんな思い出させちゃって」

「いえ大丈夫です」

風が靡く、風のせいで視界に髪の毛が遮る

髪の毛を退かしたら一瞬何かが見えた

「?先生どうかしました?」

「何故だか分からないが、君が言っていた結梨さんが見えた気がした」

「どんな表情してました?」

「君と同じような綺麗な笑顔をしていたよ」

〃〃〃

「どうした一柳、顔が赤いぞ?」

「な、なんでもありません!」

「そうか特に何も無ければ良いが…」

虐めは何故起きるのだろうか…

相手が気に食わないなら殺せばいいのに…

「あー!やつつと終わったー!!」

時計を確認して今日が終わった事を知る

「今日の業務はこれで終わり!しんどかったー」

廊下で体を伸ばす

今日も色々あったなー



「あ、そういえば弁当箱返さないと…」

1回自室に戻らないとな

僕は自室に駆け足で向かった

「やっとなつたー」

自室にやっとなつて戻ることが出来た

ここ、無駄に広いんだよ

えーと弁当箱、弁当箱…あつた

机の上に置いてあつた弁当箱

「これ洗つといたから何も言われねえよな？」

放課後、亜羅椰つてどこにいるんだ？

そんなことを考えてたらドアをノックされた

「教官、遠藤亜羅椰ですわ」

「あ、ちよつと待つてな」

僕は鍵のロックを解除しドアを空ける

「おまた…あ、亜羅椰さ、さん？お顔が近すぎで、では？」

ドアを開けると亜羅椰は距離を縮めてきた

「さつき梨璃を抱っこしてたけど、どういふ事かしら？説明を求めますわ」

「あ、あれはちよつとしたトラブルがあつて…」

「トラブルって何かしら?」

亜羅椰からドス黒いオーラが出てきている

ものすごく怒ってるー助けてー!

「いや、そのー」

「速くいいなさいよ」

とうとうお嬢様口調じゃなくなつたー!

僕今日死ぬんじゃないかな!

「ほ、本当に言えない事があつたんだ、これは本当だ」

「言えないことって何かいやらしい事でもしたん、じゃないのですか?!

「ちよ、亜羅椰」

気を抜いていたら足をかけられた

そうして僕は亜羅椰に押し倒されてしまった

「あ、亜羅椰さ、さん?あ、あんまりこういうのって教官と生徒がしていいものでは…」

綺麗な指が口に触れていた

「あああ、あのね、まずこんなところ他の人に見られたら…」

と言うと空いていたドアを閉めた鍵もかけた

そしてまた僕の上に乗った

「これで大丈夫わね」

誰か助けてー！ほんとに助けてー！

僕、”食われちゃう”！

「今この場だから言いますわ…／／／／」

「な、何を？」

「私、あなたの事好きですわ…／／／／」

「へ？？」

僕は驚いた、大変驚いたこの春いち驚いた

「確かに僕も君の事が好きですけど僕らまだ出会ったばかりだし、第1僕と君は教官と生徒、そんな関係築いたらダメだろ、それに君の好きって言うのは本当の愛じゃないだろう？」

「あら？こちらは本気ですけど？私はあなたを未来の婚約者と見ていますわよ…／／／／」

「そ、それ本気？僕に恋？」

「ほ、本当ですわよ…／＼／＼」

そんな上目遣いで僕を見るなああ！

たたでさえこんな美少女が僕に乗っているのにそんな上目遣いされたら…

「ま、まて！回落ち着こう！回落りよう」

理性が保てなくなってしまう

「そ、その必要性はないと思いますわ、互いに恋心があるのなら大丈夫ですわ」

「いや、そういう事じゃなくて、このままだと僕の理性が崩れるから！回落ち着こうって

…ち、近い…」

僕が発言している途中に顔の距離をグツと詰めてきた

「亜羅椰さん、おでこがごっつんごする距離ですけど大丈夫ですか？」

「私も…正直言つて照れてるのですわよ…／＼／＼」

確かに顔がとても赤い

亜羅椰も照れるのか…これは重要重要

「い、今からき、キスをしますわよ／＼／＼」

「そ、そんなに照れますか？」

「私、女性としかやった事がなくて…／＼／＼男の人とは…」

コンコン!

「!？」

「あ、あのーレン先生いらつしやいますか？」

梨璃の声？

ああ、そうか僕放課後行かなきゃならないのか

「いま行…!!!」

今行くといい立とうと思ったその時

亜羅椰の唇が僕の唇と重なった

「ふぁ…んっ…レロ…／／／」

「ま…まって亜羅…椰…」

し、舌を使うとは聞いてない…

「待ちませ…ふぁ…んわよ…レロ…／／／」

亜羅椰の荒い呼吸が聞こえる

僕の息も今荒いだろう

正直僕も興奮している

「はぁ…はぁ…ほんとに…まって、息が…」

僕は逃げようと後ろに行こうとするも

「レロ……ふはあ……んっ……逃がしま……レロ……せん……っん……わよ……／＼／＼」

亜羅椰は逃がしてくれなかった

「ご……めん梨璃……はあ今ちよつと手が……っ！離せない……！」

「そうですか……」

「後で……行くよ……」

「分かりました！では後ほど！」

「あ、ああ」

梨璃を説得してとりあえず梨璃を部屋から離す事は出来た

そして亜羅椰もやつと離してくれた

僕の口と亜羅椰の口の間には銀色に糸が垂れていた

「あ、亜羅椰、どういう……」

僕は口を袖で抑えながら質問する

「一向にキス出来なかったからわよ……／＼／＼」

お互いに顔がとても赤い

「き、キスするとは言ってたけど舌を入れるなんて……」

「いやだったかしら？／＼／＼」

また上目遣いされた

ほんとに理性が終わりそうだ(？)

「いやちよちよ、ちよつと待つて！ 亜羅椰！」

「ん？ 何…かしら？／＼／＼」

「なんで上脱ぎ始めてんだよ！ 体の関係は流石に良くないよ…！」

「私もう待てませんわよ…／＼／＼」

「体の関係はもうちよいな…もうちよいしてからな…な？」

「……しようがないですわね…」

よし、それでいい

「と、とりあえず僕は行かないといけないし、亜羅椰のレギオンのメンバーも探してると思うよ」

「そうかしらね…」

「ま、まあ今日はこの辺で？ 僕は失礼させていただきます…」

「ケチだわね…」

「ははーそんじゃあ、ま、また明日ー」

「あ……行ってしまいましたわ…私…嫌われたかしら…？」

「はあはあ……」

くそ、亜羅椰め

あの子は本当に特別感があるからこそ反撃しにくいんだよ

なんだかんだ言つて僕、亜羅椰の事好きなのかな…？

どこで堕ちたんだらうな…

亜羅椰も僕も

とりあえず僕は今レギオン部屋に行くことが任務だ

「えっ—と—ここが—柳隊の部屋か…」

札を確認し「コンコン」と音をたて、ノックする

「レン・リエスタです」

名前を名乗った

少し間があつたがドアが空いた

—柳が開けてくれたみたいだ

「ありがとう、—柳」

「いえいえ—！—こちらこそ来ていただいてありがとうございます—！」

ほんとにこの子は元気が良いな



部屋の奥に行く前に白井がいた

「怪我はないのか？白井？」

「……」

無視か…

そして部屋の奥へと連れてかれた

「これはこれは一柳隊のみなさんじゃないか…」

部屋の奥には一柳隊全員がいた

みんな放課後には集合している様だ

「今日は先生に聞きたいこと、とかあつて呼ばせていただきました！」

「聞きたいこと？」

「はい！沢山あります！」

そんなにあるのか？ま、大したこと聞かれないだろ

「じゃあまず御年齢は？」

「今年で20？だったかな」

「え？」

「ん？」

「えっつっつー！！」

「り、梨璃少し静かに…」

「す、すみません梅さん!」

「まさかまさか、今19歳?!」

「そんなに驚くことかな?二川さん…」

「驚くとかの騒ぎではございません!戦場では複数人相手が出来るし一つ一つの技が強烈で、あのアルトラ級を仕留めた、最強という言葉が似合う人間!人柄も良く!ここに来て数日しか経っていないのに生徒や教官からの信頼は厚く、噂ではアールヴ Heim 所属の亜羅椰さんと恋人なんかじゃないかと言われている男性が19歳?!」

「あら…ごっほん遠藤さんとはそんな関係じゃないって事だけは否定しておくよ」

「19歳って通常では大学生では?」

「いい質問ですね!梨璃さん!」

「二川さん、こういう人だったんだ…」

「高校は16の時、つまり1年生の時にはもう3年生の教科まで終わっていたよ」

「つまり…」

「飛び級という事になりますね!」

「そして17の時に特別に防衛軍の大学入らせてもらったね…そこから1年後には課程を全て終了させて18〜19の間は防衛軍の仕事してたね」

「凄すぎるんじゃない？」

「防衛軍にはあんまりいなかったのか？」

「そうだねーまあー今も一応防衛軍の隊員とはなっているけどね…」

「凄い…」

「あ、でも進学・飛び級した時僕は文系だったから簡単だったんだよ」

「どちらにせよ、簡単では無いわね」

「まだ成人してない…という事は私のお兄様より下?!」

「確か蒼空は25とかだったよな」

「なんだか情けなくなってきましたわ」

「そう言つてやるなよ」

「てか、よく上の人の名前を呼び捨てに出来ますねー」

「仲が良いつていう事もあるけど、僕は本当に尊敬してないと敬語は使わないよ、変なところで敬語使つてたら相当キレてる証拠」

「!そういうえば教官つて戦つてた時一人称“俺”になつてたよな」

「あー確かに!先生なんで一人称変わつてるの?」

「それは僕にもあんまり分からないんだ…多分だけどつい感情的になると俺つて言っちゃうんだと思う」

「教官は何故そんなに強いんじや？」

「格闘技術面ではいじめ対策にお父さんが教えてくれた十防衛軍で訓練をした、他は知らない」

「兄妹とかいるんですか？」

「2つ上に姉がいる、弟と妹はいないな」

「お母様とお父様は何をされていたのですか？」

「お父さんは防衛軍のトップ、お母さんはリイをしていたよ」  
様々な質問にしっかりと答えていく

こんな事をしていていつの間にか夕方になっていた

「あれ？もうこんな時間か…」

時刻は17時

「そんじやあ僕は帰ろつかない…」

「えーもう行っちゃうんですかー？」

「子供みたいに駄々をこねるなよ一柳」

僕は立ち上がった

「よいしょつと…よしそれじゃあ僕は自室に戻るよ、君たちと同じでやることがあるか

らね」

「また、来てくださいいね！先生！」

「また来させてもらおうよ！」

ドアを開いて後ろを向く

ドアが完全に閉じるまで手を振っていた

「…気のせいかな…」

昼に言っていた結梨を思い出した

「気のせいだろう」

僕は前を向き歩き始めた

僕は自室に着いた

まずやることは特に決まっていない

この時間は自由になっている

寝転がってスマホを見るもよしヒューズヤリリの事について勉強するもよし、とりあえずプライベートタイムだ

今日は寝転がってスマホを見ることにした

「あああー疲れたさてニユースでも…?」

ニユースを見ようとしたら窓が急に揺れ、音を出している

「なんだ風かー?」

ベットから起き上がり窓の外をみる

「おいおい、なんだよこれ?」

僕の目に映ったのは

こちらに向かつてくる鳥のような物

だがそれはとても大きい

よく見ると人から羽が生えている

本当になんだあれ?とりあえず対処しよう

僕は窓から外に出た

マギの力で怪我なしに着地

僕はグラウンドまで向かった

特に予測なんてしてなかったがなんとなくこつちに来そうな予感がしたからだ

案の定得体の知れない奴は俺の方に来た

「何者だ?人なのか?人じゃないのか?」

「う、ヴェ!!!」

急に僕を刺そうとする勢いで突進してきた

「何が望みだ？」

何も返事がない、人じゃない？

「ヴェー・ヴェ!!!ヴェ!!!」

連続攻撃？

丁寧にも人の足も使ってる

次の攻撃で一旦抑えるか…

「ヴェ!!!」

「よつと」

僕は攻撃を躲し軽く投げ飛ばし抑えつける

「なんの騒ぎですか？レン教官」

「出江さん、いいところに来た他の教官に応援を要請してくれないかな？」

「了解で…後ろ！」

「ぐっ!!!」

尾？こいつ人間じゃねえのか？

「くそ、危うく死ぬところだったぜ」

こいつ何がしたい？何が望みだ？

「ヴ、グヴァ!!」

「なっあ!」

凄まじい力で僕の腕を掴み思いつきり地面に叩きつけた

「すげえな」

立場が逆転した

「うぎゃああああ!!!」

とんでもなく大きい叫び声と共に少し浮遊した

何をするかと思えば僕を地面に擦りつけて移動している

背中が床についてるのでまだ良いが顔面だったら10秒の間に3回は殺されちまう

「ぐつつつ!」

叫び声をあげる怪物

俺はただ見ることしか出来ない

俺たちはとうとう室内へ

まだ離さない怪物



俺に何か様なのか？

「やられ続けは嫌だな…!!!」

俺は反撃した

羽をしつかり掴み後ろに投げ飛ばした

地面を削りながらどこかの部屋にとんでいった

「おやおや、2部屋くらい貫通してるじゃん」

壮大に部屋を潰しちまった

費用がとてめかかりそうだ

先の事を考えもう一度前を向くと

「…いない?!どこに…」

怪物はどこかに消えていた

周りを見渡すもいない

音はするがどこにいるか…

「あーそこか…クソが…」

怪物がいたのはまさかの頭上

俺は諦めた声で前を向く

「ヴェエエエエエ!!」

「うっ!!!」

怪物は俺に蹴りを与えてきた

凄まじい力

今までにない威力

蹴りのせいでどっかの部屋まで飛ばされた

そこまでは意識があつた…

俺は死んでいた

久々だ…死を感じたのは

「10…9…8…7…6…5…4…3…2…1…0…」

「おっと、いけねえ起きねえと…って出江さん?なんでここに?なんで俺、風呂場に…」

起きたのは普段リリイが入る風呂場

もちろん今もリリイが入浴中

窓に背をつけながら座っている状態で死んでいた

起きて初めに見たのは出江さんの足

「本当に10秒で起きた…話は本当だったのですね…」  
手を出してきた

俺はその手を握り、立ち上がる

「嘘ついてどうする…これ、俺が風呂覗いたって報告する？」

”今回”は目を瞑ります、”今回”は「

今回という単語を強調してくる

俺は風呂覗いたことないぞ

「それよりも俺が不死身な話するなって言ったよな？」

「なんの事でしよう？」

「出江さんねー…」

「それよりも”あれ”来てますわよ？」

壁には大きな穴が空いていた

「あいつが破壊したのか…？」

「そのようです」

「出江さんはここにいるリリーの避難を、俺はこいつをやるよ」

「言われなくても分かっています…」武運を「

怪物はまだピンピンしてやがる

こいつ人間なのかなんなのか

殺して解剖するか…

失神だけさせて話を聞くか…

面倒だから殺すか…

「言葉が通じるから知らねえが今からあんたを殺す…死んでも恨むなよ」

「うぎやああああ!!!」

無かった羽が再度展開した

「元氣有り余ってんな…」

正直言っしてしんどい、死んだ後はそんなに動けない

それが俺の弱点

「うぎやああああああ!!!」

相手からの先制攻撃

距離を一气につめ

俺の胸倉を掴む

何をするか…考えられたもんじゃないやねえ

「またかよ…！」

俺を壁に押し付けながら部屋中を飛び回る

まるで何かの虫の様に

「もう飽きたぜ？俺」

俺は拳にマギを溜めながら独り言を言う

「はい、バイバイ」

怪物の腹に寸勁…ワンインチパンチ

こんな至近距離にはこれだな

怪物は俺の寸勁が聞いたのか急に俺を離れた

お湯があるところに落ちた

「バツキヤロウ！濡れたじゃねえか！」

俺は瞬時に起き上がり倒れている怪物に文句を言う

手を銃に見立てた形にして近づきながらそこにマギを溜める

零距离

俺は撃とうとした

怪物は寝ている

外す訳がない

「手こずらせやがって…あばよ…」

撃とうとした瞬間に怪物が

「うぎやあああああ!!!」

起き上がった

だが俺は何も考えず驚きもせず

照準を怪物の腹にまでずらし

撃った

見事命中し怪物の腹と壁に貫通した

反動で少し動いた

7秒後にはさつきまで俺がそこにいたところに怪物は倒れた

倒れた直後に羽は取れ人は、普通の肌の色に戻った

「可哀想な人間だな、だがそれも運…い…なんだ?!…これ?!…」

俺が独り言を呟いていると人の死体は、腹の部分が再成されていた

「!? どういう事だ?!」

死んでからJustくらいで10秒

こんなに再成がはやい生き物がいるのか?!

いやよく考えろ、俺もそうだ、10秒後には傷は再成されて生き返る

だがこの性質を持つているのは俺とお母さんと姉貴だけ…

まさかとは思わんが…

俺はうつ伏せになっていた怪物の死体を仰向けにした

そこでまず最初にみたのは顔だ

見た事のある顔

俺のトラウマだ

「っ!!」

俺は腰を抜かした

情けなく、後ろに倒れた

こいつは怖い…本当に怖い

「あ、レン教官お疲れ様で…何を?」

僕は出江さんの後ろに隠れた

「で、出江さん…こいつをどっ…どっかにやって…!!」

「どうしたのですか？レン教官？そんなに女体をみたくありませんなら仰向けに……」  
出江さんが死体を仰向けにしようとした時……

「ん？ん？ここはー？」

「ぎやあああ!!目覚めた!目覚めたよ!出江さん!はやく殺してええ!」

「目覚めるのは貴方もいっしょではないですか」

「あれー?レンじゃないのー?元氣してるー?」

「たつたいまあんたのせいで元氣失った!出江さん!はやく殺して!」

「殺してと言われましても……」

「苦笑いしてる暇ないって!はやく頭をどっかに思いつきり叩きつけて!」

「そんな事言うんだったら教官自らが……」

「そいつに触ったら僕死ぬんだってえ!ほら!はやくはやく!」

「なんだか情けないですね」

「ごめんなさい!僕はこのいつに合う以外は情けなくないから許して!」

「ねえー私の質問に答えてよ、愛しの、レ、ン、君♪」

「ひい!!喋んな!ブラコンババア!つくねにして食うぞ?!」

「レンの中に入れるんだったら大歓迎ー!」

「!!キモイキモイ!死ね!死ね!」



「それにこう見えても私、貴方の2上なだけだよー?」

「僕からしたらババアだ! 死に損ないはとつと黙って死ねえ!」

「罵倒…いいわねー」

「まじでキモイ! 出江さん! 後片付けよろしく!!」

「え? ちよ、どちらに?!」

「自室ー!!!」

僕は走って風呂場から離れた

あいつと同じ空気吸っているとバカになっちまう!

「はあはあ…何分間走っただろう…」

5分間くらい走っただろうか…

全速力は辛いな…

僕は鍵を開け部屋に入る

夜中にあいつが来たら嫌なので

しつかりと鍵をかける

「誰も入ってこない誰も入ってこない」

あいつと再会してから頭が狂った

「あいつはいないないないないないない」

本当に狂った

「とりあえず、風呂入ろう風呂」

活気がない声で独り言を呟く

独り言言わねえと頭が本当に狂ってしまふ

こうして僕は風呂に入った

「今日もおつかれおつかれおつかれおつかれ」

駄目だ、まともな言葉が出てこない…

「今日はもう寝よう寝よう…」

同じ言葉を言いながら

パジャマに着替える

「寝よ寝よ寝よ寝よ寝よ寝よ寝よ寝よ寝よ」

そして同じ単語を繰り返しながらベッドに入る

入った後は

「おやすみおやすみおやすみおやすみおやすみおやすみおやすみおやすみおやすみおやすみおやすみおやすみ」

誰もいない筈なのに挨拶をする

そうしていつの間にか寝てしまっていた…

あいつは僕にとつての邪魔者だ…

百合ヶ丘には留まらないだろう…

あんなけ破壊したんだ

絶対に留まらない

安心だ

これで留まったりしたら…僕の生活は…

つてここにはあいつは絶対にいない

いたとしても僕が追い出す…

本当にここにいないでくれ…

# FIVESTORY—変化—

人は必ず変化していると言われていた

どこが変化しているか分からないが必ず変化している

分かる事を大きな変化と僕は捉えている

今日の僕の周りでは大きな変化がともあるだろう

そんな気がする

あの件から1夜明け、朝になっている

窓からの日光

今日も晴れだ

起き上がり朝の準備をする

ここまでは何事も変化は無かった

何も…

朝

外へ出ると、何かザワザワしている

近くにいた生徒会の出江さんに話を聞く

「何かあつたのか？」

「ああ、教官ごきげんよう、今日朝一で集会があつて……」

「集会か……ま、頑張れ」

「？教官は何かご用事が？」

「ううん、サボリ」

あくびをしながらサボリ発言をした

「はい？サボリ？」

「そうサボリ」

「教官がサボって言い訳ないでしょ！」

怒鳴られちまつた

5歳ぶりか？

誰かに怒られたのは

「お母さんみたいだな……」

「お母さん？よく分かりませんがとにかく教官は出席していただかないといけないので  
すー！」

「覚えてたら行くよ」

「絶対に！ですよ?!」

「はいはいー」

本当にお母さんみたいだな

あんな奴だっけ？

出江さん

集会には出席するかー

あいつがどうなったのかとか知りたいしな…

「みなさんごきげんよう、朝早くに集会、大変お詫び申し上げます」

生徒会の出江さんが司会をしている

「まずは昨晚の事です」

出江さんのバックには僕と怪物が戦ってる画像が

ここにいるみんなはザワついた

「あれ怖かった」「教官が飛ばされたのみた？」など

色々な意見を言っている

「写真は昨晚出現した怪物を対処しているレン教官です」

「それいるか？出江」

超絶小声で言う

隣の教官に「？」という顔で見られたが出江の方をみた

「この写真でわかる通り教官が手のかかる程の戦闘力を有していた怪物、この怪物の正体を昨日突き止めました」

そんなに苦戦はしなかったけど言う通りなかなかの強敵ではあった

蹴りの威力も凄く僕の骨は折れていただろう

正体については僕の姉であった

それしか詳細は知らない

あいつの事なんか知りたくないからだ

「正体はレン教官の姉上であるイロハ・シエスタさん、御年齢は21歳……」

「ババアだな……」

「何か言いましたか？リエスタ教官？」

出江に声が届いてしまっていた

一気に注目を集めたが

「あ、いえなんでもありません、どうぞ話を続けてください」

綺麗に流した

「今日は昨晚の正体であるイロハさんに来てもらいました」

「?!」

あくびをしていたが出江の方をしゅつと向いた

「嘘だろ…なんであいつここにいんだよ…」

僕は頭を抱えた

何故奴がまだここににいる？何故まだアメリカに戻っていない…?!

戻れ戻れ戻れ

そんな事を考えているとイロハはもう前に立っていた

「えー皆様ごきげんよう、何普通の顔してるのって思う方もいると思います、それは当たり前です、昨晚の事についてですが私はその時の記憶がほとんどありません、ですが皆様にご迷惑をかけたのは分かっています、本当に申し訳ありませんでした」

謝罪の言葉と共に一礼するイロハ



「珍しく真剣な顔だな…」

小声で呟く

あいつがあんなに真剣な顔してるのは母の葬儀の時以来だ

「どういった経緯で私がこのような怪物になったのかご説明しろと言われているので説明させていただきます」

「長くは話すなよ、あと親の事もな」

僕はそうイロハに言った

親の事なんか深く誰にも言いたくない

ましてやもう死んでるなんてな

「分かってます、レン・リエスタ教導官」

改まってんなー

「私の名前は先程言われた通り、イロハ・リエスタ、レン教官の姉です、私とレンには夢がありました」

口を開いた

余計な事言わねえか心配だな

「レンは父上のような防衛軍幹部に、私は母上のような立派なりリイにでも、現実はその上手くはいきませんでした」

あん時からか…僕らの生活がぐちゃぐちゃになったのは…

多分話さないが、僕らが中学生の時だ

母と父の突然の不自然な死

そして…

「私は15という歳で何故か米軍に拉致られました」

突然過ぎる拉致事件

まるで誰かが裏で操作しているかのような完璧さ

僕とイロハは別行動をしていた…

僕はなんとか反撃したが…

「私は戦闘経験がなく、すぐに拉致られました…」

姉は戦闘経験が1個もない

あん時、僕がついていけば、あいつは…あいつは…

「私は拉致られたあとアメリカに連れていかれ様々な研究をさせられました、そして研

究が進み、その6年後…」

「改造リリイとして完成した、なんて残酷な話だ」

僕が思わず口を滑らせてしまった

この言葉を聞いたりリイ達は一斉に驚いた  
まさか改造リリイなんてな…

僕も驚いたよ

正気を保っているので精一杯だ…

「そして昨晚、私は研究施設でマギを大量に体に流し込まれて記憶がないのです…」  
「残酷だな…本当に…」

「私からの話は以上です、では出江さんに変わります」

「ありがとうございます、イロハさん」

駆け足で交代し、出江が司会を務める

そしてイロハはどこにいったか

そう考えていると僕の顔を悠々と通り

僕の隣の席に座った

「なんでここに座っている…?!」

「そんな怖い顔しないでよ、それに私はもうこの教官なのよ？」

「馬鹿いえ、出江や理事長が許す訳ないだろ？」

「どうかしら…」

「イロハさんの事についてですが、今日から私達の教導官となつていただきます」  
 「は、はあ?!」

僕は思わず立ち上がった

「いや、ちよつと待つて頂きたい!理事長のお許しは下つたのか?!」

「理事長なら快く許してくださいました」

「…だ、第一、昨晚あんな事があつたんだ、いつこいつが暴れだしてリリイを攻撃するか分からない!ここに居させるのは…」

「いいじゃない?久々の2人一緒の暮らし最高じゃない?それに私にはもう居場所ないし?」

そう言いながら腕にしがみついていた

はやく離れて欲しい…色んなもん当たつてんだよ

「本人も居場所がないと仰つてるので…それとも何か彼女に嫌な事でも?」

やめろ出江!その不敵な笑みをやめろ!」

「ああ!クソ!分かつたよ!その代わりこいつが昨晚のように暴れたら絶対に僕に報告すること、生徒だけで対処はしない事、分かつたな?!」

「了解!」

みんな一斉に返事をした

こうして朝の集会は終わった  
史上最も変な終わり方だったな

「はあー、クソ！なんであいつがいるんだよ！」

自室で一人叫ぶ

「守ってやりたい気持ちは山々だがあいつの性格的に一緒にいるのは嫌だし、リリイ達を守るか……」

「教官……私ですけどど……?!!」

「すんごい怒ってるー!!!」

「あ、あら……遠藤さん……な、何か御用で、御用でしょうか……?」

「恐る恐るドアを開ける

僕何かしたかな？」

案の定ドアを開けると黒いオーラを放った

遠藤亜羅椰の姿が……

「あの一えつとー僕何かしました?……」

「ふーん、そうやってとぼけるのね……」

「いや僕何もしてないし、とぼけるも何も……」

「ふんー！」

「や、ちよつと待つ……ぐはっ！」

急に僕のお腹に思いつきりパンチしてきた

めちやくそ重い……

僕は3秒くらいふらつき

後ろに倒れた

「あ、亜羅椰、ど、どうして……ぐへえ〜」

「はあーまだとぼけるつもりですか？」

「だから僕は何も……」

「新しい教導官とイチヤイチヤしてたじゃない」

口調が変わったー

本気で怒ってる時だと自分では思ってる

「いや、あれは僕自身からやった事じゃないんだ！本当だよ！」

「罰として、キス5分！」

「いや待ってそれは駄目だ、まじで僕死ぬ」

「死んだら分かりますから安心してくださいませ」

前回と同様で僕の上に亜羅椰が乗っている

「ちよ、まじで駄目だつて」

「大丈夫ですわ、前と一緒にですわよ」

「亜羅椰はもう僕の頭を持っていた

やばい、やられる

コンコン

変な事を考えていると急に部屋中にノック音が聞こえる

「白井です、少し話があつて…」

「あ、ちよ…」

「入ります」

いや、ちよつと待つて

今この場を見られたら…

「あー？百合ヶ丘で強いと噂の白井夢結様じゃないー」

ドア越しに聞こえる声がもう一つ聞こえた

「イロハ教導官、ごきげんよう」

「ごきげんよう〜」

クソ、見られたらもつと面倒になる人間がきちまつた

は……でもここで話とかすればどこかに亜羅椰を隠せれる確率が……

「白井さんは何してるの〜?」

「私はレン教官に話があつて……」

「レンの部屋なんですよ〜こんくらいドアをばつと開ければ……」

急にドアを開けてきた

体制は変わっていない

終わった、そう思った

ドアを開けた瞬間に白井とイロハはこういった

「え?」

「いや、ちよつと待って、そのこれは……」

「私たちの神聖な儀式を邪魔しないでもらえるかしら? 白井さんとイロハ教官……!」

僕に乗りながらとてつもなく怒ってる

やべえ完全に修羅場だ

「教官……」

「あなたもこんな事する年齢になったのね……後で話をしましょう」



2人に完全に引かれた

「いや待てよ！これには訳あつて…」

「言い訳は無用よ、レン・リエスタ教官?!」

「教官、これは見なかった事には出来ないわ…」

「いやこれはまじ…!!」

誤解を解こうとした時

「あら」

亜羅椰がキスをしてきた

「あ、ありや、しよ、しよきかあ？」

(亜羅椰、正気か?)

「いちいち、はあ…面倒くさいのよ…はあ…んっ…／＼／＼」

くそ、まじで修羅場だ

「…!また後で来させていただきます、教官、ではごきげんよう…!」

「ちよ待…」

「レン、私はずっとここにいるわ」

「お、おまえは…い、いなくて…いい」

「亜羅椰ちゃん結構大胆ね、素敵よ」

「はあ…レロ…ん…はあ…／／／」

そうして5分後

「はあはあ…やつと離してくれた…」

「素敵な彼女ね〜レン教官？」

ニヤリと笑うイロハ

「これで私の方が上と証明出来たわね」

自慢げに語る亜羅椰

「どこが上でどこが下なんだ…」

訳が分からなくなっている僕

「あらあら？私の方が上ですよ？」

自分の胸を強調し、煽っている

「イロハ、そういうのはやめろ」

僕はこんな姉が嫌いだ

姉には清楚であつて欲しい

「えー？なんでえー？」

「なんでえー？じゃねえ！」

言い合う兄妹2人

それをうらまやしそうに見える亜羅椰

「あんな、僕はあんたのそういうところが嫌いなんだ、頼むからそういうのはやめてくれ」

「じゃあ決めましょうじゃありませんか」

「？亜羅椰なんで僕の腕に抱きついて…」

「いいわねーどっちがレンにふさわしいか、決めようじゃない」

2人とも見合っている

すんごい怖い目付きで

2人が見合っている最中に

「?!警報？」

「ジリジリ」と警報がなっている

「何の騒ぎですか？」

「この警報って？」

「ビュージが現れたって事だな」

「やだーはやく行かないといけないじゃない」

「亜羅椰は自分のレギオンと合流、イロハは僕とこい」

「2人でやらしい事やらないでくださいませですわ」

「僕はこいつとそんな事しないよ」

僕はイロハと集合地まで急いだ

「わー凄い、流石名門学院の生徒わねー」

集合地には生徒全員が整列している

辺りを見渡していると全生徒の前に出江の姿が

「今は感動してる暇ないぜ……出江だ、しっかり話聞いとけよ」

「はーい」

「ただいま近隣の地区でケイブが確認されました、今回はケイブの破壊を目的にあなた達には動いてもらいます、もう1つ、今回はエレンスゲとの共闘任務となっています、くれぐれも問題を起こさないように」

では健闘を祈ります」

かつこいい言葉を最後に去っていった

出江がいなくなった後、みんなが一斉に動き出した

「僕らも動く？イロハ」

「そうね…ねえーつ頼みがあるんだけど…」

「なんだ改まって…」

「私が暴走したら止めてね」

「そんな神々しい笑顔で言うことじゃないけど、止めるのは分かってる、僕からもお願いだ、無理だけはしないでくれよ」

「漢らしいわねー」

「黙れ」

僕らは歩き出した

「生徒の安全が第一だ、守ってやれ」

「言われなくても分かかってるわよ」

そして徐々にスピードを上げていった

「健闘を祈る」

「私もね」

互いに無事を祈り

別方向へと走り出した

「無事でいろよ…」

「やだ…死にたくない…死にたく…ぐふあ!!」

瀕死のリリイにトドメを刺すヒュージ

「いや、いやあああ!!」

仲間の死を受け止めきれず、泣き叫ぶリリイ

「こないで…こないで…」

腰を抜かして戦えないリリイ

訓練で何を学んできたのだろうか…

こんな序盤に死ぬなんて思いもしなかっただろうか

だがここは戦いの場

誰が悪いなんてない

人のせいには出来ない

じゃあ誰が悪いのか

結局は自分なんだ

死ぬなんて殺人以外は自分のせいだ

その責任を知らないから人は死ぬ時怖いんだ

誰が悪いのか分からなくなる

答えは自分なのに

それで焦って死ぬ

考えてる暇があれば

「殺せばいいのに…」

「ん？先生、何か言いましたか？」

「いや、なんでもない一柳…」

今僕は一柳隊と行動を共にしている

それにしても何だ今の思考は…殺人鬼みたいな思考だ

僕は教官だ…なのになんで人を見捨てたりしたんだ

なんなんだ本当に…今の思考は

「先生？体調悪いんですか？さっきから何か任務に集中出来てませんけど…」

「ああ、すまん一柳、僕らは今何やってたんだっけ？」

苦笑いをしながらもう一度僕らの行動を確認する

「私たちは今から見つけたケイブの中に入るんです」

「梨璃と夢結以外は散らばってヒュージを討伐、簡単だろ？」

「そうだな…梅、ケイブには最強で有名な白井もいるんだ…大丈夫だろ」

だが少し心配だ

「では作戦行動開始です！」

「了解！」

梨璃と白井は見つけたケイブへ一直線に走っていった

「よし僕らも動こう、とりあえず殺しまくればいいんだな？」

「そうじゃー」

「多分僕はもう一柳隊には戻らない、僕がいなくても心配はしなくていいからな」

「了解！」

「よし、じゃあ散るぞ！」

僕の掛け声と共にみんな一斉に色んなところへ行く

僕はみんなが散っていった逆方向に向かう

「つと！早速ヒュージか！」



走っている途中に目の前にヒュージが出現

「大体、50はいるか…今日も疲れそうだ」

僕はヒュージを目の前に、目を閉じ深呼吸をする

右袖を捲り右腕にマギを集中させる

前、後ろ、斜め

「包围されちまったな」

僕は聴力を駆使して相手の居場所を突き止める

包围されている事が分かったので僕は左袖も捲り左腕にもマギを集中させる

「久々だな、両手って」

そして左にもマギが十分に溜まった

「1時間…いや1時間半つてとこか…」

マギがどれくらい持つか予想をした

「ではスタートだ…!」

その言葉を言い終わった後に目を開ける

開けると同時に

攻撃をし始める

まずは目の前にいるヒュージ

腕を振り見事ヒットさせる

「まずは1匹……次は……」

右にいたヒュージを殺す

「2匹目……このまま時計回りで殺していこう」

「でええい!!」

時計回りでヒュージを順調に討伐していく

そして……

「はあ……もう終わりか」

呆気なく終わった

「よしこの調子でどんどんやっていこう……」

「はあああ!」

特に宛もなく走りながらヒュージを見つけたら討伐する

ただひたすらそれ続ける

走って討伐、本当に単純な作業

「手応えはあんまりねえけど殺らねえと俺らが殺られる」

少し疲れ木の上で休んでいる

「にしても数が多いな、被害も凄いだろうな…」

辺りを見ながら生きてる奴を探す…

探していると

「なんだ？こんな時に地震か？」

少し揺れている

木の枝に立っていたのですぐ分かった

「！いたいた！レン！」

上空からイロハの声が聞こえた

「どうした？」

「この山を超えてもう1つの奥の山あたりから人型ヒュージが多数出現、その山にはエレンスゲの生徒達が」

「まさか?! 困う気か?!」

「多分…」

「よくやったイロハ、俺はその山に行く、イロハはここら辺の偵察、生徒がいれば救援を」  
「了解」

生徒は生徒だ、守らないといけない

僕はその山に大急ぎで向かった

山を1つ超え、次の山の麓まで向かう

ここが囲まれるって言われている対象の山だ

麓を少し歩いていると戦闘している音が聞こえた

「ドンパチやってんなーそんなに音デカくしなくても殺せるのに」

僕は歩きから全速力へとスピードを上げた

「藍！もういいって！」

「藍もつとヒュージ倒す！一葉やみんな守る！」

「藍…」

「だからやめない！戦う！」

190くらいある人間のようなヒュージに

大きな武器を振る小さな少女

人を守りたいから戦っている

だがヒュージには傷1つ付いていない

一生懸命に振っているのに…

「っ！藍！」

「一葉！一葉！」

小さな少女は首を締められている

戦ったのに殺される

これが戦場

「ハイハイ、そこのお兄さん2人ってあれ？人じゃなかった」

背後からした俺の声に人型ヒュージはしっかり反応した

当然俺の方を向いたが…

「あーごめんねー人じゃなかったから頭蹴り飛ばしちゃったー、次は君だよ…ね?!」

向いたが最後

首を締めているヒュージの頭を蹴り飛ばしもう1匹のヒュージの頭を鷲掴みにする

「ねえ君たち、もしかしてロリコン？だったらキモイねー…何か喋ってくれないかー、

やっぱりか…」

ゴキゴキという頭がどんどんかけていく音がする

「じゃあね、来世でもロリコンしてるんだぞー」

「バキツ」という音と共に驚掴みにしていた頭を握り潰した

「エレンスゲの人間だな？」

「は、はい、救援感謝いたします」

とても困惑している

喋っているので分かった

「動けるのは君だけっぽいね、ここらへんにいる負傷リリーの応急処置を、俺は周りにいるヒュージをころしてくる」

「あんな数をおひとりで？ 正気ですか？」

「君はとつとと応急処置をして……よいしょつとちよつと借りていくぞギヤルっぽい人」

「な！」

「男性がチャームを…？」

ギヤルっぽい奴と母性感ヤバイ生徒が言ってくる

「何、なんの問題もないよ」

僕はチャームを持ち山から降りようとすると

「ま、待ってください、せめてお名前だけでも…」

「名乗るような者じゃないよ」

「素晴らしい告げ、山から降りる」

ヒュージの数は…

見た限り5000…いや10000くらいか？

人を10000人殺すと変わりはない

「楽しませてもらうよ」

地面に着く直前にチャームを逆手持ちし回転しながらチャームを振る

そして着地を完了させ周りにはいる奴らを片っ端に切っていく

このヒュージ達は人の血のような青色の液体が出てくる

「きつたねえな」

服についたりチャームについたりしている

「おいおい、勢いだけか?!」

ひたすらぶった斬っている

これはこれで面白い

「ふん!ふん!でえや!」

回転斬りをする液体がとても吹っ飛んでくる

まるで雨のようだ

「それにしてもチャームってこんなに扱いやすいんだな!」

俺はチャームが気に入った

とても気に入った

面白い

デカいから扱いにくいって思ってたけど、一振一振範囲がデカくて切れ味も抜群  
「おおつと!おい!そのチャーム返せよ!それ借りもんなんだよ!」

ヒュージにチャームを取られた

だが僕は焦らず今度は素手で蹴散らしている

殴ってくる相手に対して

パンチを手のひらで下に落とし脇腹に発勁



後ろからくる奴は投げ飛ばして

蹴りには足を掴み頭に蹴りを当てる

「防衛軍の時を思い出すな」

まるで訓練だ

そして目の前にいたヒュージの腕が刃物のように変化した

「お前ら確か腕を刃物と銃口に出来るんだったな、だがそれがどうした？俺には簡単だ」  
目の前にいたヒュージが刃物で刺そうとしてきた

それを綺麗に捌いて

喉を前から持ち

足かけると

綺麗に後ろに倒れる

その瞬間に

「ていー」

突きをしてトドメを刺す

「はあー本当に簡単だ」

俺は笑っていた

やっぱり俺はサイコなんだな

俺は戦い続けた

ひたすら投げてひたすらパンチして、ひらすら蹴って

スタートしてから何分経ったんだろうな…

「はあはあ、何匹…やったんだろう」

あれから15分くらいか

やつと残り100匹くらいだ

「ザー」という雨の音がうるさい

5分くらい前から降ってきやがった

俺は山を背もたれに座っていた

「はあはあ、こんな雨の中だったら武器が恋しくなるな…」

何も関係ない雨と武器についての独り言を言っていると5匹俺の前に現れた

「はあはあまたかよ…」

俺は立ち上がった

限界に等しかったがここでやらないと死ぬ

こんなところで死ぬなんてやだね

「ま、いいや、丁度ね、汗かきたかったんだよ」

「ふん！」

武器を捌いては投げ

そして突く

これが今となつては本当に疲れる

「ほらー！」

ヒュージの腹に前蹴りを食らわしたり

「ふっー」

発動をくらわしたりした

「はあはあはあはあ……残り50匹つてところか……」

もう無理だ

防衛軍でもこんなには動いたことがない

「俺……もう死ぬんじゃねえか？」

雨に打たれながら深呼吸する

「もう……やべえかもな……せつかくのスーツが……台無しだ……」

めちやくちや汚れてボロくなってる

「この春買ったばつかなのに……ん？なんの音だ……？」

腰あたりから「ピッーピッー」と音が鳴っている

「？無線？いつから……？」

無線を持った記憶がないが一応出てみる

「こちらレン教官、誰か応答願う、送れ」

スピーカーに耳をあて、応答を待つ

「こちらイロハ教官、レンなのね？送れ」

「そうだ、いつから忍ばせてあつた？送れ」

「人型ヒュージが現れたつて言つた時よ、送れ」

「お前は凄いな、バレずに無線を腰につけるとは、送れ」

「私はスピードで勝負しますから、送れ」

「そうだったな、それでいまの状況は？送れ」

「現在ケイブの破壊を確認、残るヒュージを片付けるところです、送れ」

「了解、ヒュージを殲滅する、終わった際にはまたかける、アウト（以上）」

俺は無線をきつた

そして立ち上がった

「なんか久々に人の声聞いたように思えるな」

体を伸ばしながら言う

「どうやら残り50匹は俺が倒さねえといけねえっぽいな」

残りのヒュージは俺がいることを認識し俺の方へと近づいてくる

「さ、死んでもらおうか！」

俺はあえて自分からヒュージの群れへと走つた

最初に目に入ったやつ  
の腹にパンチ  
そして目に入ったやつに蹴り  
目に入ったやつから殺していった  
無言で

そしてとうとうラスト1匹

「はあはあラスト1匹……」

ラスト1匹：俺は右腕にマギをためた  
「せつかくだ、こいつで殺つてやるよ」  
とても深い深呼吸をして、集中する  
そして走り出して

真つ二つにした

まるで侍のように素早く明確に切った

ヒュージは倒れ、直後に雨が止んできた

「やっぱり雨は嫌いだ、すぐ寒くなる」

こうして僕の任務は完了した

「はあはあ、任務完了、帰還す…」

僕は倒れた

意識は無いに等しかったが

少しだけ人が見えた

誰だか分からないが…

今回の任務はもう根性でどうにかしないとイケなかったな

過去一で大変だっかもな…

# SIXSTORY—感謝—

人は日々、感謝をしている

ご飯を食べる時は様々な生き物に感謝する

自分のミスをかバーしてくれたり、助けてくれたりする時に感謝する

人間は1日に沢山の生き物に沢山感謝している

僕だって色んな人に感謝している

親や、同期

でも僕はどちらかというと感謝される側の方が多い

なんでだろうな：

昨日の戦闘から一夜明け、朝の時

僕は知らないところで目を覚めた

白い綺麗な天井が目に入り



日光が窓から眩しいくらいとても入ってきている

そして鬱陶しいくらい、筒のような物が体に貼られていた

僕はすつと起き上がり周りを見渡した

辺りに人はいなく静かであつた

「どこだ、ここは？病院？」

僕の左後ろにあつた機械をみて確信する

「病院だ」

でも何故僕は今病院にいるのだろう…

あの後僕は倒れて…

そつから覚えてないな…

何も覚えていない

「とりあえず、寝とこうかな…」

体もダルいし、頭も少し痛い

こういう時は寝るに限るな

「？足音？」

寝ようと体を元の位置に戻した瞬間

こちらに近づいてくる足音が聞こえた

「誰かくる……」

一応警戒をした

ここが本当に病院なのか分からない

数秒して、足音が止まった

ドアの下をみると影があった

「……で止まってやがる……誰だ……」

ここで問うのはやめよう

相手が部屋に入ってきてからだ

そしてとうとう相手はドアを開けた

ゆっくりと静かに

心臓の音が聞こえるほど何故か緊張していた

緊張しながら僕はまず顔の方を注目した

「……目覚めていたんですね」

部屋に入ってきた人は青髪の少女

制服を着ていたので百合ヶ丘では無いことは確かだ

少女と分かった瞬間にホッとした

警戒していた僕がバカバカしく思えてきた

ん？

この子どつかで見たことあるような…

でもなんで見た事あるんだろう…

百合ヶ丘の生徒以外は見た事ないような…

一生懸命に考えていると少女は僕のベットの近くにあつた椅子に座つた

「特に大きな損傷はないと診断されています、復帰は早くて明後日には出来るかと」

「あ、ああそうなのか…そりや良かった…」

明後日には復帰か…今の状況を知りたいがやめとくか

「あのーすまんが君つて僕に会つたことある…？」

遠慮気味に話しかけた

「？会つたも何も、昨日助けてくれたじゃないですか」

「あれ？そうだっけ？」

記憶がない…

昨日僕は何をしてたっけ…？

「あなた、記憶がないんですか？」

「そうっぽいな…てか君は何者だ？」

「あ、すみません自己紹介を忘れていました」

大人だなー

百合ヶ丘の人間ではない

どこかの職員か？

「私は相澤一葉という者です、学院はエレンスゲ、所属レギオンはヘルヴォル、隊長を務めています」

「レギオンの隊長さんがなんで僕のところにいるんだ？」

「お見舞いです」

「そんな大切じゃないことをよくするね…」

「お見舞いだけではなく私たちはあなたに感謝をしに来たのです」

「感謝ね…」

感謝か、そんな大層な事しなくてもいいのに…

とりあえずこの子は帰ってもらおう

エレンスゲは確かヒュージと戦うことが目的、いつ任務が入ってもおかしくはない

「感謝の気持ちは嬉しいが君はエレンスゲの生徒、いつ任務が入ってもいいように今日

は帰った方がいい」

エレンスゲがいないと僕らもヒュージにやられてもおかしくないしな

「任務の事ならご心配なく、今日は休暇という事でここに來てますし、ここは病院ですがもうすぐそこはエレンスゲですし」

「え？」

「？」

「いまなんと？」

「すぐそこはエレンスゲですが……」

ま、マジかよ……

帰るべき人間は僕だったか……！

不味い不味い……！

百合ヶ丘のリリイが心配で仕方がない！

「はあ……」

「ため息をつきますと幸せが逃げますよ？」

「僕は幸せなんて元からないから安心して」

「またも「はあ」とため息をつく」

「どうしようか……」

待てよ…何故この子は僕がここにいると知っている？

「て、てかさーなんで僕がここにいて分かったのー？」

苦笑いしながら質問する

「分かったも何も私たちが運んできたので」

「ん？どういう意味だ？」

「貴方が倒れているところを私たちレギオンが見つけて運んできたって事です」

「待てよ、なんで僕を百合ヶ丘の方まで運んでくれなかった?!運んでくれたのは嬉しいけれど…!」

「何故って…この病院が近かったからです」

「まじか…」

でもそんなには遠くないはず…

女性が運べる距離だ…

いや待てよ

エレンスゲは確か東京…

百合ヶ丘はというと…

「神奈川の鎌倉…」

程遠い…遠すぎる！

どういう事だ…

頭の整理が追いつかん

と、とりあえず今はこの子から情報を提供してもらおう

「ひ、一人で僕を運んできた…の？」

「いえ違います、私たちレギオンが…」

「!?誰だ？」

相澤が発言している途中にドアを開ける音がする

発言をやめ2人とも警戒する

「ノックもなしで入ってくるとはな…」

ガラガラとゆっくり音がなり、ゆっくりドアが開く

数秒後にはドアが完全に開いた、が

「誰もいない…?」

通路には誰もおらず、ただ音が聞こえるだけ

よく耳を澄ます

ドアの前に誰がいるか確認をしていた

しかし音は何も聞こえない

「相澤、すまんがドアの前を確認してくれないか？」

「分かりました…」

相澤は恐る恐るドアに近づく

そして僕は引き続き耳を澄ます…

「!?」

横から足音が聞こえた

僕の横は特にないが外の空気を吸えるベランダ的なところがある

その上らへんから音がする

「カッカツ」と歩いている音だ…

「相澤！何かいたか?!」

「いいえなにも！」

僕は相澤の方を見ながら問う

「じゃあやっぱりこつちに…つ!?誰…!」

「?!教官！」



「ぐ、ぐう痛いー!!」

窓から出てきたのは一人の少女

その少女は僕を床に座りながら睨んでいる

睨み合っていると相澤が駆け寄ってきた

「ら、藍!なんでそんなところから!」

「一葉ー!この人に殴られたくやっばいい人じゃないー!」

「あ、相澤知り合いか?」

「は、はいヘルヴォルの隊員です…一体あなたは藍に何を…」

「窓から出てきたら地面に叩きつけられたー!」

「すまんすまん!てつきり敵かなんかと思つて…」

「防衛軍幹部つて怖いですね…」

「相澤、誤解するな!」

「防衛軍はこわーい！」

ニコニコ笑いながら言っている

弱みを握られたような感覚だ

足音がしたのでドアの方を見ると3人エレンスゲの生徒がいた

「どうしたのー？一葉？何そんなにザワついてって…えー!!起きてるー！」

急に距離を縮めるエレンスゲの生徒

「いや僕はそんなに重症じゃなかったから起きていてもおかしくは…」

「ほんつつつつつとに助けてくれてありがとうございます！」

至近距離で感謝を述べられた

「相澤さん…僕本当に昨日何をしたの…？」

苦笑いしながら相澤に聞く

すると相澤は自信満々な顔をしながらこう言った

”リリイ助け”です！」

僕が目覚めてから早2日経った

「そろそろ退院だなー」

やっと退院できる

百合ヶ丘のみんなが心配だったがやっとその気持ちも取れる

僕がぼっーとしてしているとドアがノックされた

「相澤です」

「入ってどうぞ」

名前を名乗り知っている人物だったので許可した

「どうした相澤？退院を祝いにでも来たのか？」

「それもあります。今回はもっと重要です」

「なんだよ…そんなに改まって…」

何か嫌な予感がする…気のせいだといいが…

「率直に言います」

「ああ」

「エレンスゲ女学園の教導官になって欲しいです」

嫌な予感的中したな…

「何故僕が教導官を？僕は百合ヶ丘の教官なだけど…」

「それは重々承知しています…ですがエレンスゲをもっと強くするにはあなたのような何事も守れる人が教官をするしか無いのです…」

「随分と申し訳なさそうだな」

「はい…私もそれほど頭はおかしく無いので…」

困ったな…百合ヶ丘かエレンスゲか…

正直こいつらを育てた方が人類の生存率は上がる

だがここで百合ヶ丘を捨てる訳にもいかない

どうしたもんか…

「分かった、”君達”を育ててやる」

「!!ありがとうございます！では学園に…」

「おいおいちよつと待てよ」

「え？なんでございましょうか」

「誰も学園”全員”育てるとは言ってるねえよ」

「ではどういう意味が…」

”君達”…つまりヘルヴオルだけを育てる、という意味だ」

「な、何故私たちだけを…」

「僕は2つのガーデンの生徒全員を育てられるかと言われたら無理になってしまふ、だが1つのレギオンなら簡単だろうと思ってるな」

相澤はとても驚いた顔で止まっていた

「これからよろしくな、相澤…いやヘルヴオルさん」

「はい！」

こうして僕はある1つのガーデンのレギオンを育てることになった

これからどうなるかは分からないがこのレギオンをそだてれば人類の生存率も上がるだろう…

退院してから3日が経った

僕は山のあるところで人達を待っている

「……」

遅い…遅い！

どれほど待たせる気だ…

予定時刻より8分28秒37も遅れている

「すみません…！教官！遅れてしまつて…」

数秒後に人が来た

「遅いぞ相澤！何をしていた？約8分30秒も遅刻するとは…？どういう事だ？説明してもらおうか…！」

「す、すみません！じ、実は…訓練をする事を…忘れ…ていて…」

どんどん小声になっていく一葉

「いきなり思い出して…用意に時間が…かかってしまつて…」

「はあ…いいか相澤…今回はもう見逃してやる、忘れているのは仕方ない…今後このよ  
うな事が無いように対策を取れ」

「！ありがとうございます！」

「そういえば相澤1人で来たのか？他のメンバーはどこに…？」

「みんなまだ準備をしまして…私が急に言つちやつたものだから…」  
「なるほどな…」

相澤一葉、学園内では色々と1位だがたまにへまをする

これが今なつているへまか…

人間完璧じゃないって事だな…

「とりあえず相澤はあそこの家で訓練の用意を、僕はここにいる」

「家？あなたの家なのですか？」

「昨日、買つておいた」

「す、凄いですねえ…」

「どうでもいいからはいやく用意を」

「了解！」

駆け足で家に入る相澤

家に入った直前に声が聞こえた

「教官ー！遅れてすみませんー!!」

「遅いぞヘルヴォル…今相澤があの家で訓練の用意をしている、君たちも用意を」

「…了解!」

「全員いるな？」

「はい、います」

「では訓練を行う」

「今日は何をするのでしょうか？」

「今回は対人戦闘をする」

「対人？意味はあるのですか？」

「前の戦闘でもいたが今人型ヒュージの出現率がupしている、それを想定した訓練だ」

「対ヒュージはやらなくていいのー？」

「君達はヒュージとの戦闘は他のどのガーデンよりも優れている、実施してもいいが人型ヒュージにやられるだけだ…なので今回は対人戦闘を行う」



「対人ではこんなに長い武器は不利になる、なので今日はこの木製の短刀を使って訓練する」

「不利？あなたはあんなに使いこなしていたのに…？」

「僕は対人戦闘のプロ、いくらこんな大剣を振れても隙が生じて死ぬ確率が上がる＋疲れるしな」

僕は5人に木製の短刀を配る

あの人数での戦闘はチャームは使い物にならない

短刀の方がよく振れて隙がない

「短刀のチャームはまた工廠科にお願いする、完成した際には君たちにも報告する」

「今はこれで訓練ですか…」

「本物をご所望か？」

「いえ、そんな事ではないのですが」

「何かあるのか？」

「その、私たちが慣れている武器での戦闘の方が有利なのではないかと思って…」

「…確かにそうだな…じゃあ確かめてみるか？」

「はいはい！藍やりたーい！」

「いい勢いだ…では僕と佐々木でやる」

「わーい！わーい！」

とても喜んでゐる佐々木

僕らはお互いに距離をとつた

「ルールは簡単だ、僕は素手でいく佐々木は僕にチャームを少しでもあてたら勝ちだ」

負ける訳がない

「ちよつと待つてください！あなたチャーム所持のリリイを相手にしてるんですよ？死ぬに決まっています！」

相澤が僕の前に出てくる

「安心して、僕は“死なない”から」

死のうとしても死ねない…それが僕だ

それに僕はほぼ毎日リリイ達の訓練をしている

相手は大きな剣だ、人にはそんなの通用しない

「相澤、スタートの合図を」

「…分かりました、いきますよ？よいいスタート!!」

合図と共に一気に距離を詰める佐々木

「無駄なのにな…」

「?!藍!!」

「いたーい!いたーい!」

「強くやりすぎちやつたかな…」

佐々木は地面に倒れている

その近くには相澤がいる

とても心配している

「一体何を」

「ただ投げ技を仕掛けただけ」

「そうには見えませんが…」

「二つ一つ解説していくと… まず佐々木は僕一直線にチャームを刺そうとしてきた、だが僕はチャームを持っていて左手で止め顎に掌底を打った直後に足を掛けて地面に転ばせた、ただそれだけだ」

手順だけでは簡単だ

それを体に馴染ませるのが難しい…

だから日々の訓練は大事なんだ

「これで分かって貰えたかな？人には大剣、デカイものは通用しないって」

「凄い…凄すぎる…改めて感心してしまいました」

「これから訓練をやつていけば君たちもすぐに出来るよ…」

防衛軍の時と一緒にだな…

生徒に教えていい生徒をつくる

何がいい生徒だ…

結局みんな政府の判断で死んでいった…

こいつらもいつか政府の判断で死ぬのか…？

こいつらの絆や命はどこにいくのだろう

「教官？何か考え事ですか？」

「あ、いやなんでもない相澤、ちよつと昔の事を思い出したただだよ

君達のような光ある目をした人達をね」

「どゆことー？藍分からなーい」

「なんでもいい、訓練を続けるぞ」

手を差し伸べてその手を佐々木が受け取る

「!？」

手と手が合わさった瞬間に妙に嫌な予感がした

昔の事を思い出した

佐々木つてどこかで聞いた事あるとは思っていたが…

「奴だ…奴だ…」

僕の声は腰抜けた臆病な声だっただろう

「教官? どうされましたか?」

相澤が視界に入る

だが僕は相澤を押し退け佐々木に近づく

「藍! 君の身内に戦場で行方不明になった者はいるか?！」

「……」

「……やはり言いたくないか…すまない変な事を聞いて…」

僕は佐々木から目を離した

心を落ち着かせようと景色を見ようとすると

「お母さん…」

「なんだって?」

「だからお母さん…」

「!!良く言ってくれた佐々木…感謝する…」

佐々木藍、どこかで感じたことのある人情  
戦闘が好きなリリイ

全てが繋がった…

そうだあの時、僕が戦ったのは…

佐々木藍の母である…

「気づいたのか…レン…」

どこかの山の麓でニヤリと笑う女性

真横にはチャームが刺さっている

「久しぶりの戦いになりそうわね」

とても喜んでいる様子

白髪でポニーテール姿の女性

髪色は佐々木藍と似ている

僕のメイン任務はリリイ育成なんかじゃなかった…

「悲しい再会になりそうだ…」

佐々木藍の母親である佐々木燐を殺すことだ

だからあの人は僕の配属先をここに…

「教官！どうされたんですが?!」

奴の事を思い出した瞬間にいきなり頭が痛くなる  
痛かったのでおさえていると相澤が心配してくる

「あ、すまんすまん嫌な事を思い出した…」

詳しくは話さないがとりあえずその言葉で流した

「教官、体調がお悪いのでは？」

「そうかも…」

「今日の訓練は中止しましょう」

「私もその方が良いかと…」

「すまないが今日はこれにて終了とさせてもらう、集中が出来なくてな…自己勝手ですまんな…」

「いえとんでもないです…慣れない環境での生活はやはり体に負荷がかかる物です…」

「百合ヶ丘に戻らないと…」

息がどんどん抜けていく

しんどくてもアイツらの心配をしてるなんて

僕も馬鹿だな…

「私がバイクで百合ヶ丘まで教官を運びます！」

「ちよつと一葉？正気?!」

「はい恋花さま、こうなったのも私たちがここに運んできてしまったからです、なので私が責任もってお送りします」

何を言っているのかさっぱり分からないが僕を百合ヶ丘まで送るとかなんとか…

「行きましよう、教官！」

僕の手を掴みやや強引気味に引っ張って走る



「一葉ー！ちよつと……行っちゃった……」

「ここは任せましようか」

「教官！乗ってください」

「分かってる……」

ダメだ奴の事で頭いっぱいだ

頭痛のせいで反応が鈍くなってやがる

これも奴が何かやったのか……？

僕はバイクの後ろに跨りバイクをしつかり掴む

「準備出来ましたか？」

「……あ……出来ている」

親指を立てながら発言する

「教官本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫だ」

頭痛はどんどん酷くなっていくが相澤に心配をかけさせたくない……

そしてバイクはエンジン音を出して勢いよく出発する

出発してから20分程経っただろう

何も考えられなくなってきた…

「はあ…はあ…」

息遣いも荒くなってきた

しんどいな…

「教官?!生きてますか?!」

「なん…とか…」

ヤバい…なんでだ?

なんでこんなにも急に…

「ぐっ…く!!…」

いきなり頭が「キーン」と痛くなっていく

「クソ…野郎め…」

とても頭が痛い…

過去最高だ

頭痛が激しくなっていく

「キーン」という頭痛は治まりつつあると思っていたら

どこからか声が…

「ご機嫌いかが？久々ね、レン・リエスタさん♪」

佐々木の母、燐の声だ

とても上機嫌の様子だ…

「はあ…どこにいやがる…」

辺りを見渡す

だが人はどこにもいないし、バイクで走行中なのに声が聞こえるのはおかしい

「教官！どうかされたんですか?!」

「独り言だ…気にせず走ってくれ…」

「了解！」

「あらあらお仲間さん？」

「てめえに教える訳ねえだろ……」

ダメだ、どんどんと体がダルくなつていくし

頭も痛くなつていく

「随分としんどそうね」

「前もやつてきただろ……」

「前つて随分と前の話ね」

「そうだな……まだあんたがもうちよい若い時だな……」

「そんな状況でも悪口を叩けるのは変わつてないわね」

「事実だろ？ 2年前はあんたは33……つてことはあんたもう35か」

「もう死にたい？」

「ふっ……僕を殺せるのか？ 君ごとときで……」

佐々木燐

僕がまだ17、防衛軍に入隊したくらいに戦つた相手である

唯一僕が恐れている人間……いやリリイか

こいつには1度殺されたが追撃はしてこなかったので完全に死には至らなかつた

「あんたの性質、よく分かつたわ、この2年間で」

「そりや楽しみだ…いつか戦える日を待つてるよ…」

「あらあら、私一言もまた今度とは言つてないわよ?」

「今日殺りにきたのか?」

「もちろん♪」

「来ていただき申し訳ないが、今日はいにくの体調不良でな…さっさと僕から離れてくれないかな?」

「なんで近くにいるって分かつてるの?」

「影で分かつてるんだよ…」

「分かつたわ…今日は見逃してあげるわ、大人の余裕つてやつ♪」

「ババアがそんな事言うときツイな」

「気が変わったわ、今日戦いませよ」

「冗談だ…綺麗なお姉さんは僕の事を見逃してくれるよな?」

「そこまで言うんだつたら見逃すわよ…次あつたらやり合ひませよ」

「それまでに死ぬなよ?」

「あんたもね」

話し終わった瞬間にだんだんとしんどさが無くなっていた

「相澤、もう着くか？」

「あと数分です！体調の方は?!」

「君の声を聞いて元気になった、引き続き運転を頼む」

「りよ、了解！」

またあいつと喧嘩か…

2年前に殺しとくべきだったな

実力が無かったから殺せなかったんだけどな

みんながあいつとヒュージに殺されて

僕だけ火に囲まれる中、奴と戦って

1度殺されて…

思い出すたび思うよ

「最悪だったな…」

「教官！百合ヶ丘に到着しました！」

「ありがとう相澤…運転ご苦労様でした」

「あ！レニー！おかえりー！お姉ちゃん心配したんだよー？」

「ちよ、抱きつくのはやめろ！人がいるんだ」

飛びついてくるイロハを退ける

「ありがとうな相澤…つてもうこんな時間か…」

時刻はもう21時…

「相澤をもう一度運転させる訳にもいかないしな…」

「あ、私なら大丈夫ですよ」

「大丈夫であつてもな…」

「あ、私が行こうか?!付き添いつて事で！ほら私飛べるじゃん?!」

「そうだな…別に教官であるこいつが死んでも誰の責任でもないし…よし相澤の付き添いでエレンスゲまで行ってくれ」

「了解！」

「本当に大丈夫ですから…」

「遠慮しないしない！」

「相澤、今日はありがとうな…また明後日にはそっち行くよ」

「はい了解しました！」

「え？なにになに付き合ってるのー？」

「僕と相澤はそんな関係じゃない」

「そうよねー亜羅椰ちゃんがいるのに付き合ってる…」

僕は咄嗟にこいつの口を抑える

今こゝで言われると色々と誤解を招く

「え？教官がなんて言いましたか？」

「いやなんでもないよ相澤、と、とりあえず今日はありがとう」

「いいいえ、こちらこそ今日はあなたの凄さを知れて嬉しかったです」

「なら良かったよ…ほらとつとへ行け駄目姉が！」

「はいはい分かっていますよー！行こうか相澤ちゃん！」

「はい！それではごきげんよう！」

一礼してバイクに跨り出発する



「また対策しないとな…奴の対策…」

# SEVENSTORY—訓練—

今日は夢を見た：

夢には真島と他の誰か知らない人が僕の周りにいた

周りの人はとても武装している人や身軽な装備をしている人、僕と真島含めて5人いた

誰だろうな：

そしてここが1番驚いた

僕は煙草を吸っていた

僕はあまり煙草が好きではない

父が吸っていており、吸い終わった直後の父の服についた匂いはとても嫌いだった

なのに、僕は煙草を吸っていた

「訳が分からない…」

今日から本格的な訓練が実施される

対人やヒューズ戦

リリイにおいて必要な想定訓練

僕の”表”の仕事は訓練

やらなければ職務放棄に値する

これだけはしっかりやらなければいけない

「随分と何かをお考えのようですね、リエスタ教導官」

「別に何も考えてないよ」

「嘘はあまりよくありませんよ」

「流石出江さんだな…今日から本格的な訓練が行われる…しっかり取り組んでくれるのか心配だな」

「それは百合ヶ丘のリリイを舐めているという事でしょうか」

「違う、対人はみんなやった事がないからみんな取り組んでくれるのか…」

「百合ヶ丘のリリイはサボるといふ事はしませんのでご安心を」

とても自慢げに言う出江

「あんたの言葉で安心したよ、1つ提案なんだけど3年にも対人を…」

「結構です！」

恐ろしく早い返答…僕じゃなきや見逃しちゃうね

「ではごきげんよう」

「ああ」

挨拶をし、僕に背を向けどこかへ行く出江

どこか安心したような背中だった

きつとしっかり訓練してくれると安心しているんだろう

「そんなに不安にならなくても僕はしっかりやるよ」

そういえば何か忘れてるような気がするな…なんだっけ

ま、思い出したらその時はその時だ

ヒトマルマルマル（10時00分）、訓練開始

1年の訓練か…1年生は虐めとかあったから怖いな…

今日は室内での訓練になる

理由は対人戦だから

素人が外で投げ技しかけたりしたら骨が折れる危険性があるし  
普通に服汚れるし

「今回の授業では対人の戦い方だ」

整列している生徒に授業の詳細を述べる

「投げ技や突き蹴り、関節など様々な技術があるが今日は制圧に1番必要な投げ技を教える、ではまず体操してください」

今日は投げ技について教える

制圧するのに欠かせない物だ

突きや蹴りでも制圧出来るが1番手っ取り早いのが投げ技

力がなくても関節を極めたりすることで投げ技になる

今日はとりあえず様子見をメインに訓練を見ていこう

「教官、準備が終わりました」

「了解だ…ではさっそくだが投げ技の指導に入る、今日は初級中の初級を教える、誰でもいい前に出てきてくれ」

誰も前に出てくる様子はない

そんなに怖いのか？

誰か手を上げないと授業が…

「は、はい！私がやります！」

素晴らしい手を上げたのは一柳だった

よく誰も上げないところで手を上げた

取り組みは誰にも負けないな

「よしでは、一柳前に出てくれ」

「教官私何したら…」

「この短刀で僕に突いてくる、ただそれだけ」

「は、はい…」

「そんなに怖がらなくてもいいよ軽くやるし今回は怪我する確率は低い技だし」

「は、はい！」

「ではまず見ておいてください、相手である一柳は僕に短刀を突いてきます、それを簡単に制圧する投げ技です、よしいいよ一柳」

「はい！ではいきます！」（いつもみたいに優しそうな教官じゃない…戦う時はこういう感じなのかな…？）

「てい！」

一柳が声と共に僕を突いてくる

僕はそれを左手で流し右腕を一柳の左肩まで持つていく

そして右腕を斜めに力を入れ右足で足をかけ一柳を地面に倒す

「一柳怪我はないか？」

怪我はしないと思うが一応のため確認した

「はい平気です、だけど何をされたか分からないです」

「やられてる側は分からないよね…もう一回やってくれるかい？今度は一つ一つ解説しないといけないんだ」

「はい！喜んで！」

「ありがとう、みんな見たか？これがとても簡単に制圧する方法だ」

「分からないですわね…」

「見ただけで分かる人の方が凄いや、一つ一つ解説していくね」

横を見ると一柳の準備は完了

「まず相手が突いてきたら…いいよ一柳」

「はい！」

短刀を持っている方の手を左手で流す

「このように武器を持っている方の手と同じ向きの手を使って手首を少し触るだけ」

(なるほど…)

「自分より後ろ、もしくは右側に短刀がいったら右手で相手の左肩を掴む、そうしたら後は右足で足を払い右手を斜めに落とす、たったこれだけだ」

(手順を踏めば簡単なように感じる…)

「これを各自ペアをつくって練習してください、分からない事があつたらまた聞いてください、では各自練習」

みんな整列状態から少し広がって練習を開始していく

「ありがとう一柳助かったよ」

「いえいえ、私みんなに置いてかれないようにしてるだけなんで…」

「君の努力は誰にも負けないから置いてかれる訳ないよ、引き続き努力して強くなつてくれ、応援してるよ一柳」

「ありがとうございませす!」

なんか今の言葉たらしつぽかったか…僕自身でも気持ち悪いと思つたよ

でも一柳の努力が誰にも負けないのは事実だ

人一倍、いや人二倍努力して…凄いよ



その後はみんなしつかり取り組んでくれていて、この技はクラスの約9割ができるようになった

上達がはやくて助かるよ

「あつ終了10分前か…そろそろ終わるか、練習辞め！最初の体型に移動！」

集合の合図をする

2、3分かかると思っていたが10秒くらいした時にはもう体型移動は終わっていた  
やっぱりはやいな

「今日の訓練はこれにて終了する」

「まだ10分はあるのにですか？」

「次の授業もあるだろ？」

「そんなに余裕がなくても…」

「人間のマナーは5分前や3分前には集合場所にいるのがマナーだ」

「はあ…」

「とりあえず今日はこれにて訓練終了だ、では解散！」

今日の1個目の訓練が終わった

あと2回もあるのか…

防衛軍の時は1回で凄く多い訓練をやっていたから楽だったな

次の授業は2年生か…

2年生とは全然絡みがないからどういう風に接触すればいいのだろう

何を教えようか、やっぱり投げ技がいいのかな1番簡単だし

でも突きや蹴りの方がいいのかな

やべえどっちだろ

「また何か考えていますね」

「そうなんだよ、2年に教える技投げか突きや蹴りどっちにしようか迷ってて、どっちがいいと思う？出江さん」

「そうですね……2年生は1年生の時に少しは対人をやっていた筈なので突きや蹴りの方でいいんじゃないんでしょうか」

「そうかやっていったのか、ありがとう出江さん」

やっぱり出江さんは頼りになる

百合ヶ丘にきて間もないけど、この人は信用出来る1人になっている

「出江さんは僕の監視役に選ばれたの？それとも自分から立候補したの？」

「急にどうしたんですか？」

「いや出江さんがなんで監視役なんだろうって思ってた」

「…私は自ら立候補しました、いい経験になるかと思いましたが」

「へー」

「なんでそんな事を聞き出したんですか？」

「なんとなく」

「珍しいですね、理由もなく質問するなんて」

「なんか言葉に思わずらくてさ、でもこの質問をしようとしたのは、出江さんが僕の監視役で良かったって思ったからだよ」

「え！／＼／＼きゅ、急にそんな事言わないで下さい！…／＼／＼」

「どうした？顔赤いぞ」

「な、なんでもありません！」

「そうかならないが」

「ほ、ほら！2年生来ましたよ！しっかりと授業してくださいね！…／＼／＼」

「分かってる分かってる」

めっちゃめっちゃ顔赤いけど本当に大丈夫なのか？

ま、本人も大丈夫って言ってるし大丈夫か

「2年生、藤組だな？」

「はいそうです」

「ではこれより訓練を開始します、よろしくお願いします」

みんなが整列している前で一礼する

それに伴い生徒みんなも一礼する

「今日は対人の訓練をする、対人の中でも難易度は普通の突きや蹴りについての訓練をする、難しいかもしれないが頑張ってくれ、ではまず体操してください」

そういえばここにグローブってあるのか？

出江さんに聞いとけば良かった…！

ちよつと倉庫探してくるかあ…

みんなが体操している間に倉庫の方へ移動する

とはいっても数メートル離れたただけだけど

「えーつとグローブ、いやミットでもいいかもな…」

ガサガサと音をたてながら色々な物を掻き分ける

「にしてもホコリっぽいな…物も散らかってるし、掃除されてないのか？」

そうこの倉庫はとも汚い

名門学院の倉庫が汚いとは思ってなかったよ

「あ、あった」

物を掻き分けているとミットがあつた

それも一つではなく結構な数がある

「こんだけあればペア練習は出来るか…よしそうしよう」

元の位置へ戻ると体操を終え整列していた

はやいな、やっぱり

「よし、ペアを組んでこのミットを1個ペアで持つていつてくれ」

順序よく授業に取り組んでくれる2年生

こういうのには慣れているのかな

「今日行う訓練の内容は正しい突き・蹴りの仕方だ」

正直いつて今回はとても緩いだろう

「まず突きについて説明する、誰か前に出てきてくれ」

「じゃあ、あたしが」

そっくり手を挙げたのは金髪の少女

「よく手を挙げてくれた、天野天葉さんだったっけ？」

「そうだよ、あたしは天野天葉」

天野天葉、スキラー値が高くリレイになった少女

現役最高マジ保有量を誇っておりマジ抜きの身体能力も抜群  
磨けば僕と張り合える人間になるかもしれないな…

期待はしていよう

「突きは構えにもよるがとりあえず腕を伸ばす事が重要になってくる、こんな風に…い  
くぞ天野」

「はいよ」

天野に合図を送りミットへ突きをする

僕の拳が当たった直後に天野は少し後ろへと下がっていた

「先生、強すぎ」

「すまん、これでも加減はしたんだ、すまん」

「はは、謝ってる顔可愛い」

「天野…また後で話そう…!!」

天野…まさか教官にもそんな事を言うとはな

「こんな風に腕を伸ばす、それを意識したら威力は出るだろう」

「はい、先生質問です」

「どうした天野」

「もつと重量を乗せるにはどうしたらいいですか？」

「更に重量を乗せたい場合は肩まで伸ばす、隙は生じるが一撃はとても重くなるだろう」  
「困った顔期待してただけどな〜」

「馬鹿言え、僕は対人ではプロなんだ格闘で分からないことはほぼ無いに等しいんだぞ」  
「こいつ僕が防衛軍って事知らないのか？」

「ではとりあえずペアで先程取ったミットで練習してください」

「先生、あたしとペア組みませんか？」

「天野さん、今の人数は偶数ですよ？僕含めたら何になる？」

「ちえー」

天野天葉、よく分からないな…

「分かったならしつかり取り組んでこい、天野さん」

「はい分かりました！」

敬礼し、ペアのところへ駆け足でいく天野

「まじで言う事がよめない…」

百合ヶ丘で一番不思議な人物だろうな…

その後は何も考えないまま、ただ「ポッー」っとしていた

何故だろうか…何も考える気がなくなった

ふと腕時計を見ると

「10分前……」

もうそんなに時間が経っていたのか……

集合させて終わらせるか……

蹴りはまた今度で大丈夫か

「練習辞め！最初の体型に移動せよ」

言っている最中にはもう移動していた

先読みも出来るのか……

大したもんだ

「これにて今日の訓練を終えます、お疲れ様でした」

終了の挨拶をする

一礼を僕からし、その後生徒みんなが一礼をした

窓をふと見ると人影があつた

その直後……



「っ！全員しやがめ！」

その言葉と共に大量のマジが飛んできた  
とてつも無い大量のマジ

「クソ！襲撃がはええよ！」

僕は勘づいた

奴だ奴に違いない

「全員！その場でしやがんでいろ！」

「先生は何を?!」

「僕は対応してくる！」

「1人で、ですか?!」

「動けるのは僕くらいだろ！とりあえず大人しくしているろ！」

僕はそう告げ、足にマジをため対象のところまでジャンプする

「随分と焦ってるわね？レンさん」

「黙れ！お前何を考えている?!俺だけならまだしも…生徒を巻き込むなんて…正気か

?!

「そんなに生徒が……大事かしら?!」

「な、しまった!」

僕を抜け生徒の方に一直線に行く佐々木燐

「ねえ!死んでみない?!」

「させるか!」

指をマギをため燐向かってマギを放つ

見事命中し、マギと地面に挟まり少し硬直状態に

「全員この場から至急離れろ!」

生徒に指示し、暴れる準備をする

腕にマギをため燐に切りかかる

「死ぬがよい!」

「誰が死ぬのよ!!」

僕が腕を振った瞬間に腕を軽く止められる

押し切れると思いきや更に体重をかける

「くっ……やっぱりこれじゃ死なねえか」

「私も舐められたもんね……!!」

「ちっ!」

握られていた腕を思いっきり振って投げ飛ばしてくる

その直後に俺は舌打ちをした

飛んでいる途中にバク転で体制を立て直す

「馬鹿力ババアめ…」

「誰がババアつですって?!」

「あめえよババア!」

「あら」

掌底打ちを躲し首を軸に空中で廻し、地面に抑える

「ほらババア、とつとと諦めて降参し…っ!・ゼロ距離で…!」

俺は天井へと飛ばされた

焔は腕からマギを発射した

俺は宙に浮いていた

「どうしたの? 為す術なく死んじやうの?」

「そんな訳ないだろ!・んっ!!」

手刀で攻撃を加えようとすると焔も腕にマギをためる

力と力がぶつかり合った瞬間に辺りには衝撃波が流れた

そうとうな力と力がぶつかり合った

互いの腕の骨には支障をきたしているだろう

「い、痛いわね…レ、レン」

「俺もだよ、燐…」

両者共に力が抜けていく

「今回は…はあ…引き分けて事で…はあ…この辺で許しといてあげるわ…」

「黙れサイコババア、自分の負けを…素直に認めるよ…」

「誰がババアつてすてえ?!」

「いいか忠告しといてやる今度生徒を巻き込んだらタダじゃおかねえからな…」

「はいはい、分かりました」

「レン教官!何をされて…」

「出江さん、丁度いいところにこいつを拘…」

「ごきげんよう、レン・リエスタ教導官」

「な!待ちやがれ!燐!…くそ!また逃した!」

「教官、これはいったい?」

「敵の襲撃だ、出江さん」

「敵?」

「そうだ人類の敵だ」

「片付けが大変そうね…」

「急に話を変えるな…」

「先の事を考えなければ行動しずらいですからね」

「はあ…片付け代として給料入らないかな…」

「それは無理に等しいですね」

「はあ…」

「私も手伝いますのでご安心を」

「そいつは頼もしい」

「サボらないでくださいよ」

「気分による」

「リエスタ教導官、イマナント?」

「すごい黒い笑顔でとてつもなく圧を掛けてくる

出江さんのこんな場面は初めてみた

「分かった分かった、やるよやるやる」

「それが当たり前なんですからね?」

「す、すみません…」

「分かれば良いのです」

その後は理事長にとてつもなく怒られながら、出江さんと2人で片付けをした

「理事長も怒る時は怒るんだな」

「手を動かしてみては？リエスタ教導官」

「すみません！」

防衛軍の大学を思い出してしまふ

掃除の時は必ず先輩に怒られたな

おっとこんなの考えてられない

しっかり片付けしないと

「なあ出江さん」

「掃除の仕方ならわかるでしょ？」

「違うよ、そんな質問じゃない、もつと変な質問だ」

「なんですか？」

「僕が煙草吸つてたらどんな気持ちになる？」

「あなたはまだ未成年ですよ？それに吸つたこともないでしょ？」

「そうだな、そうだよな：悪い変な質問して」

「大丈夫です、なんかもう慣れてきたので」

「おお、それは良かったレン・リエスタ教導官検定、1級だな」

「もう私戻つてよろしいでしょうか？」

「ああすまんすまん、まだ手伝つてくれ」

# EIGHTSTORY—外出—

今日も夢を見た

どこかも知らないところで誰かも知らない人間と同じ空間にいた  
なんなんだろうな…

百合ヶ丘に配属されてからなかなかの日付けが経った

この短い期間でとても色んな事があつた

そして何より戦闘訓練で見込みのあるリリイが増えてきた

将来に期待が膨らんできた

見込みのあるリリイは以下の3名

1人目 天野天葉

やはりこいつは凄い

他のリリイとは訳が違う

格闘センス、チャームを使った戦闘技術



両方とも他のリリイを難なく上回っている

2人目 楓・J・ヌーベル

対人はまあまあと言うところだが

対ヒュージ戦では上位に入ってくるだろう

また座学も優れており、高い知性を持っている

3人目 一柳梨璃

格闘センス、対ヒュージ技術はそこそこ

だが人一倍、いや人二倍に努力をしている

磨けば重要な戦力になること間違いなしだ

以上の3名が見込みのあるやつだ

他のリリイも全体的には戦闘力は上がっている

この調子でいけば来年には相当強くなっている筈だ

「んー結構いい線行ってるかもなー」

自室で腕を上には伸ばしながら一人呟く

今日は休日であり、リリイ達も自由に色んな事をしている

今僕は防衛軍への報告資料を作っている最中

一応まだ僕は防衛軍の人間とされている

「それにしても面倒だ、なんだよ報告って」

ほんとに面倒臭い

ぼーっとしているとかふと何かある事に思い出す

「そういうえば今日、なんかあったよな…」

スマホを見て、日付を確認する

日付けは4月25日

時刻は午前9時JUST

「25日…？母の命日？いや違うな…誰かの誕生日だったよな？…」

一生懸命考える

「ダメだ、全然思い出せない！」

机を軽く叩く

頭の整理をするも思い出せない

もう一度よく情報を整理しよう

「4月25日…誕生日…はっ!!!」

そうだ！今日は！

今日4月25日は！

亜羅椰の誕生日！

「しまった…」

すっかり忘れていた…

やばいどうしよ…

プレゼントも買ってないし

何されるか分かんねえ…

待てよ、僕なんで亜羅椰の事考えてんだ…？

まずまず僕と亜羅椰は教官と生徒

立場がとても違う

なんで考えてんだ

僕の仕事はリリイの育成

それ以上、それ以下の事はしない

何考えてんだ…僕

や、でも今日のやる事は終わっている  
休日を楽しんでいい条件は揃っている  
なのに、なのに

生徒の事を考えてしまっている…

「僕は、もう末期かな…」

「レンきよーかんー、ちよつと話があるんですけどー」

「あ、今出るよ」

悩んでいるとドアをノックされ、要件を言われる

口の利き方や声的に、真島…？

少し考え椅子から離れ、ドアを開ける

「やっぱり真島か…今日はどういったご要件で？」

「ふふふ」

「？」

とても自慢気に笑う真島

「どうしたそんなに自慢な表情して」

「まあまあ、着いてきて」

真島について行つてから10分が経つた

まだ歩いているが本当にどこへ連れていく気だ？

「真島、俺たちは今どこに行つてんだ？」

「ここまで来たなら……言つていいわね……」

「それほど悩むことじゃねえだろ？」

「んあー！分かつたわよ！」

「そ、そんなに大きな声出さなくても……」

「あ、ごめんなさい」

「はあ………それでなんだよ？内容は」

「おっほん、内容は例の物が出来たって事」

「例のもの？」

「そうよ！例の”物”！」

着いたのは射撃訓練場

案内されたところには一丁の銃が

「真島、これが例のものか」

「そうよ、教官に頼まれた新型兵器！」

一見普通の銃

この兵器のモデルはM8045

45口径のベレッタ銃

「あ、新型と言っても弾丸が少し違うっただけよ」

「そうか」

「試し撃ちしたら？」

「させてもらおうよ」

いざ銃を手につ

金属なだけあって重い

前に構え、トリガーに指をかける

なんだか懐かしい感じがした

防衛軍の時はよく教えてもらった

どれだけリコイルを制御して隙を無くすか  
早撃ちのコツ

よく、1年でそんなことを覚えたもんだ：

僕は1発撃ち、見事ヒットさせる

僕は無言だった

「撃つてみた感想は？」

真島が聞いてくる

「正直に言う」

僕は改まった

そして真島の目を見ながら発言する

「この銃……」

最っ高にいい！

「良かったわ」

「こんなに良い銃を持ったのは初めてだ！正直言って感動した！」

「…／＼／＼」

「?どうした?顔が赤くなってるぞ?」

「い、いいや、何も無いわ!気に入ってもらって良かったわ!」

「おう!とても気に入った!まずなんだ?!この滑らかに動くスライド、まだ1発しか撃ってないが2発目を撃つ時の隙がないだろう、そしてこのリコイル!とても小さく設計されている!45口径ではありえない!」

「ちよつと改造をね」

「やっぱりか!流石工廠科だ!百合ヶ丘の自慢のアーセナルだな!」

「この銃は最高という言葉があう銃だ」

「あ、そうだ本題本題、対ヒュージの時はどうすればいいんだ?」

「それはね!この弾丸を使うの!」

ポケットから取り出した弾丸

少し実弾とは違う

「これは対ヒュージの弾丸、これはヒュージの装甲を簡単に潰す事が出来るわ」

「ほおー」

「そして肝心の撃つ時はこの弾丸が入ったマガジンを入れて…」

実演しながら説明する真島



「このレバーを1番下にするだけ」

「!気づかなかった!」

真島が指さしたのはセーフティレバーの部分

レバーは3段階

上がセーフティ

真ん中が対人

下が対ヒュージ

「対ヒュージは対人よりも威力が増しているわ、リコイルは少し強いかも」

「なるほどな」

「そういい銃を渡してきた」

「そして何よりここが弱点なのよね…」

「弱点? あ、耳抑えとけよ」

銃を構え即座に撃つ

真島が言った通りさつきより少しリコイルが大きい

「弱点は、威力が大きいため、バレルが潰れる可能性があるのよね…」

「潰れなくするためには少し待てと?」

「待つと言っても1秒くらいだから大丈夫わよ」

「了解だ」

「あ、そうだそうだ」

何かを思い出してどこかへ行く真島

「たっだいまー」

「何してたんだけ？」

何かの箱を持っている真島

「真島、それは？」

「良くぞ聞いてくれた！」

素晴らしい僕の目の前で箱を開ける

「？防弾チョッキ？」

「そうよ！」

前にはサイドリリースしかない

「残念ながら前は何も無いわ、でも後ろにはしっかり付いてるから安心してね」

真島から渡され1度着てみる

前にはサイドリリース、後ろは防弾チョッキと変わらない

少し薄いつて感じだが

そして肩を通して着てみる

着てみて気づいたが、横にはマガジン入れが右に5つ左にも5つ

右の方の1番上には銃ケース

左の方の1番上はナイフケース

「理事長からナイフ、銃の携帯の許可が降りたの」

「理事長が?!」

「ええそうよ、これでいつでもヒュージと戦えるわね」

笑顔で語る真島

「こいつつてこんな可愛い笑顔するんだなと思った

「そうだな」

「あ、今は絶賛頼まれてたナイフ製造中ね」

「忘れてなかったんだな」

「当たり前よ!」

笑顔が素敵な女性とはこういう人のことを指すのだろうか:

とりあえず銃を手に入れたし、これで戦闘は少し楽になるだろうな

「真島、とりあえずもう出るか」

「はーい」

真島と2人で射撃訓練場を出る

廊下を2人で歩いていると真島が口を開いた

「百合ヶ丘の生活には慣れた？」

「んーまあほどほどかな」

「なにそれ」

クスツと笑う真島

「真島が僕に敬語を使わないことには慣れたけどな」

「だ、ダメだったかしらー…あははははー」

「なんだそれは…」

苦笑いをしている

「ま、大きく違うのは立場だけだし敬語じゃない方が僕も楽だし」

「年齢も大きく違うんじゃない？」

「いうて、3年とかだろ？」

「え？」

「ん？」

「い、今何歳だっけ？」

「僕は今年で20だよ」

「えー！ー！！！」

「しー」

「え？ちよつとそれ本当なの？」

「本当だが？」

「てつきり25とかだと思ってたわ…」

「僕はそんなに歳いってないよ」

「今年で20…誕生日いつなの？」

「誕生日は8月9日」

「えー！じゃあまだ19?!」

「そうなるね」

「歳、結構近いじゃーん！」

「だから言ってただろ？」

「確か真島は16?だったな」

「こう考えると僕はなんでこの歳で教官やってるんだらうって思う」

「19歳で最強……これからが楽しみわね！」

「楽しみにされてもなー……」

僕はもうこれ以上進化はしないであろう

進化するなら……そうだな……

「楽しみにするのは僕の将来の子供にしてくれよ」

「結婚できるのー?」

「黙れ」

僕は誰と幸せな家庭を築けるのだろうか……

未来って分からないな……

「よし、それじゃあな」

あれから少し歩き出口にたどり着いた

ここからはまた1人になる

「まったね〜」

気楽に挨拶する真島

いつも気を抜いているな…この子  
まあ休日出しいつか  
僕も休日は気を抜いて…

「!!」

僕の背筋が凍った

気を抜いた瞬間だ

瞬間に強い殺気を感じた

何かに嫉妬しているような殺気

殺気を出しているやつとの距離は…

「零距离…」

後ろを向くともう目と鼻の先

相手の正体は…

「何してたのですか？レン教官♪」

ドス黒い笑顔で聞いてくる、ピンク髪の少女

僕の上に馬乗りになっている状態

「た、ただの訓練だよ！亜羅椰！」

「真島様と?!」

体重をかける亜羅椰

「そうだよ！真島とちよつとした訓練を…」

「私という女がいるのに他の女に手を出すとは…女”たらし”ですわよ！」

更に体重をかけてくる

とてつもなく死にそうだ

「っ！違う！本当に僕らはただ訓練しただけで…」

「本当、ですの？」

そう言いながら僕を殺そうとする亜羅椰

「本当だ！」

「……では何かしてもらいましょうかね」

「何でもするよ、だから今は僕の事を殺さないで！」



「なんでも…?」

「ああ!何でも!」

「…では私とデートしてもらいましょうか…」

ニヤリと笑う亜羅椰

驚きな回答だ

「で、デート?」

聞き間違いかもしれないのもう一度聞いておく

「はい、そうですわ」

どうやら聞き間違いでは無かったらしい

「デートっていつでもどこ行くんだよ」

「どこか」

行く場所も決めてなかったとは…

「はあ…分かったよ、デート行くか」

なんでもすると言った以上了承するしかないか

という訳で近場のシヨピングモールに来たのだが：

何を喋ればいいのか分からない：

彼女がいた事がないし、異性と2人で出かけるということもなかった

とりあえず、亜羅椰の好きなようにさせよう

「話ずらいですわね」

「そうだな何故か話出来ないな…」

いつもなら出来るんだがな…

「とりあえず今日は亜羅椰の好きなように行動しよう、今日の主役は亜羅椰なんだから」

「ならお言葉に甘えて、今日はしっかり付き合ってもらおうわよ？」

「分かってるよ」

「これ似合ってます？」

ある服屋での出来事

亜羅椰は服を試着して、僕に意見を求める

衣装は下がジーンズ

上がグレーのファスナーなしのパーカー

これを見て思ったのが

なんていう可愛さだ

という意見

僕からしたらとても似合っている

「いいんじゃないかな、似合ってると思うよ」

可愛いというときモがられそうで怖かったのでそれをグツと抑え、質問に答える

そうすると亜羅椰はニコつと笑った

可愛い、それしか言えない

こういうのを現代の言葉では「尊い」と言うのだろう

「それにするのか？ 亜羅椰」

「教官が似合ってると言ってますので、これで」

「はーや  
」

デートというものはこんなのだろうか

合っているのか……

分からなくなってきた

でも亜羅椰の幸せなところを見れたのは良かったのかもしれない

生徒の幸せは良いものだ

その後は服を見たり本を買ったりと色々な事をした

毎回毎回亜羅椰は笑っていた

素敵な笑顔だった

その笑顔に僕は見とれていた時もあつた

普通の人間同士だったらもつと楽しかっただろうな……

「やり残したことはないか？」

シヨピングモールを出ようとしている途中に聞く

「うん、特に何もありませんわ」

…ここから歩いて帰るのか…

両手には亜羅椰の荷物があつてしんどいな…

ま、ここは漢気見せますか

「なあ亜羅椰、僕って何歳だと思う？」

「急になんですの？」

「いや今日真島にも言われたんだけど僕って23とかに見える？」

「?23とかではないのかしら？」

「やっぱりか…」

「教官やつてるとかもあるし、まず人類最強って言われるくらいの戦闘力持ってるから、

みんなからは23とかに見られてるわよね」

「？僕の年齢知ってた？」

「僕の年齢知ってた？」

「今は19だったわよね」

良かった、知っててくれて

「なんでさつき嘘ついたんだ？」

「困らせたかったから」

笑顔でこちらを向く亜羅椰

身長は僕の方が高いので亜羅椰は見上げている形になっている

可愛い

「なんだよ…それ」

「顔が赤いけど、どうかしたのかしら？」

「な、なんでもない、ほらとつとと帰るぞ」

悪い笑みをしている亜羅椰

だがそれも可愛い

僕も変わってしまったな…

みんなのお陰で、大切な物が何かも分かってきたし

百合ヶ丘に来て良かったな

これからも僕は百合ヶ丘でリリイを育成し続けるのだろうか  
可能ならそっちの方がいいな

「そつちに敵が行つたぞ！」

「りよ、了解！」

「?どこだここは？」

意識はあるのに、体がない

映像のように僕は見てるだけだ

見えているのはリリイの様な少女が多数おり、5人の人達がリリイに反撃している

「隊長!数が多すぎます!このままでは近づけません!」

「お前らは先に目的地まで行け!俺がここで戦う!」

「ちよつと無謀すぎじゃないの?!レン!」



レン？僕と同じ名だ

「お前から4人でも政府は潰せるだろ?!」

政府？なんで…

「教官！教官！起きて！」

「ん…？一体何が…」

百合ヶ丘の前で倒れていた

目を開けると亜羅椰の姿が

「良かったわ……ここで急に倒れたから……」

「ああ、すまんちよつと疲れが出たみたいだ」

「一体何の話なんだ？今の映像？は」

「僕と同じ名の人が隊長で政府を潰そうとしてた……」

「何が……」

「教官、今日はもう寝た方が良さそうわね」

「そうだな……よし今日はもう部屋戻って寝るよ、今日は楽しかったな、亜羅椰」

「そうわね、また2人きりで行きましょ」

「ああ、約束だ」

「こうして僕は自室へと戻り即座にベットに寝転がった」

「一体なんなのだったのだろう……」

「ガキはいらねえよ」

「俺はガキじゃねえ！」

「今でも反撃するって思ったか？」

「もちろんだ！」

「俺らと一緒に冒険しないか？イカレ野郎」

「……」

「見事な剣術だ、どうだ？それよりもいい刀で人をもっと切らないか？」

「…それは、いいわね…」

「素晴らしいハッキング能力、その技術、俺らに捧げる気はないか？」  
「ぼ、僕で良ければ…」

「ついてくるか?!俺に！」

「もちろんよ！」

「レン・リエスタ教官！」

## NINE STORY—反乱—

今日は夢を見なかった

久々だな…

最近は少しとばかり暑くなってきた

気温が高くなり、半袖の生徒も増えてきた

気温のせいで生徒全体のやる気が下がっている

こんな暑い中訓練はしたくねえよな

そこでだ

昨日の教官達での会議で、水泳訓練が提案された  
少し速いが、水泳は色んな物が発達する

様々な部位の筋肉、体力、他にも沢山ある

もちろん、僕はその意見には賛成した

一気に強くなれるチャンスだからな

そして、理事長の許可も得て水泳訓練が行える環境になった

ただ一つ問題がある

それは僕が教えられないという事だ

水泳場には女性しかない

男である僕は、授業中は立ち入り禁止となった

他の教官曰く、「やらしいことしたら嫌だから」という

僕は鼻で笑ったよ

僕はそんな事しませんよってね

でも、そんな風に見られているのなら、少しヤバいかもな

ま、僕は水泳そんなに得意じゃなかったから全然いいんだけどさ

「これから暇になりますね、レン教官」

「そうなんだよー、水泳だからって僕を暇人にしなくてもいいのにー」

後ろから出江さんが喋りかけてくる

「レン教官はこの夏どうするんですか？」

「僕はとりあえず、防衛軍からの金で格闘の自主練かなー」

適当に言っただけど、そんなに予定組んでなかったな

暇だからする事がないからな…

「長期休暇は？」

「多分自主練」

自主練しかないな…

そういえば夏ってなんかあったような気がするな…

「なあ、夏ってなんかあったくないか？」

「……祭り？」

「可愛い答えだな」

「死にたいですか？」

「あーごめんごめん！今のは聞かなかった事にして」

「分かれば良いのです」

夏…そんなに重大ではなかった事だと思っただけど…

「誰かの誕生日とか？」

誕生日…居そうだけど、もっと前から知ってるんだよな…

でも日にちではあったような

「んー分かつんねえ、なんか忘れてるような気がするんだよな…」

「あ、教官の誕生日とか？」

誕生日でクソ攻めてくる

僕の誕生日…

「僕の誕生日っていつだったけ？」

「8月9日とかではなかったかしら？」

「は！それだ！出江さん！夏は僕の誕生日だ！」

やっと解決出来たー！

「僕の誕生日は8月9日だった！ありがとう出江さん！」

「は、はあ…」（誕生日忘れてたの？）

そうだ、僕の誕生日があった

中学生から祝われてなかったから忘れてた

やっと長年のモヤモヤが無くなった！

やっぱり出江さんだなー

さてよ、なんで出江さん僕の誕生日知ってる？



僕はここに配属される時は分からなくて書いてなかったぞ

「なんで僕の誕生日を？」

「言ったでしょ、私はあなたの監視役、あなたの事については人一倍調べていますので」  
「どこからそういうの調べてるんだ？」

「新聞とかですかね」

「へえー」

なんだか想像つかないな

新聞読んでる出江さん

だが本当に気になることは熱心に調べるんだな

「いつから水泳訓練実施でしたっけ？」

「来週くらいからだったよ」

「来週ですか…」

「なにか問題でも？」

「流石に急すぎませんか？」

「そうか？別に僕はそう思わないけど…」

でも言われてみれば急だな…

ま、急な提案だったしおかしくはないな…

「！出江様！大変です！」

後ろから2年がやってきて、出江に話しかけている

「は！レン教官！お疲れ様です！」

僕に気づき敬礼する

本当に防衛軍みたいになってきたな

「楽にしろ」

座っていたが話を聞きたいので、立ち上がった

「それより大変です！今街で反政府組織が暴動を起こしています！」

反政府組織？なんで今更…

「ただいま防衛軍が対処中ですが、圧倒的に数の差が生じているので、百合ヶ丘のリリイを援護にまわせと仰っています」

「へりを用意しろ、僕が先に出撃する」

「りよ、了解！」

「出江さんは理事長と交渉してリリイを出すかどうかを確認してくれ」

「分かりました」

僕は2人に指示を出し、急いでへりポートへと向かう

「へり、出撃します！幸運を祈っております！レン教官！」

「ああ！ありがとうございます！」

誘導役が敬礼しながら見守っている

僕は目の前のへりに乗りパイロットに発進可能と伝える

へりは離陸を始め、高度を上げながら目的地に進む

へりに乗ってから5分くらいの時

「レン陸佐！通信が入っておりますのでヘッドセットを！」

「了解だ」

パイロットに言われ、近場にあつたヘッドセットを着ける

「こちら現場の指揮官の者です！あとどれくらいで到着しますか?!」

「もう残り1分と言ったところだ！」

「もうそんなところまで！1つ注意して欲しい事があるのですが！」

「なんだ?!」

「近場になってきますと、相手らはもしかしたら対空武器で攻撃してくるかもしれない。注意を！」

「了解だ！」

通信を終わらせる

「レン陸佐!そこにある小銃で敵をここから撃ってください!」

通信が終わると次はパイロットから指示を受ける

「分かった!右の扉、開けてくれ!」

「了解!」

僕が手に取ったのは89式小銃

防衛軍では普及されているもの

指示通りパイロットは右の扉を開ける

そして僕はそこから小銃を撃つ

結構遠いが何発かは当たっているっぽい

「陸佐!どうですか?!」

「ここからじゃそう当たらない!もう少し高度を下げられるか?!」

「無理です!これ以上高度を下げるとヘリが撃たれます!」

そうか…確かにな…

「！レン陸佐！ロケランが！」

考えてる内にパイロットが叫ぶ

前を見るとロケランがもう目と鼻の先

そしてロケランはヘリに着弾

後ろの部位を当てられ抵抗力を失ってしまった

ヘリ内では鳴り響く警報音

「くっ！陸佐！もうこのヘリダメです！」

回転しながら段々と地面に落ちていく

「分かってる！だから今から出ようとしてるんだ！」

僕は操縦席まで行く

「君、パラシュートの使い方くらい分かるよな？」

「もちろん！」

僕はパイロットにパラシュートを渡し、操縦席のドアを拳で吹っ飛ばす

「よし！ここから飛び降りろ！」

「あ、あなたどうするんですか?！」

「心配すんな、僕は大丈夫だ！」

「りよ、了解！」

人の心配するなんてな

流石防衛軍の人間だ

そしてパイロットはヘリから脱出

「よし、そろそろ脱出しないな」とな

僕はパラシュート無しで垂直に落ちる

「空は久々だな……」

右足にマジギをため、着地に備える

「！陸佐！パラシュートなしで……」

「陸佐？あれがレン陸佐か?!」

「そうです!」

僕は右足で地面に着地する

直後に半径10mくらいまでに衝撃波がはしる

近くにいたパイロット達は少し飛ばされていたが特に問題はないだろう

正直言つて右足はクソ痛い

だが耐えられる程の痛み

そして僕は何事も無かったかのように現場の指揮官の元へ

「陸佐!お疲れ様です!」

テントの中に入ると、指揮官が敬礼をして向かえる

「楽にしろ、それで今日の任務内容は?」

「今回は聞いての通り、反政府組織との闘いになります、ですが防衛大臣の指示で殺してはならないのですよ」

僕は最後の言葉に引っかかる

「おかしくないか？」

「何が…ですか？」

「なんで殺しちやダメなのに僕ら防衛軍が対処してるんだ？警察で良いだろ？」

おかしい…おかしすぎる

僕らは人を殺す訓練をしている、逮捕なんてした事がない

「防衛大臣からの出動命令なので…」

なるほど…

では考えられるのは一つか

防衛大臣と反政府組織のボスがグルで何かを企んでいる

何かが怪しい

今の総理なら特殊な警察方々を出すと思うが…

それにリリイを救援にというのもおかしい

何故リリイなんだ？そして何故防衛軍だけでは数が少ないんだ？

それほど腕が落ちているのか？



「とりあえず対処をお願いします…」

「分かった、その代わりいつでも発進できる装甲車を用意しろ」

リリーの身に何かあるかもしれない

「了解！」

「あ、あと」

「はい？」

「殺したらごめんな」

僕はその言葉をかけ、テントから出る

僕は外に出た瞬間に絶句した

外は地獄絵図だった

ナイフでバラバラになっている遺体

複数人に切られている遺体

首だけの物

どの遺体も防衛軍の人の遺体

「そうか…殺しちゃならないから殺られっぱなしなのか」

今の防衛大臣は無能だな

防衛軍は何にも悪くねえのにな

「たすけて…助けてよ！」

どこからか声が聞こえる

女性の声？

僕は声の元へ駆け寄る…

声の方には男性複数人に押し倒されている女性がいた

「はあ…」

僕はため息をついた

なんでこういう場ってこういう犯罪が起きるんだろうな

僕は女性の方へと近寄った

「!! たすけて…助けてください！」

女性が声を上げる

「何言ってるんだよ、お前は今から俺らの奴隷になるんだよ！」

男性達は呑気に笑っていた

僕が近づいているのに気づかず…

「なあ、爺さんこころで女性を見なかったか？」

僕は男性の汚い肩に触れる

「ああ?! テメエ誰だよ?!」

急に振り向く男性

「あ、いたいたこの子探してんだよね」

「おいおいこの嬢ちゃん俺らのもんだぜ」

僕が女性に近づくと近くの別の男が僕の前に出てくる

「あ、いやこの子僕の連れだね、この子が何か失礼な事しました?」

「デタラメ言つてんじゃねえ!」

男性が僕に殴りかかってくる

「まあまあ待ちましょうよ」

僕は男性の肩を掴み殴りをおさえた

「あ? …… あああああ!!」

肩を掴んだ瞬間に相手は悲鳴と共にしゃがみ出した

「お、おい！ガキ！こいつに何した?！」

後ろの人が喋りかけてくる

僕はその人の方を向きながら言う

「こいつの肩の骨を体内でボロボロにした、下手に動けばどこかに刺さり死ぬ可能性がある、1つ対策法があるとするとするなら義手にしなければならぬ、まあお前なら無理だ  
と思うがな」

「何言ってるんだ…」

「次は君かもね…」

僕は笑いながら指を指した

それに怖くなったのかとても怯えている

「！怯えてられっか！しねええ!!」

後ろからナイフもって迫ってくる男

僕の腕には見事に貫通した

だが僕は笑っていた

「ひ、ひい…!!」

「なあ爺さん、思わないのか?」

腕に刺さっているナイフを自分で抜き、相手に近づく

「自分は何んて哀れなんだろうって」

「ああああ!!」

僕は相手の足にナイフを刺した

相手は叫び、倒れ込む

残り3人…

もう普通にやるか…飽きたし

「…よくもおおお…おえっ…う？」

僕は目の前にいた人の頭を叩いた

普通に叩くではなく、正式に言えば脳震盪を起こさせたいだろう

そして後ろの人の顔に肘打ちする

「ぐはっ!!」

ラスト1人には、膝蹴りをした

一瞬にして3人は倒れた

雑魚め

「大丈夫か？」

僕は女性に話しかける

「…怖かった…」

すると女性は赤ん坊のように泣き出した

「な、泣くな！俺がやったみたいになるだろ！」

女性防衛軍員

名前は、クロエ・リスタリオ

リレイを指していたが、スキラー値が足らず挫折

何故僕が知っているかって？

僕が幹部の時に指導した人間だからだ

僕はクロエをおんぶしようと腕を掴むと頭痛が発生した

「っ！はっ！」

隣の時と同じような痛み

何かが見える…何かが

「あ…くっ！」

僕は倒れ込む

凄い頭痛だ

体がダルすぎて立てない

「陸佐！陸佐！」

叫ぶクロエ

「だ、黙れクロエ……はあ……はあ……お前は……はあ……戦うか……はあ……撤退するか……はあ……しろ……」

急な息切れ、力がどんどん抜けていくのが分かる……

何か分からないがある場面が見えた

前の時のように……

「手……げな」

ある女性が男の人に背後から銃を突きつけている

声はあまりよくは聞こえない

「お……の……もうと……だ……」

男の人は何か喋っている

見えて聞こえたのはそれくらいだ

「…さ…りく…陸佐！陸佐！大丈夫ですか?!」

目を開けるとクロエはまだ僕の元で叫んでいた

頭痛は無くなり、ダルさも無くなった

なんだかさっきのが嘘のように…

「クロエ…まだいたのか？さっさと行きな」

「やですー！」

断固拒否された

こいつ、格闘技術も射撃技術もそんなにのクセに根性だけはある

これがこいつの長所なんだが、うつとしくなる時もある

例を上げれば今だ



指示を聞かずに根性だけでどうにかしようとしている  
そんなのじゃ死ぬのにな…

「はあ…クロエ、お前は後退しときな」

僕は立ち上がり、服についた汚れをはらう

「やです！私も防衛軍の人間なんです！みんなの役に…」

「正直言つて防衛軍自体が邪魔なんだ、人を殺すことしか出来ない防衛軍の人間はな邪魔なんだよ」

羽織っていたジャケットをクロエに被せる

「何がお前をそうさせるかは知らんが、お前が出る幕じゃねえ、全部俺がやってやるから心配すんな」

「陸佐…でも！」

「俺が帰つたらそのジャケット返せよ、近くの洋服のピー山で高かったからな」  
クロエ、いや部下をここで死なす訳にはいかない

未来ある部下をな

残りの人間はざっと見で50人と行つたところか

銃なし、ナイフなし殺しなし

気絶だけか…

麻酔銃でもありやいいのにな

「陸佐！おひとりで何を?!」

僕が敵陣へと歩いて向かっている最中に指揮官が話しかけてくる

「数分だけ後ろに下がつといてくれ」

「は、はい？」

俺の狙いはこうだ

まず敵陣の中心へと行き、そこでマギをためる

そしてためたマギを四方八方に飛ばす

簡単な事だ

「おい！ガキが一人で走ってくるぞ?! やっちまおうぜ！」

敵が俺の事を認識し、攻撃を仕掛けようとする

ある人は銃剣をもち、ある人はナイフを持ち俺に攻撃を仕掛ける

「しねええ!!」

「お、おい!このガキ、全然攻撃が当たらねえぞ?!」

攻撃を躲しながら中心へと順調に向かう

こいつら、一般人ということもあつてかナイフの振りや銃剣の攻撃パターンが1つしかない

新兵と一緒だ

こんな奴らと戦う必要はもうない、とつとと終わらせてやらねえと

「このガキイイイ!!」

「な?!」

唯一俺の事を捕まえてきた

後ろから首を締められている形になっている

こいつ…なかなかやるな…

「どうした?!ガキ?!さっきの勢い…ぬわあ!!」

俺は相手の足を踏み、背負い投げをする

こんなにデカイ男を投げ飛ばすのは久々だ

「ふつ、なかなかやるな、坊主」

「忠告だ、死にたくなかったらこの場から離れるといい」

「おいおい、俺には脅しなんて効かねえぞ？分かってんだよ、お前ら防衛軍が俺らの事を殺さないことくらい」

「何故そう思った？」

「殺していいならもう殺してんだろ？俺のことを」

素晴らしい洞察力、素早い物でも捉えられる反射神経

そして自分よりも強い奴に齒向かう、勇氣

どれも良い感じに発達している

「これ以上は業務のため詳しくは言わないが、いつかお前と一緒に戦う日を待っている」  
防衛軍に入れば良い陸曹にはなれるだろう

それか、俺が反政府組織に入るか…まあそれはねえと思うがな…

「俺もあんたと一緒に戦える日を待ってるぜ」

勧誘されているが、俺はまだその時ではない…

「もう少し仲間をつけたら来るよ…」

俺は知っている、政府は悪だってことをな

だが俺にはまだ色んな人に恩返しと、政府の悪を知らせなければならぬ

俺は中心の方へと全速力で走った  
猛スピードだ、誰にも止められない

色んな人間に邪魔されながらも、躲しては投げ飛ばしたりしていると敵陣の中心であ  
ろうところに到着する

「さ、いい加減、任務を終わらせるか……」

手のひらにマギをためながら敵の攻撃を躲す

「ためてるときくらいは、大人しくしておいて欲しいね！」

躲しているうちにマギがたまる

「よし、それじゃあな！」

その発言と共にマギを四方八方に飛ばす

直後、俺に近い奴らから飛んで行った

マジを飛ばしてから3分が経った

俺の周りには誰もいなかった

この光景をみて確信した

「任務完了」と

「防衛大臣に報告でもしておけ、終わったってな」

「了解です！」

俺はあの後、テントまで戻り、任務が終わったと伝える

さあ、どうする？防衛大臣さん

俺はあんたがブラックだと思ってるが…

「陸佐！防衛大臣はあなたの事をとても称えておられます！是非賞状でも、貰わないかと」

それで俺を仲間につけたつもりなら、殺す

「本当か?!それは嬉しい!」

とりあえず適當言つて、探れる道を作つておくか…

「陸佐!百合ヶ丘から通信が」

通信科の人間が話しかけてくる

「百合ヶ丘?誰だ」

渡されたヘッドセットを手に取り、頭につける

「こちらリエスター等陸佐、あんたは誰だ?」

「案の定生きていましたか」

「俺が死ぬことは相当ないだろうな…それと失礼な事を言うな、出江さんは」

「あら?失礼でしたか?」

今日は随分と気分が宜しいようだ

「…:…それで何の用だ?」

「良いニュースと悪いニュースがあります、どちらから聞きたいですか?」

「じゃあ良いニュースで」

「こういうのは良いニュースから聞いた方がいいと勝手に根拠もなしに思っている

「良いニュースは工廠科である真島百由からの伝言です、頼まれていた物が出来たとの

事」

あれか…

「悪いニュースはあなたの仕事がもう一つ増えました」

仕事？別に悪いことではないが…

「何が言いたいんだ？」

「今百合ヶ丘に向かつてきている人達がいるということですよ」

ほう…

「どんな奴らだ？」

「そうですね…傭兵という感じでしょう」

傭兵か…これで分かったような気がする

証拠はないが、防衛大臣は悪だな

なるほどな…そういう事か…

俺を別のところにかかせて、百合ヶ丘を制圧でもするのか…

そして、制圧出来ても、防衛大臣は防衛軍を派遣したが間に合わなかったとも言

気だな

でも流石にリリイを舐めすぎなんじゃねえか？

男が勝てるわけがない…



「とりあえず俺は今すぐそっちに向かう、耐えられるか？」

「無理に等しいと思います、もう玄関で待機しているので、幸運を祈ります」

よく分からない言葉を最後に通信を遮断

「陸佐ー？陸佐ー？幹部!!」

となりからデケエ怒鳴り声が聞こえる

俺はヘッドセットを取り、何があつたか聞く

「なんだよ、クロエ、どうしたんだ？」

「百合ヶ丘、何かあつたんですか?!」

「ああそうだ、だから今から車乗っていくところだ」

「私も行きます!」

出やがった、変な根性

「無理だ、お前にはやることがあるだろ」

「嫌ですいやです!どうしても幹部のお役に立ちたいの!」

「役に立ちたいなら言うこと聞いてくれ!」

「むー」

涙目になりながら頬を膨らませる

俺は少し考えた

確かに2人なら任務もすぐ終わる  
んー、どうしたもんか…

「クロエ、死にたいか？」

「あなたの傍で死ねるなら本望です！」  
どうやら死んでもいいらしい

「なら着いてこい！」

## TENSTORY—殺鬼—

「クロエ、死にたいか？」

「あなたの傍で死ねるなら本望です！」

どうやら死んでもいいらしい

「なら着いてこい！」

僕らは車で急ぎ百合ヶ丘に向かっている

僕が運転し、助手席にクロエ

「一体百合ヶ丘に何があったんですか？」

クロエは髪を除ける仕草と共に耳を出す

「百合ヶ丘に多分だが防衛軍、もしくは反政府組織の傭兵が向かっているらしい」

「傭兵？雇われ兵が？」

「そうだ、後しつかりシートベルトつけろよ、飛んでも知らねえよ」

「教官もつけてないじゃないですか?！」

「俺はいいんだ」

「あ、俺っていった」

「そんなにおかしいか？」

防衛軍の時は俺と言っていたがなんか似合わないところいつに言われたので僕にしてはいたが、なんだが面倒になってきた

「教官は僕が似合いますよ！」

「馬鹿野郎、立ち上がるな！装甲車では立つなど言っただろ！」

「す、すみません！」

久々に怒ったな…

本当にこいつには世話を焼いた

何度言っても分かってないのか、同じ失敗をする

俺じゃなきゃ、今頃防衛軍やってないだろうな…

「なんだか、久々に怒られたような気がします…」

頬を人差し指で触りながら、何かを言いたそうにしている

「どうした？お前らしくないぞ、はつきりと言ったらどうだ？」

「実はですね…」

「ああ」

やはり隠し事をしていたか…

「私、今の教官に死んでこいって言われてここに来たんですよね…」

「ふっ分かってる教官じゃないか…」

鼻で笑い、からかうような発言をする

「ええー！私が死んでもいいんですか?!」

「防衛軍は最終的に死ぬ事が仕事だ、特に問題はない」

ハンドルをきりながら、そういう

「だが本気で死んでこいと言われているのなら、お前は使いもんになんねえって言われてんだ」

「……」

珍しく黙るクロエ

いつもはお喋りなのにな

「訓練とか普通にやってんのか？」

今の教官がどんなのか知っておかなければ

「私、教官に差別されてるんですよね…」

口を開いたと思えば驚きの回答が飛んできた

「ほお…」

「お前は女性だから訓練しても無駄だって」

「他には？」

「私を性奴隷にするというのも言ってきました、更に訓練を終えると私だけ呼び出しをくらって、あげくの果てには私の胸なんか触ってくるんです…」

「触る胸はねえのにな…」

「だ、黙ってください!! 貧乳だっていいところはありますよ!!」

いつからだろうな…こいつをいじりだしたのは

俺ではない、それだけは言っておく

「てか、リリイにもそんな事言ってるんですか?!

「やめろ! 俺がいつもそんな事言うのは日常茶飯事みたいになるだろ!」

「え?! 教官って変態とかじゃないんですか?!

「馬鹿野郎! 俺は今までそんなセンチティブ発言はしてないぞ?!

「え?! そうなんですか?! 思春期の男の子みたいに 変なこというから…」  
「まあ…俺はまだ思春期ではあると思うけど…」

「え?」

「ん?」

「教官何歳?」

「今年で20」

「え? 私と1年違い?」

「そうだな…それがどうした?」

「え? 本当に言ってるんですか?」

「ああ」

「…まじですか?」

「何回聞けば気が済むんだよ?! 俺はまた20なの!」

「へえ…つてこんな話じゃない! 今の教官の話…」

「嫌そうだったから話を逸らしてあげたが、自分から戻すとはな…俺に助けでも求めるのか?」

自分から嫌な話をする人間はだいたい助けを求めている

そして、その相手は周りよりよっぽど信用している人間

こいつは俺を信用しているのか？

それかただ単純に馬鹿なだけか…

「…そうではないと否定は出来ません…」

「…：…本当に差別されてんだな」

「差別どころか…せ、性犯罪もですよ?!」

さっきの話か…

正直な話、俺には解決出来ないだろう

俺の味方は防衛軍では数少ない

理由は俺に関わったら殺されると思われているから

そんな俺が上司に部下が虐められていると言っても信じられないだろう

「…すまないが俺にはその事情は解決出来ない」

「…：な、なんとか出来な…：いんですか…」

下を向き、涙を隠そうとするクロエ

本当に何も出来ない…：教官の呼び出しは無視しろと言っても無視したら退職処分を

受けてしまう

訓練は俺にでも出来るが、こいつの給料が入らない…

教官を変えてもらう事も出来るが、元殺人鬼の部下だ



誰も受け入れてはくれない

どうしたものか…

やはりあの時、接触は避けるべきだったか…

なんで迷惑がかかると知っていたのに、こいつを引き受けてしまったのだろうか…

すまない…クロエ…

「なあクロエ、なんであん時俺らの部隊に来たんだ？」

「引き受けてくれる人がいなかったの…」

やはりか…

「…もう嫌だ…本当に…」

ぼそつと呟くクロエ

相当ストレスが溜まっているのか…

「クロエ一つ質問だ、俺とリリイとお前で訓練するか、いつも通り変な教官のところで訓練

する、どっちがいい？」

「それはもちろん、貴方とリリイ達で訓練したいですが…」

「なら交渉成立だ」

体目的の教官…別に奪ってでもいいだろ

こいつを強くさせると言って貰っても誰も文句は言わない

訓練をさせてないから、強いから留める理由も見つからない  
体目的と言っても処分を受けるだけだ

こいつの金は無くなるが、俺の金で十分だろ  
貯金はしとくべきだな

あれからしばらく運動していると百合ヶ丘が見えてきた

「やつと百合ヶ丘が見えてきたか……」

「！陸佐、前方から敵が！」

おそろく傭兵の警備係

「クロエ！運動変われ！」

「は、はい！でも私運動した事ないですよ?!」

「お前なら大丈夫だ！百合ヶ丘の入口集合だ！何かあれば無線を繋げ！」

俺はドアを小銃を持ちながら開け身を乗り出す

「了解……陸佐、死なないで……」

何か言ったが聞こえなかった

俺は受け身を取り、敵の方を向く

向いた直後に車は迂回していく

「何者…ぬあ!!」

相手が口を開く前に左右にいた傭兵を撃ち殺す

俺はそいつらの死体を隠す

「武器はM4カスタムとGLOCK…安定だな…」

反政府組織にはこんなもの買う経済は無いはずだがな…

死体をそこらの草に隠す

そして静かに入口へと向かう

道は普通に滑らかな坂である

防衛軍の訓練よりかは全然楽だ

それにしても敵が全くない

こんなにな長かつたら中間地点に警備を置いた方が良いのにな

それほど百合ヶ丘の中に兵を上げているのか？

歩いていると腰につけていた無線の音になる

「こちらクロエです、問題はないですか？」

無線を繋げるとクロエからの通信だった

「今目標へと向かつてる途中だ、そっちは？」

「こちらは入口目前です、ですがやはり入口には5人の警備が」

「了解、急ぎ向かう」

通信を切り、駆け足で坂を登る

坂を登りきると、報告通り5人の警備

警備の近くにはカメラが1台

「こちらレン、クロエカメラを破壊できるか？」

「はい、 出来ます」

「了解、 俺の合図でカメラを破壊しろいいな？」

「了解」

俺は所持していたハンドガンと小銃を敵に合わせる

一気に2人やってまた2人やって最後は1人

簡単だ

「よし、 クロエ準備はいいな？ 3…2…1…今だ撃て!!」

合図と共に警備兵には同時に3発の弾丸が着弾する

2人倒れ、 もう2人に照準を合わせる

そしてまた発砲

もう4人死んでいる

「あと1人…」

照準を頭に合わせトリガーを引く

「制圧完了、 合流だ」

「は、はあ」

俺が指示を出し入口まで行き、合流する

「ここからが本番だ」

「そうですね」

「危なくなったら逃げるんだぞ」

「私はあなたのお役に立ちたいので逃げたりなんかしません！」

大した根性だ

入口を開け静かに中に入る

案の定百合ヶ丘の中に兵力が集中している

1発でも銃を撃てば蜂の巣だ

「どうするんですか？お兄さん」

耳元で少し色気を出しながら喋りかけるクロエ

その発言に体がゾクツツとしてしまった

「く、クロエ！やめろ！ここは戦場だぞ?!」

声を小さくしながら怒る

「ここじゃ無いところならいいと？」

ニヤリと小悪魔の様に笑う

こいつをこれからクロエと呼ぶのはやめてリトルデビルとでも呼ぶか

「ほんとにどうするんですか？」

「今考えてる、黙ってお座りでもしとけ」

どうしようかな…誰か一人殺して服でも盗むか…

「あ、私が注目を集めましょうか？」

「注目？」

「そうです！私が迷い込んだみたいなの、女だし手は出されないと思うんです」

確かに…女には手は出さないか…

こいつも悪になったもんだ

「よし、それで行こうお前は少し後ろに戻って上手くやれ」

「了解！」

俺は光が当たってないところまで移動し、クロエが行動するまで待つ  
クロエ…どう動く？

入口の方をじつと見る

そして門が開き、クロエが入ってくる

「何者だ?!」

傭兵達は入口に銃口を向ける

「よし、今のうちに移動だ」

静かに匍匐前進をし、百合ヶ丘へと近づく

クロエはどういう風に注目を集めてるんだ？

「…女か!?…な、なんという格好!」

興味津々な傭兵

あいつどんな衣装で…

ちらつと後ろを向くとそこには…

「良かった…助けがあつて…」

上半身がタンクトップで、下半身がショートパンツ

「どこから持ってきたんだよ…まであれよく見たら戦闘服?」

あの短時間でどうやって…



「兵士さん達は逞しいから安心できるわ、今追われてて…その…助けて…くれる?…」

傭兵に上目遣いで演技をする

傭兵はそれに耐えられなかったのか鼻血を出している

傭兵も傭兵だ

こんな事で自分の任務を忘れていてば、任務完了なんか出来ない

ま、今はその愚かさに感謝だな

俺は静かに校舎へと入る…

「クロエ、中に入った撤退してくれても構わん」

「了解、でも今相手してって言われてて…どうすればいいですかああ!!?」

泣きついてくるように発言する

「大丈夫だ、お前がやられる前に任務完了させる」

「信じますからね! 助けてくださいね!」

「任せろ」

とつとと任務完了をしないとな…

でも何処が制圧されているか分からない…

とりあえず最上階の理事長室を目標に制圧していこう

それぞれのリリイの部屋を見ていこう

だが流石にリリイ以上の傭兵はいないか…

ならどこか広い部屋か…

浴場、体育館、教官室、あるとするなら体育館

あるとするなら体育館だな…よし行こう

俺は体育館の壁を登り、上から中の様子を覗く

体育館に行く以案の定生徒が集められていた

その近くには傭兵が10人…

簡単か

俺はすぐさま行動に移した

窓を蹴破り、上から下へと落ちる

落ちる間に、5人を撃ち殺すことに成功  
大幅リードだ

俺を見て、リリイ達は驚いた様子だった  
綺麗に着地した後、残りの5人を小銃で頭に1発ずつ発砲する

「簡単だったな……」

一瞬にして、傭兵10人は血を流して死んでいる

「きよ、教官……?」

一柳が、立ち上がりながら言う

怖かったのか、声が震えている

「一柳、これを持っておけ」

「え、ええ?!」

俺は持っていた小銃を一柳に突き出す

もちろん、こいつが銃を扱えないのは分かっている

だが小銃は近接攻撃も可能だ

何も無いよりかはマシだ

「ここにいろりリイ達はまだここで待機をしておけ」

まだ敵の位置も把握していない、決して外は安全とは言えない  
俺はその言葉を最後に、体育館を後にした

次は理事長室…

理事長室にはもしかしたら生徒会のリイがいるかもしれない…

「ん？無線？クロエ」

歩いている途中に無線が鳴る

俺はそれに応答する

「クロエ、どうした？」

「近くにいるか分かりませんが、外から見るに室内で銃を発砲している人がいるか  
です！」

「了解だ」

見えるって事は廊下かな？

そこら辺で銃を撃ちまくってるのか…

銃声は聞こえないが…

よく分かったな、あいつもやるようになったもんだ

…任務が1つ増えたな…

「…！銃声?!」

最上階を目指していると、どこからか銃声が聞こえる

さつきクロエが言っていた人間か？

俺は廊下に出て、銃を取り出す

今でも銃声が鳴り響いている

足音を出さずに銃声が鳴っている部屋に向かう

ドアの前に来た瞬間…

「っ?!」

いきなりドアが開く

そして俺にナイフを振りかざす相手

俺は側転で横に移動しながら躲す

そしてハンドガンを相手に向ける

「何者だ?!」

今よくよく見ると変な格好をしている

黒のマントを着用し、鳥のような仮面を着けている

正体を隠している?…バレたらまずい人間…どこかの作業員か?

それに部屋の中にある死体は傭兵…第三者!?

「生まれ!それ以上近づいたら撃つぞ?!」

俺はハンドガンのサイトを胴体へと合わせる

誰だ…誰だ?!

考えている内に相手は両手を上に上げている

「よし、それでいい…そのまま………」

近づいていくと…

「なにつ?!」

凄まじい力で胸倉を掴まれ、上に投げ飛ばされる

一瞬にして、俺は1つ上の階にいた

部屋はピツタリ理事長室

体制を立て直すと、理事長と生徒会の3人

そして、傭兵の3者

案の定、生徒会はここにいた

「レ、レン教官…?!」

驚いている声で俺の名を言う出江

他のみなも俺の方を見ている

「出江、すまないが今は助けられねえ」

「助けに来たんじゃ…?」

理事長室に空いた穴から、さっきの黒マントの人間が登ってくる

それを見て確信したのか出江は、黙った

「出江、とりあえずその傭兵を殺せ!」

「了解!」

俺の言葉と共に出江は戦闘態勢に入る

そして俺は俺で相手の目を見ている

いつ攻撃されてもカウンターを入れるように

ついに相手は動き出す

相手は右でジャブを打ってくる

それを手のひらで受け力を地面の方に落とす

そして、左足でみぞおちを蹴る

綺麗に当たり、怯んでいる事が分かる

だが直ぐに、俺の頭目掛けて蹴りを入れる

足を躲し、片方の足を滑らせ転す

負けじと相手は寝転がりながら俺の足を滑らせる

俺は片手で地面を捉え、転ばずに体制を立て直す

相手は立ち上がり、ゆっくりと歩いてくる

急に歩き出す相手

なんだ？

そして俺が見えないようにぶつかってくる

？この身長差どこかで見た事あるような…



「っ！なぜ……」

相手の手のひらにはマジがたまっている様だった  
そしてその手で掌底打ちをする

間一髪で掌底をマジでガードした  
力と力がぶつかりあった事で大爆発のような事が起き、理事長室は約5割が削れてい  
た

「出江、風通しがよくなったぞ」

俺は笑いながら、修理費用の事を考える

「いま、修理費用の事考えてましたね？」

「な、なんで分かった?!」

こりや驚きだ

「…そんなことよりですね…外にいますよ?」

出江に言われ、外を見ると相手が真ん中で棒立ちしていた俺が生きて分かつているかのように

俺は足にマジをため、相手の目の前まで飛ぶ

「なあ、あんた何者だ?」

それに応えるかのように、ナイフを向ける

「なるほどな…知りたきや殺せつて事か…」

正直言つて多分今は殺せない…

何故だかそう思う…

「ナイフつてな…素手じゃ不利だろ?」

相手の目を見て呟く

「そうだな…どこからかアーセナルである2年生が特性のナイフを投げたりしてくれないかなー…」

無駄に大きい声で早口で意味の分からない事をいう

だが1人だけ意味の分かるやつがいる

この言葉にそいつは反応した

ナイフがどこからか、投げ飛ばされそれをキャッチする

ヒルトなし、グリップは黒色の何かで巻かれていてとても持ちやすい

全長は24くらいといったところ…

マガジをためると34くらいか…

ナイフを受け取った瞬間にマガジをため、相手の攻撃を防ぐ

「受け取ってすぐはないぞ…」

相手と俺の間にはナイフが擦れあつて火花が少し散っている

俺は空いていた腹に肘打ちをする

相手は怯み隙が生じる

追い打ちを掛けるように、頭に蹴りを当てる

相手は後ろに倒れ込む

だが直ぐに立ち上がりナイフを振る

右でストレートのようにナイフを刺そうとしてくるが、手首を掴み顔に肘打ち

仮面には少しヒビが入っている

「いける……！」

仮面を取れると思った

その時だった……

相手はその場でマギとマギを擦り合わせ大爆発を起こす

反応が少し遅れ、シールドを展開出来ず爆風に巻き込まれる

「1…2…3…4…5…6…7…8…9…10…」

「…んっ?…」

目を開けると僕を覗き込むような出江さんの顔があつた

「これを膝枕と言うのだろう

「お目覚めですか?ご主人様」

「君はそんなにふざけるキャラだっけか?」

「こんな風と呼ばれたら男の人なら嬉しいと聞きましたけど?」

「普通はな…僕は普通じゃないって知ってるだろう?」

「これから一生あなたにはこんな事言いません」

悔しがっている

「それで、僕が戦った相手は?」

「行方は分かかってません、もう少しでしたのに」

「そうだな…」

あと少しだったのにな…

膝枕されていると足音が聞こえた

地面と近いからかともうるさく感じた

「きょーかーんー!! 私のナイフどうだつ…え？」

足音の正体は、真島

どうやらナイフの性能を知りたいらしいのだが

今の状況を見て絶句している

「教官は、出江様とそんな関係だったのおー!？」

僕はすぐさま起き上がり、否定する

「いや待て！違う！僕と出江さんは付き合つてるとかじやないから！」

「私は…べ…別に教官とそんな関係でも…いい…ですわよ…？／／／」

目を逸らしながら変なことを小声でいう出江さん

「いやーちよつと待って！何言つて…」

「ふーん…」

ニヤリと笑う真島

「これが修羅場というやつか…？」

「ほんとにそんな関係じゃ…」

「これはいい弱点を持ったなー私は」

「ちよ、マジで違うってー!!!」

## ELEVENSTORY—誕辰—

強い日差し、うるさいセミの鳴き声、どうしよも出来ない暑さ

そして何より暑さのせいでダルくなる仕事

社畜はやっぱ夏が敵だよなー

「はあ…暇だな…」

この夏は授業があまりない

訓練は熱中症対策としてどのクラスも週に1回

他は座学、実技は水泳

何が言いたいかと言うと

「暇だ（2回目）」

自室で書類を書き、今日の仕事を終わらせる

まだ午前というのにな…

せめて、僕も授業をしたいな…

でも座学は苦手だしな…それに免許も持ってないし

自主練でもしようかな…って言ってもサンドバッグ打っただけけど

ま、まだ午前は見回りとかあるし暇は潰せるか…

いや、てか明日から長期休暇じゃん！

今思い出した

そうだ明日からは長～い長～い、夏休み！

今日は7月31日…8月からか

よっしや！やっと何も考えずに色んな事が出来る！

最近何かと忙しかったしな…

良い休暇になりそうだ！

僕はルンルン気分で見回りを開始した



「夏休みー♪夏休みー♪何も考えずに生きれるー♪」

らしくない謎の歌を口ずさみながら歩く

「楽しそうね、レン」

前からイロハが笑顔で歩いてくる

「夏休みだぞ?!明日から!何も考えずに生きれるんだぞ?!」

「ふふつ、なんか弟って感じがしたわ」

口を手のひらで隠しながら上品に笑うイロハ

「僕はあるたの弟だろ?」

「違う違う、なんかこういつもは私より頼もしくってカッコイイあんだだけど、そんなにもルンルン気分だど可愛いって思っちゃって本当に私の弟なんだなーって」

「僕が可愛い…?」

こいつの目は節穴か?

「うん、いつもとは違って可愛く見えるわよ」

なるほど…:いつもの差、つまりギャップというやつか

「はあ…:ギャップって」

僕は頭を押さえながらため息をつく

「あ、そういえばもう誕生日だったわね?」

「誕生日?…ああそうだったな」

またすっかり忘れていた

「今年はお祝いしてくれる人がいて良かったわね」

「誰が祝ってくれるんだ? お前なら遠慮しとくが」

「違うわよ! 私とリリイ達って事よ!」

「何が言いたい?」

リリイ達が祝ってくれる? 今年百合ヶ丘に来てばっかなのに?

「ま、楽しみにしといて」

「嘘なのは分かっているが楽しみにしてるよ」

「嘘じゃないわよ…?」

そういい、僕は別の方向へと歩き出した…

夏休みが入ってから9日がたった、8月9日

暑すぎて動く気も起きない

外に出ようかと思っただがセミがうるさい

「誕生日は…嫌いだ」

こんな暑い日が誕生日だとわな

「とりあえずエアコンつけねえと」

エアコンをつけようとりモコンがかかってある入口付近までのしのしと動く

そしてリモコンを手に取り冷房をつけようとする

僕の手はそこで止まった

「は、はは…」

苦笑いをし、これからどう生きていこうか考える

リモコンの表示は…

冷房

「なんでついててこんな暑さなんだよおおおおお!!!」

冷房がついているのにも関わらずとても部屋の温度は高い  
百合ヶ丘の宿舎はこんなにも暑いとわな…

「暑い…暑すぎる…」

もう死んでまうのでは…?

何も考えれず床に倒れ込む

床が冷たくて気持ちとは思ったが次第に力が抜けていく

「これが、”死”か…」

意識が朦朧としてくる中1つの音が聞こえた

それは、ドアのノック音

「なんだ? 埋葬業務者か?…」

ろくでもないことを言いながら、立ち上がり鍵をあける  
「はい、なんですか？こんな暑い日………ん?!」

ドアを開けるとさっきの暑さが嘘かのように寒気がした  
目の前にいたのは、ピンク髪のリリイ

亜羅椰、最近全然あつてなかったからか、とても怒つてるように思える

ドス黒いオーラを纏い凄く無さそうな(?)笑顔でこつちをずーつと見つめてくるだけ

「あ、亜羅椰さん?きよ、今日はどういった…」

恐る恐る、質問を投げかける

「今日は、何日か知ってますの?」

ドス黒いオーラを瞬時に消して、問いかける亜羅椰

それに僕は即座に返事する

「今日は8月9日だな」

「分かってらっしゃったのね」

煽り気味な笑顔で一瞬で答える亜羅椰

「それで?何の用だ?」

少し間をあげ、質問を投げかける

「今日、というか今からですが…海に来てもらいます」

「へ？」

珍しく間拔けな声が出ってしまった

亜羅椰の言う通り、海に行くための準備をした

「なんで海なんだろう…」

もう亜羅椰は行っていたので本音を漏らす

海…？何故なんだ？

まさかイロハの言う通り、何かあるのか？

いやそんなことは無いだろう、期待はせず海に向かおう

百合ヶ丘を出て、近くの海へと向かう

セミがミーンミーンと鳴く道から出て、浜辺の砂に足をつける

砂はとてもふかふかしていて、おかしい感覚だ

「あー教官ー!!!」

砂を見つめていたが、呼ばれたので声が出た方を向く

そこには大きく手を振る梨璃の姿があつた

僕は一步一步踏みしめながら梨璃の元へ向かう

「一人なのか？」

「いえ他にも数人います！今は着替えているのかと」

そうか……ここって海だったな

「梨璃だけ着替え終わって待ってたんだな」

「はい！」

大きく頷き、少し顔を赤らめた

そして少し僕から目を逸らす

「なんだが……恥ずかしいです……／＼／＼」

いつもは着ないもんなこんな露出の多い物

恥ずかしかって当然か

「教官は着替えてこないんですか？」

目を逸らしながら質問する

「んー……どうしよっかな……」

普通の人ならそく着替えるのだろうが

僕はいにくそうなのが苦手な人でね

周りの人に体を見られるのは好きじゃない……

考えている内に更衣室のドアが開く音がした

僕は音の方へと向く

出てきたのは少なくとも10以上のリリイ



僕は人数に驚き、梨璃に問いかける

「な、なあこれ何人いんだ？」

「一柳隊とアールヴ Heim のメンバーですよ？」

こう見るとめちやくちや人数いるな

てか人数というより、スタイルめちやくちやいいな

おつと取り乱してしまった

これ以上見ると何か言われそうなので海の方をみ、少し海へと近寄る

綺麗な海だ

青空と日光が反射し、一段と青く見え、とても眩しい

僕は海に見とれてしまっていた

海は初めてだが、こんなに綺麗とは思わなかった

美しい

ただその言葉だけが浮かぶ

「あれれー？もしかして私のスタイルが良すぎて興奮しちゃうから見ないようにしてるのー？レンったら男子〜」

僕の尊い気分を妨げたイロハ

後ろから抱きつき、僕の背中に自慢の胸を当ててくる

耳元で囁いてき、無駄にセンチティブ

だがそんなのにピクリとも反応しない自分が素晴らしい

いやこいつだから耐えられているのか…他のリリイにやられたら僕はこの世からいなくなるだろう

「あれれー？もしかしてレンって結構こういうの弱…」

「んつつつ!!」

「ぐはっ—!!!」

僕はこの一つのお腹に肘打ちをし、後ろに思いつきり飛ばす

イロハは梨璃達の方まで吹っ飛び心配されている

「言つとくがお前なんかでは俺の心は動かせんぞ?」

「ぐっ…ぐぬぬ…恐ろしく早い肘打ち、私じやなきや見逃しちゃうね!」

「もう一度してやろうか?頑丈ババア」

リリイ達は苦笑いを浮かべこの場を濁そうとしている

流石に気を遣わせる訳にもいかならないと思ひもうそれ以上は手を出さなかった

「て、てかレンは着替えないの?」

立ち上がり、着いていた砂を払いながら言うイロハ

「お前忘れたのか？僕は人前で体なんか晒したくないし…」

こういうのが俗にいう、陰キャというやつだ

だがそれは事実なため、僕はなんとも思つてない

「ええー？みんなレンの腹筋みたいと思つてるよー絶対！」

「黙れ」

これだから姉貴は嫌いなんだよな

姉貴は、腐女子という類になる

昔は、いつも僕の部屋に入ってきては何かゴソゴソしていた

気持ち悪い

でも、こいつは世間一般的に言えば美人である

金髪に、整った顔立ち

そしてどんな男の人でも見てしまうスタイル

締まっているところはしっかりしまつて

出るところは、しっかり出ている

美人だから嫌なんだ

もつとブサイクだったら縁を切つていただろうな

僕は今も昔もこう思っている

清く美しい心を持って欲しいと

少し僕は集中を切らし、周りに耳をかすと

リリイ達のクスクスとした笑い声が聞こえた

僕は腹あたりに違和感を感じたので下を向く

「ん？イロハ何をして…」

そこには膝をつきながら、僕に何かをしているイロハの姿

次第に僕と同じ目線までに立ち上がった

そして、僕が着ていたYシャツの襟を掴んだ

直後にリリイ達の「うおー」という関心の声が聞こえた

僕はここで初めて気づいた

いつの間にか脱がされていると

「ほー流石我が弟ね！ふつくしい腹筋！浮き出ている血管！硬そうな肩甲骨！そしていい形のむ…」

「死ね餓鬼！」

僕はイロハの顔に蹴りを繰り返す

そのせいでYシャツが完全に下へと落ちる

「ほー!!やはりふつくしい…」

倒れているのにも関わらず見た気になり言葉を発する

「つーちよつとみんな、今のは見なかった事に…」

Yシャツを拾おうとし、少し縮こまった瞬間に亜羅椰にシャツを取られた

「ま、まて!亜羅椰!それは本当に…」

「いいえ返しません!私はあなたの上裸をみたいから!」

「お前もかよおおお!!!」

結局、僕は水着に着替えた

上に着れるものがなく、上は何もなし

とても恥ずかしい…

「教官、凄い腹筋…」

「ゆ、ユージアさんは、じゆ、純粹でいてくれ…」

「あら?ユージアさんもこういうのに興味あるのー?!」

僕の切実な願いを潰そうとする腐女子（イロハ）

「よ、よせ！ユージアさんは純粋なスナイパーだ！やめろ！やめてくれ！」

まるで命がかかっているかのように叫ぶ僕

それをものともせずユージアに話を続けるイロハ

「ユージアさん、男性っていうのは凄いいいポーズをしたら興奮するのよ、やってみて、

こっとう感じ！」

イロハは前かがみになり胸を強調するようなポーズをとる

「お前のは本当になんも思わん」

辛辣に反応する

しかし、数秒後に…

「こ、こっとうですか？…」

「なっ！」

なんとユージアもそのポーズをしてしまった

やばい、可愛い

くっ、やはり他の人にやられたら何も感じないは嘘になってしまふ…

ずるいだろ…！顔を赤らめてちよつと恥ずかしさ隠せてない顔は！

くっそ！耐えられる自信がねえ！

どうにか話をそらしてこの場をくぐり抜けねえと……!

「そ、それよりお、泳がねえのか? ほらせっかく水着に着替えてるし……」  
そう問いかけるとユーージアは顔を赤らめながら普通の姿勢へと戻った  
「ふう」と息を吐きひとまず安心する

それ以上されていたら僕の気はどこかに行っていただろう……

「そうねっせっかくの休暇だし、遊ばないとね!」

まっさきに反応したイロハは拳を振り上げ、楽しむ気満々

他のリリイ達も「そうですね」という笑顔でイロハを見ていた

「じゃー遊ぼー!!!」

青い海、雲ひとつ無い綺麗な空、海ではしやぐ若者達

これが夏、なかなかいいものだな

防衛軍にいた頃はこんな夏らしいことなんかしてなかったな……

というかこういう事をしていたと思うが僕は参加はしなかったな

人の集まりは好きじゃなかったからな…

でもこういうのもたまには良いな

「教官も泳ぎましょーよー!!」

浜辺でゆっくりしているのと梨璃が誘ってくる

「ああ！今そつち行くよ！」

久々に泳いでみるのもありか…

と思い返事をする

僕は立ち上がり小走りをし、梨璃の元へと向かう

海ではもう泳いでいるリリイ達がいるなか、梨璃は待っていてくれたようだ

人がいいな

「すまん待たせたな」

「いえ！大丈夫です！それより早く泳ぎましょー！」

「そうだな」

元気がいいなー

準備体操をしていると横で同じことをしている梨璃から質問がくる

「教官って海とか泳げるんですか？」

遠慮気味にいう



僕は瞬時に答える

「僕は泳げるけど、ちよつとトラウマがあつてね」

「トラウマですか？」

「ああ」

忘れもしない、あんな日々が続いてたのによくも僕は耐えれたよ

「じゃ入りましょうか！」

準備体操を終えた梨璃が急にいう

僕はそれに反応し

海に浸かる

冷たい

それが最初の率直な感想であつた

「これが海か……」

先程も言つたが僕は海が初めてだ

このようなうつくしい物が、地球上には腐るほどある

素晴らしいものだ

海軍とかはこんな美しいものを毎日見ているのか

入る組織間違えたか？

「教官、海初めてなんですね！」

「ああ、そうだ」

海より綺麗な笑顔で覗き込む梨璃

僕はその笑顔に見とれてしまっていた

「？教官？」

梨璃の言葉で目が覚める

「ああいや」

なんと言い訳しようか

見とれているとでも言ってみろ、キモがられるだけだ

「えっ—と…きよ、今日結構天気いいな—って」

「あ、そうですね！今日は雲ひとつありませんね！」

あー純粹で良かったー

ほんとにいい女性になるよ、君は

僕は体全体を海に浸からせる

「うっく冷たい」

僕が浸かったあとに梨璃も浸かる

「ちよつと泳いでもいいか？」

後ろにいた梨璃に許可をとる

「はい！私は遊びながら見ときます！」

「どつちかにしろよ」

互いに笑いながら僕は背を向ける

そして僕は久々に泳ぐ

まさか僕がまた泳ぐとはな

僕は雑にクロールをする

久々に泳いで思ったが

やはり、陸の防衛軍で良かったと思う

泳ぎのセンスがねえ

それにしても海の中はとても綺麗だ

まるで本当の現実ではないようだ

本当に海というのは美しいものだな

「はあ、疲れた」

少し泳ぐと、すぐに疲労が溜まった

久々の水泳だ、当たり前か

その後は誰とも話さずなんとなく泳いでいた  
そうただ黙々とな

体力の限界というところまで泳いでいたら、陸から名前を呼ばれた

「レーン!!!おひるー!!!」

イロハが僕に向かって叫んでいた

僕はそれに反応し、「分かったー」と伝える

陸に上がり屋根がある建物に駆け寄る

こんな暑い日の地面は熱すぎる

裸足ではもう歩きたくないな

屋根の下ではBBQをしていた

一柳隊のみんなが焼いているようだ

そして最年長であるイロハは…

「何してる?」

「本読んでる! やー昨日新巻が出ちゃって」

「動けよ、最年長なんだから」

「そんな理由では動きたくない!」

「はあ…」

まあいいか

まずまずこういうのを用意してくれたのはあいつだし

「それで僕は何したらいいの?」

リリイ達に手伝いを申し出る

「あ、教官は座っておいてください! 私たちがしますので!」

梨璃が胸を張って言う

僕はそうかと思い、近くにあつた椅子に座る

座ると隣にいた天葉が話しかけてくる

「さっきの話し合いで疑問に思ったけど最年長ってイロハさんなの?!」

「あ、ああそうだが?」

「何年離れてるの?!」

「2年だけど…」

「へ、へえ…」

ま、普通僕の方が年上って思っっちゃうよな

でも本当はイロハの方が上

「良く間違えられるんだよな」

「は、初耳だな…」

しばらくすると材料全てが焼き終わり、僕らの前に並べられた

いい焼きかげんだ

すごく上手だ

「柳隊、流石だな」

「えへへ」

僕が隊長である梨璃に向かって隊を褒める

でも本当に凄い部隊だ

戦闘面、生活面全てにおいて80点だ

「あ、教官！イロハさんにこれ渡してきてください！」

梨璃が差し出してきたのはみんなと同じ料理

僕はそれを受け取り立ち上がる

一柳は僕の扱い方を分かってきたのかな？

と思いつつ慎重に向かう

「おい、昼飯だぞ」

「お、てんきゅー」

本を読んでいるイロハの腹に皿を置く

「そ、そんなとこに置かなくても……」

「どこに置けつて言うんだよ、お前が座ってる斜めの椅子しかないだろ？」

「そうだけどお腹はないでしょ？」

「うるせえ、黙って食え」

「なんか冷たい」

イロハは体制を変えながら、かまちよしてくる

僕はそれに呆れ目をそらす

と、ここで僕は不思議に思った

「なんだ？この本？」

イロハが読んでいた本が目に入る

見たことのない本だ：

表紙は真っ黒

何の話か、表紙じゃ分からない

「あーそれ？おもしろいわよー」

「どんな話なんだ？」

珍しく僕はイロハの本に興味津々だった

普段こいつはセンチティブな本しか読んでないので興味はなかった

が、こういう本には興味がある

「レンは死神っていうのを信じる？」

「死神？」

本をペラペラと見てみると唐突な不思議な質問が耳に入る

「どうやらこの本は“死神”というものにスポットライトを当てた本らしい

「死神って不思議よねー」



「どこが？」

「え?! 不思議じゃないの?!」

「別にそうでもない…だってもう死神について語られてるんだろ？ 不思議でもなんでもないだろ」

「確かにねー…ん！このお肉おいしっ！」

肉を頬張りながら率直な感想を言っている

死神か…

「そうそう、この本には死神って案外近くにいるって書いてあったの」  
「だからなんだ？」

「あんたが死神かもね」

イロハが僕の頭を掴み、耳元で変な事を言ってきた

正直少しヒヤヒヤした

だが僕は動じないような態度を取る

「死神？俺が？」

「…ううん、なんでもない」

なんだこいつ

俺が死神？意味が分からない

俺は俺だ

「レン？どうしたの？」

「あ、いやなんでもない」

そう、僕は僕だ

ちよつと違う人間だ

たとえ僕が死神だったとしたら、イロハもそうなる

こいつは僕と同じ性質を持っている

僕だけではないだろ

「教官ー！冷めちやいますよーー？」

「了解だー！すぐ食うよー！」

「あんたもモテ期かしら？私だけの者だったのに」

「誰もお前の物にはなつた覚えがない、じゃあな食つてくるよ」

「うん、行ってらっしゃい」

あれから数時間が経った

僕は何もしないままぼーとしたり

リリイ達と遊んだりした

だがあのイロハの言葉だけがどうしても、モヤモヤしている  
なんで僕が死神って思ったんだろうな

夕日が辺りを照らしている中

僕らは片付けをしていた

水平線に沈みゆく夕日

僕らは黄昏ている

という言葉が最適だろ

とてもいい景色だ

夕日を見ていると誰かが座っている影がほんの少しだけ目に入った

どこか切なさそうな影だ

僕はそのリリイの元へと歩き始める

「なんだ亜羅椰か、どうしたんだ？どこか切なさそうだけど」

「え？そうかしら？」

とぼけているのか本気なのかは分からないがどこか悲しそうなのは確かだ

「今日は楽しかったか？」

「もちろんよ」

「そうか…なら良かったよ」

「教官は？」

「僕は楽しかった」

「ふーん」

素っ気ないな…

「…後でまた話しかける」

そういい、片付けに参加しにいく亜羅椰

どういう事だ？

一体何があつたんだろ…

僕は片付けを終わらせ、百合ヶ丘へと戻った

道中は話声が絶えなかつたが僕は亜羅椰やイロハの事を考えていた  
特別な感情的な物ではなく、ただ単純に不思議に思った事があつたからだ

「よし、とーちやーく」

イロハの声で考えることをやめた

考えているうちに着いた

時間って速いな

「あ、レン話したいことあるから休憩所きて」

「話したいこと？ま、まあ分かつた」

僕らは自分達の自室へと向かつた

僕は荷物を置き、指定された場所へと移動する

部屋の前まで来たところで、僕はあたりを見渡す

見渡すとイロハは居なくおそろくもう中に入っている

というかなぜ広い部屋で話すのだろう

自室でもないのではないか？

不思議に思いながらドアノブに触れる

そして恐る恐るドアをあける

ドアを開けると、「パァンツ！」というクラッカーの音がした

なんだこれは

というのが率直な感想

でも僕は後の言葉で悟った

「誕生日おめでとうー！」

そうか僕は誕生日だったのか…

でもわざわざこんな事しなくても…

「教官！改めてお誕生日おめでとうございます！」

「happy birthday！」

「おめでとうございますっ！」

様々な声があげられているがどれも祝いの言葉だ

「お前ら、いくらなんでも…」

「レーン?!そこあんたの悪い癖！」

僕があたりを見渡しながら言うと、軽くお叱りの声が

「しっかり貰ったものは、しっかり受け取る！常識よ！」

「って言われてもな…」

「素直に喜びなさい！」

おかんみただ

ほんどこいつは良い奴なんだが悪い奴なんだか

「…なんか言い難いけど、祝ってくれてありがとうかなお前ら」

「よく出来ましたー！」

「うわめつちや恥ずい」

「えー?!可愛いー!!」

「うるせえよ！」



自然と笑みがこぼれる

これが嬉しい、楽しいという感情

今まであまり感じたことの無いものだ

本当に僕はいい暮らしを今している

ありがとう

自室に戻り、僕は仕事をしようとするどドアがノックされた

「きよ、教官！私です」

「ああ、今あける」

ドアの向こうにいたのは亜羅椰

手を後ろで組んで、何か隠している

「どうしたんだ？良い子はもうねんねの時間だぞ？」

「私良い子ではないので」

「訓練の評価を1下げるか」

「何故です?!」

「はは、冗談だよ」

少し間が空いた後、亜羅椰から口を開く

「あの、お誕生日おめでとう……(ぎ)ぎいます……!」

使い慣れてない敬語

少し声が小さくなっている

「良かったらこれを、受け取ってください」

そう言つて渡されたのは

「ジャケット？」

「はい！」

黒色のフード付きの長いジャケット

ざつと見で僕がきたら、膝くらいまである

「これ、僕のために？」

「は、はい！もちろん！さつきまでこれでいいのか分からなくて私もよく分からない感情でしたが、イロハさんの言葉で渡そうと思つて」

「へー亜羅椰も案外考えるんだな、でもありがとう！僕こういうの持つてないから助かるよー！」

「喜んでもらつて良かったです！」

僕は心の中で呟いた

ありがとう

TWELVESTORY—昔話—

暑くもなく寒くもないこの季節

”秋” 良いものだ

この時期が一番体を動かせる

ちよつとだけ訓練の視点を变えて、マット運動でもしてみるか

この時期で将来の生死を分けると言っても過言ではない

リリイ達にはしつかり動いてもらおう

暑い夏を超え、快適な環境になった今

まさか秋がこんなに楽とは思わなかった

夏とは違い、暑くないので仕事が捗る

拂りすぎて(?)朝というのに今日の仕事は終わっている  
あとは午後の訓練のみ

てかい温度だから眠い

自室だしちよつと寝ても問題はないかな：

いや流石にダメだな、やめよう

あと数時間何をしようかなー

ナイフの手入れでもするか：

ああダメだ、眠くなってきた

まじでやばいかも

今にもベットに行きそうだ

僕はもう既に後ろにあるベットの方を向いていた

そして数秒後

僕は立ち上がりベットの方へと向かう

しかしそれを妨げる物があった

「ん?電話?」

机に置いていたスマホがバイブレーションで揺れている

僕はそれに反応し、スマホを手取る

相手の電話番号を確認し、電話に出る

電話に出ると相手から先に口を開いた

「防衛軍本部です、リエスタ一等陸佐でございましょうか？」

「ああ僕がリエスタだ要件は？」

本部からとはな…

相当な事がない限りは電話は来ないはずなんだが

「上官からの命令であなたへの報告をしに」

「おお、それはお疲れさん」

少し間が空き変な空気になるが相手は構わず喋った

「昨晚、本部に反乱軍が押し寄せ反乱軍数人を逮捕、他数名は逃してしまいました」

どうでもいいと思ってしまった自分がある

「反乱軍にご注意を」

「了解」

反乱軍…1度戦った事があるな

「2つめは重要です」

少し声のトーンを下げている

「アメリカのリリイと我々日本のリリイとの合同訓練が確定しました」  
相手から伝えられたのは衝撃な言葉だった

「え？ど、どこで？」

「もう使われなくなつた街だそうです」

「誰が提案を？」

「防衛大臣とアメリカの大統領が」

2人が提案か…

これは防げねえな

「秋の合同訓練です楽しみですね」

「防衛省にも変な冗談を言うやつがいたとはな」

「私堅苦しいものは苦手なので」

「そうだったな」

「なんですか？知つた口きいて」

「誰が育ててやつたと、思つてる…」

急に話が変わるが僕と今の相手はクロエと一緒に僕が訓練を担当した人間だ  
仕事素早く正確にでき、部隊に1人はいて欲しい人材だが

生憎こいつは命令違反をした悪い人間だ

まあだから僕が育てたんだけどな

僕の部隊にいたのは「ゴミ」という扱いを受けた者だけ

くせ者の集い

なんて言われたりしてた

「今は上手くいってんのか？」

「ええもちろん、私は昔と違いますから」

「ホントか？」

「1回死にますか？」

「おいおい上官に向かってなんていう口の利き方だ」

「いいえもうあなたは私の上官ではありませんし、年齢で言えば私の方が上です」

「そうだな、確かに僕はもう君の上官ではないし年齢も4年くらい上だったな」

「セクハラですか？訴えますよ」

「お前が先に言ったんだろ…」

今こいつは僕の元を離れ、また別の人と働いている

こいつにあう仕事が見つかって良かったよ

「覚えてるか？僕らがあった日」



「昔話はおひとりで、それと」僕「って言うんですね」

「俺の方がやっぱりいいか？」

「いいえキモイと思っただけです」

なんてやつだ…

「もうひとつ報告があります」

「なんだ」

食い気味に答え、相手の回答を待つ

もうひとつ？

「これは信じたくないし私の予想ですが、この前あなたが応戦した仮面を着用しマントのような物で姿を包んでいた人なんですが……」

「ああ、あれか」

なかなか強かった人だな

逃がしてしまっただやつだな

「私の予想ですよ？」

「自信ない時のその弱そうな声やめろって防衛軍の時言ったよな？」

「すみません」

「分かればいい、話続けて」

はあ…ほんとにこいつは

「防衛軍の中にその人がいるんじゃないかって思います」

衝撃的な言葉パート2

どうしてだ？何故こいつはそう思ったんだ

「なんで思ったんだ？」

「え？えつーと……」

相手は少し間を空け答えようとする

「だって……あ！すみません！次の仕事に移ります」

上官に長電話とでも言われたのか、謝りの言葉を投げる

「すみません、私もう次の仕事にいかないといけません」

「ああ分かった今日はありがとう」

「いえこちらこそ徐々に話せて楽しかったわ」

と言ひ残し電話を切る

「あいつの声久々に聞いたなー」

電話を切ったあと僕は椅子に座りながら懐かしさを感じていた  
「あいつとあったのは……あの日か」

ある雨の日だった

ザーザーと、とても強く物や人を叩きつける雨

とても冷たい空気

防寒着を着てないと死ぬレベル

俺らはあるラーメン屋から出てきたところだった

「今日はさみしいのー、レンさんよ」

「奢ってやったんだらかこれ以上の要求はするなよ？蒼良」

蒼良は着ていたコートに手をつ突っ込み寒がっていた

「てか今日雨すげえーなー」

「そうだな冬の癖に」

手を傘の範囲外に出し雨を確かめる

「痛いかな？」

「強いな、明日はヒュージでも来るかもな」

「やめろ仕事増えるじゃねえか」

ぜってえ向いてねえだろこの仕事

「ここらにいる方々は大変だな」

あたりを見渡しながらいう蒼良

「そういう方々もすっかり対策して生きてんだ、あんまりそういう言い方するな」

「そうだな、お前の言う通りだ」

俺に何が出来るかと言われてもなにも出来ないが野宿している人をバカにするのは

違う

「なあレン」

「どうした蒼良？」

歩いていると急に声を上げる

僕は立ち止まり後ろにいる蒼良の方をみる

「トイレ行きたいんだけど行っていいかな？……」

「我慢出来ねえのか？」

「もー無理ー!!」

そう言つて蒼良は俺の許可なしで近くのコンビニに大急ぎで入つていった

ラーメン屋で行つとけよ……

俺は仕方なくコンビニの駐車場で待つ

「暗いな……」

電灯3本くらいで照らされている駐車場

そうとう貧乏なんだろう

俺はなんとなくあたりを見渡そうと少し前に出る

前に出るととても暗い街中

そしてどこからか聞こえる鳥の鳴き声

「鳥さんも大変だな」

夜空を少し見ていると横から足音がした

俺はその方向をみた

だがしかし、もう遅くその人とぶつかってしまった

俺は耐えたがその人が前に倒れてしまう

「あーすみません！お怪我は……」

俺はその人の方にしやがみ無事かどうかの確認をした

しやがんだ時その人は僕にしがみついてきた

その人は息がもう切れていて最後の力で俺に言ってきた

「たあ……す……けてえ……」

涙目になり、頬にはところどころにアザが出来ていた

俺がその人を見てみると後ろから声があった

「はーやっと追い詰めましたね！兄貴ー！」

後ろを見ると大男と子分のような男の人が

「ああほんとだよ……疲れたぜメスガキ」

この女性に言っているのかその汚ねえ言葉

「おい！ガキ！捕まえてくれてさんきゆうな、ほらとつとつとそのメスを渡せ」

なんだろうな、こんな奴らに渡してはいけない気になった

俺は女性の事を抱きながら立ち上がる

「君たちとこの人の関係は分からないが流石に渡せない」

「部外者が何言ってるんだ?!おらあ!!」

顔の距離を縮めてくる大男

俺はそれになんの感情も抱かないまま話し続ける

「この人は助けを求めていた見捨てる訳にはいかないでしょ」

「このガキイ！」

「兄貴、言っても無理みたいですよ」

「仕方ねえ！やつちまおうぜ！」

俺はやる気にはならなかった

今ここでやれば俺は退職だ

一応幹部だからな

「やめてください俺は喧嘩なんて出来ません」

「うるせえよ！お前の都合なんて知らねえんだよ！」

「はあ…言つても無駄ですか…」

俺はポケットからあるものを出す

それを2人にみせながらこういう

「防衛軍幹部です、これ以上手を出す場合は法的措置を取らせていただくことになりませんがよろしいですか？」

「か、幹部?!」

「おいおい！ビビってんのかよ？w」

「違いますぜ兄貴！こいつ防衛軍幹部の中でもトップの力を持つてるっていう…」

「な、まさか！」

「ご存知でしたか、そうです俺がレン・リエスタですが何か？」

「ひい、ひいひい！し、失礼しましたああ!!」

「あ、兄貴いい!!」

2人は腰を抜かして逃げていった

「こういう時に大事だよな、防衛軍証」

「すみません、大丈夫ですか？」



「……………」

女性は泣いており何も答えない

そうとう怖かったのか…

「ほい戻ったぞ…って何やってんだよ！」

「人助けしたただけだ」

「お前…女を抱くことを正義って思ってるのか…？」

「んな訳あるか、おいお前も手伝え」

俺は傘を捨て、女性の腕を肩にかける

つかさず蒼良も傘を捨て肩に腕をかける

「この人、どうすんだよ…」

「とりあえず駐屯地まで運ぶ」

「はいよ」

俺らは上官の許可を得た上で駐屯地の空いてる部屋までその女性を運んだ

今は寝ていたのでベッドに寝かせる

「とりあえず俺は部屋戻るよ」

運び終わった途端、蒼良は眠そうにする

俺は「寝てこい」といい部屋に残る

「さてどうするか…」

まだ名前も聞いていない人を連れてきてしまったが、先の事を考えてなかった

でも明日になるまで分からねえよな

仕方ない、今日は寝よう

俺は近くにあった椅子に座る

するといつの間にか眠りに落ちていた

「い、レー……起き……ろ……」

俺は体を揺さぶられながら起こされる

「……ん？もう朝か……」

「そうだもう寝る時間は終わったよ」

ほんとに蒼良は朝起こすのがはやいよな

まだ6時だぞ？

まあいいや

それより女性の方は…

「まだ寝てるよレン」

俺がスッと起き上がった瞬間に蒼良は察して女性の状態を伝える

「そうか…てかまじまじ見てなかったからか、案外この人美女だな」

「おお、お前が認める美人さか」

「俺が認めたところでこの人はなんも嬉しくないと思うぞ」

「…おっぱい…ぐはあ！」

「変なこと言おうとすんじゃないやねえ」

いきなり、変な事を言い出したので軽く腹パンをした

「な、なんでだよ！あれがデカいって言おうとしただけじゃないか?！」

「それがダメなんだよ！」

俺は「はあ」とため息をつく

「や…やっぱり私の体目的…?!」

「そんな事ないじゃないか！俺は蒼良幹部だぞ？そんな訳…」

「な！」

「え？」

「うえええ!!起きてたああ!!」

「お、起きてましたよ！」

蒼良が大声を出しそれを上手く捌く女性

「お嬢さん！今の会話は聞かなかったことに！」

「は、はい…大丈夫ですけど…そのやっぱり体目的なんですか？」

「お嬢さん、僕は防衛軍の幹部を務めている人間だ、そんな目的でここに連れてきた訳ではない」

俺は証明書を見せながら安心させる

女性は「はあ…良かった…」とボソツと呟く

「蒼良、とりあえずなんでもいいから飯持ってこい」

「は、はあーい！」

蒼良は勢いよく外へ飛び出していく

食堂にそんな大急ぎで行くものかな…

そんな事はどうでもいい

今はこの女性の事だ

「お名前は？」

紙とボールペンを持って質問を始める

「私の名前は…咲楽結月といいます」

紙にメモをとった事を確認し、次の質問に進む

「年齢は？」

「22です」

俺と4年差か…

「職業は？」

「監禁されてて…」

監禁？ 監禁されてたのか？

「誰に？」

食い気味に質問すると

「あの男2人です」

食い気味に答えてくる

あの男達か…ま、そこらへんは警察にやってもらて

俺が首を突っ込んでいいものではないだろう…

「今は無職って事か？」

「は、はい…」

恥ずかしそうにするも、俺はそんなことを気にせず質問をし続けた

「男達との関係は？」

「風俗店で働いてる時に…出会ってるので一応定員と客です」

「何歳から働いてた？」

「18です」

違反か違反じゃねえのかわつかんねえな

俺は物知りでもなんでもないし

一応法学部だったけど飛び級したかったただだから忘れちまった  
しかもこういう接客の法律はやってなかったし…

「質問は以上だ、おつかれさん」

「は、はい…」

困った顔をする咲楽

「どうした？」

俺はそれに気づき質問する

「私…これからどうしようって思ってた…」

そうか、仕事が無かったのか…

んーどうしようか

俺と一緒に探せる訳でもないし

家に留まらせる気もない

てか俺の家には留まりたくないだろう

…どこかの施設に飛ばすか…

ああ、いやそれじゃまたこんな目に合うかもしれない

なら答えはひとつか…

「なあ咲楽」

「はい？」

「人を助けたいって思ってるか？」

「…難しいですね…」

「難しい？」

「はい、こんな私が助けられるのか…」

なるほどな…助けたいけど私には無理って感じの人が

だったら尚更…だな

「なら俺が強くしてやる」

「え？」

「俺は幹部だ、素人を戦えるくらいまでは育てられる」

「わ、私に防衛軍になれと?！」

俺は手を差し伸べ勧誘をする

「黙って俺の手を取れ、もうお前には後がない」

その時だった



こいつは笑顔で泣いていた  
初めて笑っているのをみた

美しいな、それだけありやいいのにな

咲楽は俺の手を掴み

「よろしくお願ひします、レン幹部」

了承する

俺はそれに一瞬ドキッとしたがつかさず

「ああ、よろしくな咲楽」

という

「ほいよー飯持つてき……っ！お前まさか！もう付き合っているのか?！」

俺と咲楽の空間に入ってきたのはトレイを2つ持った蒼良だった

俺と咲楽は同時に手を離し顔を赤らめる

「うるせえ、俺と咲楽はそんな関係じゃねえし、あと咲楽！なんで俺の名前知ってんだ

よ

「さ、さつき見せてくれたじゃないですか！」

「おい！そんな事どうでもいい！おい！レン！俺が狙ってたんだぞ?!」

「だから俺は別にそんな気はねえよ！」

「やっぱり体目的…?!」

「違うよー！あ、でもレンは体目的！」

「馬鹿野郎！勘違いされるだろうが！」

咲楽は笑っていた

こいつには笑顔を絶やさないうで欲しい

そのためにも俺も努力しないと

咲楽、俺が絶対強くしてやる

「今考えるとすんごいストーリーだな…」

天井を見ながら関心する

「まさかあんなひ弱な女性が今では俺と同等レベルになるとはな…」

俺が優秀だったのかあいつが優秀だったのか

あるいはどっちもか

「どっちでもいいや」

# THIRTEENSTORY—合同—

「明日は米との合同訓練です、みなさん今日はお早めにお眠りに」  
集会で出江さんが明日の訓練について話している

明日は米のリリイとの合同訓練

どうやら戦い合うようだ

凄まじい提案をしてくれたな：防衛大臣

やってる身にもなってくれよな：

俺はため息をつく

だが俺は閃いた

リリイだけが戦う

つまり：

教導官は何もしなくていいのでは?!

そうだ！絶対そうだ！

よっしやあ！

僕は集会の終わりを見届けた後自室へと戻った

そうだ僕は何もしなくていい：

ただ見とけばいいそれだけだ

なんだ何を焦つてたんだろ

明日が楽しみだな：日本かアメリカ

どっちが勝つんだろ：

僕は他人事なので笑っていた

百合ヶ丘の校舎

そこにはデカイヘリが着陸を試みていた

砂が飛び交い目が開けない

目を瞑っているといつの間にかヘリの音がどんどん小さくなり

目を開けるともう着陸に成功していた

ガラガラとドアが開く

中から出てきたのはアメリカのリリイと教導官

そして偉そうなおっさん

まあ流石に僕よりもっと上の人だからそんなことは言わないけど…

「お待ちしておりました」

流石生徒会の出江さんだ

てか日本語分かるのか？相手さんは

「あ、アリガトウ」

カタコトだが日本語は分かるっぽいな

てか通訳さんいるんだからそれ使えばいいのに…

僕は頭をかきダルそうにする

はやく終われよと思いつつ立っている

「アリガトウゴザイマス」

百合ヶ丘の教官が相手の荷物を持ち、置き場へと持っていく  
アメリカのリライ達はそれに困惑しているのか固まっている  
僕は何もすることはないかな…

僕が棒立ちしていると出江さんがちよこちよここと僕の方に寄ってくる

「教官、英語喋れますか？」

「お…僕はあまり英語得意じゃないんだ…はは」

苦笑いし、場を濁す

「え？防衛軍なのに？」

「ああ」

そう僕このレン・リエスタは

大の英語不得意である

英語は一言も喋れないし、文法や単語何から何まで覚えてない

中高の時は勉強していたんだが、センスを感じなかったからやめた

そのお陰で英語知識はスツカラカン

does ってなんだ？ why ってなんだ？ be 動詞 ってなんだ？

訳わかんねえ

「教官？ どうされましたか？」

「あ、いやなんでもない、て、てか僕は今日何すれば？」

「訓練様子を確認するだけだと思いますよ」

「ホントか？」

「、あくまで、予想ですが」

強調しながら言うがその予想あっているだろう

だって僕は男性教官

アメリカの人からは舐められているだろう

だがそれでいいんだ

他のリリイと同等レベルで見られてない

つまり僕は部外者になる



そして話しかけられずまるで僕がいなかったように訓練は終了する  
完璧な流れだ

そして1人でクスクス笑う

周りは不思議そうな顔でこちらを見る

僕はそんなことも気にせず笑いつづけた

各自の準備が整い合同訓練が始まった

チャームに似せた木刀を持ち、撃ち合いたまに格闘を混ぜたりと  
なかなか実践に似ている訓練をしている

僕ら教官はそれをみているだけ

本当に何もしていない

これで仕事とは良く言えたものだ

それにしてもよく戦えているな…

僕とあつた初日はあんなにも対人は弱かつたのにな

よく成長したもんだ

僕は感動したよ…

「これが幹部が育てているリリイですか…」

真剣に訓練様子を見ていると横から喋られる

「ああいたんだな、低すぎてわからなかつた」

「えー！酷いですよー！褒めたのにー！」

久々にあつた

あの戦いぶりのクロエ

「相変わらずチビだな」

「うるさい！うるさい！うるさい！」

チビなりの叫び

こいつが本当に僕より年上とはな…

「英語出来ないバカ！数学の方程式書けない！S波とP波の名前も言えないバカ！バカバカバカ！」

とうとう僕の悪口を言うようになった…  
こいつが壊れてしまった…

でも僕も何も言い返せないなんだよな…

英語も数学も理科も不得意だし

こいつの方が頭は良いと思うし

「そんなに言うものですか？クロエさん」

笑いながら余裕そうに第三者が何かいう

「良いですよね、咲楽さんは」

「何がですか？」

「スタイルも良いですし運動神経良いし勉強も出来るし、非の打ち所がないじゃないですか」

そう咲楽結月という女性はあらゆる点で模範人間である

どこぞのアイドルよりも良いスタイル

成績優秀、運動神経抜群

美しい顔立ち

おまけに性格も良い

彼女には持ってこいな人間だ

「褒めていただき嬉しいですが、運動は幹部のお陰ですよ」

「俺？」

「あ俺に変わった」

ぼそつとクロエが何かをいうが気にせず咲楽は発言する

「幹部のお陰で私はここまで強くなれたし賢く生きる術をつけました」

「ベタ褒めですなー」

「ホントだな…ま、それほど感謝されてるって事で」

「感謝しきれないほどですよ」

咲楽…立派になったなあ

これが子を持つ親の気持ちってやつか

「あ、幹部ー」

「なんだ？おチビちゃん」

「その呼び方やめてくださーい！…ってそんなことより私達の部隊って後数名いませんでしたか？」

「ああ、陸曹長と1等陸曹か」

もうちよいいたと思うがクロエが仲良くしていたのはこの2人だろ

「あの御二方は今どちらへ？」

「陸曹長は幹部なつてまだ続けてると思うぞ？」

「1等の方は？」

「…それが分かんねえんだよな」

「行方不明？」

「いやそういうのじゃなくて、あいつ海外行つてんだよな」

「そうなんですか？」

「ああそうだ」

「では外務省に？」

「いやそんなこともないと思うが…」

1等は何やつてんだろうな…

久々に会いたくなつたな

優秀だつたな…あの2人は

格闘、射撃、座学

俺を除けば1位を争う2人だつた

「咲楽さんは情報？みたいなところで働いてますよね!？」

「そうよ、あそこもなかなか大変よ」

「幹部といた時と比べると、どっちが大変ですか？」

「んー…幹部といた時かな」

「正直なやつだ」

「咲楽さん、幹部に懐いてたからってつきり今の方が大変だと…」

「な、懐いてる…?!／／／」

「え? そうなのか咲楽?」

クロエの一言で顔を赤らめる咲楽

「そ、そんな事実どこにも…」

「え? でも前寮の時にいつて……………んぐつつ!!」

「か、幹部! 私たち仕事があるので、こ、この辺でえー!!」

「な! まで咲楽!」

咲楽がクロエにヘッドロックしてそのままどこかに行ってしまった

「なんだあいつら…」

「教官」

咲楽が行ってしまった方向をみていると出江さんの声が聞こえた

「? 出江さん? どうかしたか? 英語は喋れないよ」

「喋らそうとはしてませんが、それよりもっと大事な報告が」

真剣な顔に戻し、俺の目をみる

「10分後、アメリカのリリイと戦ってもらいます」

「は？」

今日の任務は見るだけじゃなかったのかよおおお!!!

ど、どういことだ?!

「な、なんでそんな話に…」

「アメリカの教官方があの男性教導官の戦力を見たいとおっしゃってまして…」

「…おーまいがー」

まじか…

クソ、男だから舐められてるっていう視点をしていたのは俺だけだったか

「リリイの、に、人数は？」

「40です」

おおっ！

めちやくちや多いやん！どうなつとん？！

「教官、これも任務です、逃げられませんよ？」

やめろ…やめてくれ

俺に現実を押し付けるな…

「分かってるよ、やればいいんだろやれば」

「話がやく助かります」



あれから10分が経ち、俺はグラウンドの真ん中にぽつんと1人立っていた  
出江さんからは、「どこから来るか分かりません」って言われたな……

いつでも警戒しとけてることか？

だとすると、もう戦闘は始まっている？

確かに見渡す感じ、リリイ達はいないし………

「game set……」

後ろから声が聞こえた瞬間に

チャームで突かれそうになる

俺は後ろを向かず片手で相手の手首を握りしめる

「やっぱり始まってんのか……」

その一言と共に俺はリリイをぶん投げる

そして投げたリリイに向かって言う

「そつちが本気なら俺も本気になつちまうぞ？」

「fuck you…」

なんていったか分からんねえ

でも悪口つぽいけどな…

「……こんな物か…」

俺がふと眩く

それが煽りの言葉だと気づいたのかりリイの教官は激怒した

だがそれも全部英語なので分からない

そしていきなり1人で叫び出した

「You guys get serious!!」

やべえ…まじでなんて言ってるのか分かんねえ

「咲楽！今なんていったか分かったか?!」

少し遠くにいた咲楽に助けを求め

一瞬咲楽は戸惑うも的確な返事をする

「お前ら本気出せの事ですー!!」

流石咲楽だ

頼りになるぜえ…

「ありがとう！」

なるほどな…ここからはまじで俺を殺しに来てくれるのか…

「楽しみー」

ぼつんと何も考えず立っていると、いつの間にか包囲されていた

四方八方にいやがる…

流石に舐めすぎかな？

まあいいや、久々だし肩慣らしだと思つてやれば楽だ…

「つぶねえ!!」

考えている間に目の前にいたリレイがチャームで攻撃を仕掛けてくる  
そのせいで頬に切り口が出来てしまった

「まじで本気じゃん…」

俺が頬を確認している時、横からチャームで攻撃される

「さあスタートだ」

俺は相手の手首を掴み顔に肘打ち

後ろからもう1人来たので投げ技は仕掛せず、もう1人に応戦する

チャームを楽々と避けていると相手は俺の顔目掛けて上段蹴りをしてくる

俺は避けたあとに隙が空いている事を確認し

みぞおちに一発、突きをいれる

相手は怯みながらも蹴り技を披露してくれている

が、俺は相手の攻撃を軽々と止め腹にマギを放つ

相手は飛んでいき、元々いたやつも巻き込めた

「こんなもんか?! アメリカさんよ!」

パワーが強いのは確かだがスピードが全然ないな…

よくこれでヒューズと戦ってきたもんだ

「気をつけてくださいよ! 喧嘩売っちゃうと本当に殺されますよ! アメリカ達はあなたの体の性質を知ってるんですから!」

「お、おお、分かったよ! 結月!」

結月からヤジのようなものを飛ばされる

ふと前を見るとチャームを振りかざすリリイがいた

俺はそれを防ぎ相手の手首へと掌打し、手首を麻痺させる

相手は驚いた顔で一瞬俺の目をみる

俺は笑ったが相手は地味に怒っていたのか瞬時に険しい顔になった

そして手のひらを丸め格闘状態へと入った

俺に突きをいれる

それを受け止めたり流したり

隙が空くのを待っている

「w、what?!」

戸惑ってやがる

ついに隙が生まれると俺は肘で腹を打った

「もつと磨けば強くなるのに……」

突きが素早く一発一発重かった……

軍人にでも育てられたのか？

「頑張れー！ 幹部ー！」

「頑張る程の事でもねえよ……」

「と……とん煽りますねえー」

クロエから応援されるも別にこの任務に辛さはないので意味の無い会話になつていく

周囲を警戒していると、どこからか声がした

「私のほ、本気見せてやる……！」

聞いた事のない声色

明らかに日本語だった

だが誰の声だ？ 聞いた事がないぞ……

何故だか、周りにいたリリイがその声に恐れたのかそうそうと俺から離れる

「なるほど……これがアメリカリリイのトップの人間か」

おそらく日本語を喋ったのはアメリカリリーのトップに立つ者

「……っ！」

辺りを警戒しながら見渡していると

上から何かが降ってきた

砂ぼこりが凄く、前が見えない

「なんだこれは…?!」

俺は何が起きているのか理解が出来ない

ミサイルでも撃たれたのか?!

クソ、前が本当に見えねえ!

こんなのいつ攻撃されるか分かんねえじゃねえか!

目を手で抑えながらも前を向こうとする

すると、前から何かが飛んできた…

それは俺の足元に被弾しそれが爆発し俺に攻撃してくる

爆風に飲み込まれ上手く体制が立て直せない

「くっ……！」

「日本人と戦うとは思っていませんでした…今楽にさせてあげます」

砂ぼこりの中さつき喋った人が何かを言っている

「お前は何者だ?！」

俺は見えないが問いかける

「名乗るような者ではありません…さつきと死んでください」

おいおい、本気じゃねえか

砂ぼこりが舞う中、俺の目の前に一筋の光が指してきた

光の源は1人の少女だった

金髪で、アメリカ人ではない顔立ち

アジア人という人間か？

日本人と韓国のハーフか？

そんな顔立ちをしている

控えめに言っつて美人

「…！死んでください！」

手に持っていた日本刀っぽいなもので俺の喉を目掛けて刺そうとしてきた



「?あんだどこかであつたか?」

「…?!な、なぜ?」

「いやなんとなく…」

近くでみると見た事のある顔立ちだ

てか俺、今刀を軽々止めてるけどめちやくちやくこの子パワーがすげえ

…そんなやつとも一回戦つたことのあるような…

ま、いいや

俺は持っていた相手の腕を思いっきり後ろに投げた

だが少女は体制を立て直した

なんて運動神経だ

つかさず俺に飛びかかる少女

少女は俺の腹に突こうとしてきた

俺はそれを避けながら頭に1発蹴りを入れようとする

状态的に言えば、俺は今上段を蹴っている体制

「終わりか…」

そんな言葉を口ずさむ

すると少女は蹴りに反応し

俺の片方の足に自分の足をかける

俺は見事に倒れてしまう

ここまで反応されたのは久々だ

俺はこかさされ、少女は俺の上へと乗った

馬乗りされている

「死んでください！殺人犯！」

刀を両手に持ち俺の心臓へと刺す

が、俺はそれを間一髪で受け止める

手が痛い……だが負ける訳にはいかない

「何故です?!なぜそこまで足掻くのですか?!」

「俺はまだ……死にたくねえからだよ!」

その言葉と共にマジギを相手の腹で撃ち、吹っ飛ばす

「はあ……はあ……そろそろ俺も本気出さねえと失礼だな……」

俺は懐からナイフを取り出す

「俺を殺せよ、出来るもんならな！」

「さ、咲楽さあん！幹部は幹部は大丈夫なんでしょうか？」  
「日本人では最強ですよ？負ける訳ないですよ」

「…ふっ！…ふ！…なんて手強い…！」

刀を振り俺を殺しにくる少女

俺はナイフで攻撃を防ぎ、楽しんでる

「なあ！あんた、なんでそこまでして俺を殺したい？」

「黙れ！あなたがいなければ…あなたが…」

隙が空いたので相手に首返しをする

そして少女の武装解除に成功する

「どうした？ 疲れたか？」

「…情けは無用です、本気で来てみなさい」

「まだ続けんのかよ…」

流石にここでは本気は出さない

出したらこいつは死ぬしな…

「今度は素手で勝負です…！」

「素手？ 俺、格闘の指導してた人間だぞ？」

「私は空手も柔道も黒帯なので」

「それは強そうだ」

俺は煽り口でいう

相手から近づき、攻撃を仕掛けてくる

腹に突き、頭に蹴り

両方手で捌き、腕でガードした

「おい…少女さんよ…」

「何よ?!」

攻撃を与えながら喋っている

「あんた…型の動きじゃねえか?」

「そんな訳な……っ〜! いったいわね!」

俺は先の行動をよみ、裏拳を顔にきめる

怯んでいるのを逃さずに相手の右腕を持つ

関節を曲がらない方に軽く曲げようとする

そしてその衝撃で相手が前の方に寄る

相手の腹を足首あたりで蹴りをいれる

そして怯んだ瞬間に首返しで圧倒する

「……も面白いか?」

俺は呆れる

もう面倒だ

まだやると言われても、もう勝つただろ

「な、なんで私を殺さないんですか?…」

「アメリカの犬を殺しても意味は無いし、大事な戦力が減るからな…」

「……私の………を殺したのに……」

何と言ったか聞こえなかった

「なんだって?」

「私の……私の……」

「お父さんを殺した癖に!!」

その声で全体が固まる

衝撃的な言葉だ

あたりがザワつく

「咲楽さん!なんでこんなにザワついてるんですか?!

「クロエさん……生憎私にも分かりません……」

「は、はあ?!俺があんたの親を殺した?!ちよっと待てよ!」

確かにだ、こいつのたたかいは誰かに似ている

だが俺はそんなやつ殺さないし、まず訓練を共にやっていた人間だぞ

「これで分かりますか?!工藤神桜!」

工藤神桜?

確かにそんな陸曹長はいたが、俺とは無縁だ

まず部隊が違う

ちよっと格闘訓練を付き合っただけだ

「確かにいたが、俺はその人を殺してない!」

「嘘だ!」

…クソ、どうすればいいんだ?…

俺はあいつが死んだことを知らないから何も言えない

適当に言ったら余計に疑われる…

「レン二等陸佐!どういう事だ?!」

ああ、クソ!お偉いさんが来ちまった

「なあお嬢さん！俺は神桜を殺してない！まずいつ死んだのかも知らない！」

「嘘だ…嘘だ嘘だ！あの時私は見たんだ！」

「！その事件…聞いたことがあります…」

「な、なんなんですか?! 咲楽さん！」

「確か無差別殺人事件とかって言われてましたね…数件の事件で、被害者は全員防衛官、犯人は疾走して終わったとか…」

「はあ…レン一等陸佐！君を停職処分する！」

「ま、待てよ！まず事実確認も終えてないだろ！」

「あんなけ防衛官を殺せるのは君くらいだろ？」

「いや俺にはアリバイがある！」

「なんだね？」

「俺は防衛省の研究施設で色々されてたんだぞ?! その時期くらいだろ?! その事件は…」

「いや違うな、君がちょうど大学に行っていたころだ」

「は、はあ?! ……い、いや俺には証人が…」



「連れて行け…君には失望したよ…」等陸佐

クソ…急になんだったんだ…

なんで俺に容疑がかかっているんだ…

てかおかしくないか…

なんで事実確認もせずに…

仕方ない…ここはもう大人しく連行されよう

俺は両手を上げ降参の意を示す

どうせ、こいつら黒だろうな…

「幹部！諦めるんですか?! 幹部！ 幹部！」

「クロエさん! ……っ!」

銃を突きつけられ血の気が引く咲楽

「これ以上邪魔すれば射殺します」

「さ、咲楽さん…何がどうなって…」

「…ここはもう何もしないでおきましょう…」

「防衛官レン一等陸佐! 逮捕する!」

「こいつらが悪の黒なら…」

俺は逆の白の黒になってやる…

## FOURTEENSTORY—善悪—

「……いい加減吐けよ、陸佐」

とある警察署で俺は取り調べ室に座っていた

あの後ここまで連行され今この様だ

つたく…俺が何したって言うんだよ…

あの金髪少女め…めちやくちやな嘘つきやがって

「なあ陸佐、ほんとにあんたがやったのか？」

「やってねえだろ、そんな昔の事」

「…やっぱりか？」

やっぱり？ どういう事だ？

まるで事件の真相でも知っている様だ

「その事件の容疑者を俺はこの目でみた」

「いや！じゃあ今すぐ言えよ！俺にはまだ仕事とか……」

「まあまあ待て待て」

俺が立ち上がり力強く言うのとそれを押さえるように俺の肩を掴む

「俺もあんたを逃してやりたいけど……上のやつらが解放する気はねえんだよ」

「どういう事なんだ？」

「多分、そのまま容疑がかかって死刑までに持つていくんじゃないか？」

「俺を殺すのが上の目的か？」

「多分な……」

沈黙が続く

相手は何も言わないでただ立っている

俺はこれから生きるか死ぬかを選んでいた

どっちにしても辛いな……

生きるならどこかで逃げなければならぬ

居場所も見つけないとな……

「なあ陸佐よ……お前はもうどうしたいんだ？」

どうしたい?…

そうだな…

「もし俺を殺すのが目的なら上を殺したいな…」

「いいのか? リリイ達には失望されるぞ?」

「もういい… あいつらも俺と関わっているのが辛いだろうし…」

「一回死刑執行されてみたらいいんじゃないか?」

刑事としては失格な発言をした

やべえだろ

「執行されてみてからの反応を見たら?」

「いやいや俺の性質知ってるなら執行されたところでな…」

「その時は俺が止めてやるよ… そういう焦ってる時は目標を表に出しやすいのが人間

だ、ま、それが目的じゃなくても助けるけどな」

流石刑事だ

「で、でもなあお前はどうすんだよ? 刑事だろ?」

「安心しろ、宛がある」

宛か…

「どういうところなんだ…?」

「そうだな…まあ今は人数が少なえんだけどお前が来てくれれば士気があがるだろう…」

「なんとなくは分かった…」

「死刑は来月くらいになるだろう、それまでゆつくりしとけ」

「ああ分かった成功するが分からんがな…とところであんたの名前は？」

「バージル、バージル・アートン、呼びやすい名で呼べ」

「バージルか…改めてよろしくなバージル」

「お前を見てると昔の俺を見ている気分になるよ…はは」

「…なんだよそれ…」

「…いつ…なぜ俺なんかのために自分の位を捨ててまで助けてくれるんだ？」

あの日から29日くらいが経った

俺は牢屋の中で過ごしている

暇だ、まさかこんなことになるとはな…

ごめんな…クロエ、育てることができなかつたよ…

ごめんな…咲楽、まだまだ教えられることはいっぱいあつたのにな

「よおレン元一等陸佐」

「その呼び方…俺の仕事はもうないって事だな？」

「おお！早いな…：唐突だが死刑執行日が決まつた」

改まつた顔で目を見る

「明日の昼頃だ、覚悟しておけ」

「分かつたよバージル…お前を信じるぞ」

「任せろ」

「こいつを信じていいのかは分からない

だがどの道行ってもいい

最後は人を信じてもいいんじゃないか…

「言つとくが俺はレン、お前を見捨てる気はない…そこは安心しろ」

「胸に刻むぜ、その言葉」

「ふん…勝手にしろ」

死刑執行当日

冷たい空気

誰もいない通路

唯一いたのは防衛大臣だな



俺は縄がある部屋へと移動する

そして真ん中に切れ目がある床に立った

そこで俺は初めて気づいた

バージルの姿がない…

同じ部屋にいるのはトドメを刺すナイフを持った刑務官

「おいおい…俺死んじまうぜ……」

「何変なこと言っている?!とつとつと首を入れる!社会のクズが!」

言い過ぎだろ…

俺は縄に首を入れ考える

やっぱり騙されたかな…

そして合図もなしに床が開く

俺は死んだ

やはり騙されたのか…

でもまだ意識はある

よく言うよな

死んだ数秒はまだ意識があるって

そういえば俺、走馬灯見なかったな

それほどうもない人生だったなのか…

「…い…い…お…」

誰かに呼ばれる

それに反応し、目が勝手に開く

「おいおい大丈夫か?!」

目の前にいたのは返り血を浴びたバージルだった

俺はまだ生きている？

な、なぜ?!

「バージル…見捨てたんじゃ」

「そんな訳ないだろう! さあ! はやく行くぞ!」

バージルは持っていた刀で縄を切る

「そんな刀どこから…」

「ああ、俺はこう見えてもマジは使えるんだぜ、まあちよつとだけだけどな」

「それは頼もしい…」

「ほら早く！走るぞ!!」

俺らは警報音がなる室内を全速力で走り抜けた

いつの間にか外に出ていた

だが外は地獄だった

「ちつ…：やつぱり刑務官の特殊さん達は早いな…」

「バージル刑事！いますぐ離れてください！あなたを撃ちたくない！」

部隊のリーダーであろう人がバージルに向かって言う

「そんなお前のエゴでどく訳ないだろう?!こいつは俺の未来…いや

反政府組織のこれからを作っていく人間だ！」

「は、反政府?!」

「バージル！あんたそんなのに所属してたのかよ！まあ分かってたけど…」

分かっていたがまさか本当に刑事が反政府組織の一員だとはな…

「撃つしかないようですね…構ええ!!」

一斉に銃を向けられる

「ここまでか…ごめんなレン」

「何言ってるんだよ!」

「武器がいるんじゃない?」

ふと聞き覚えのある声がする

「そうだな…出来ればナイフがいいな…」

「真島!!」

俺は横から来た真島の質問に答える

「レン！あれあんたの教え子じゃ…」

「大丈夫だ！ヘリの手配をしてるんだったよな？それまで耐え抜くぞ！」

真島の方へ行きナイフを貫う

「ビックリしたじゃないか…なんでここに…」

「私は教官が正しいと思ってるのも！私も反政府に入るわ」

「いいのか？ミリアムが悲しむぞ？」

「グロっぴーは…政府に拉致られちゃったんだ」

「リリイを誘拐?!」

「そうなの…実験に行くって言って帰ってこなくてね」

まさかそんな事までしていたとは

「ついてくるか?!俺に！」

「もちろんよ！」

「レン・リエスタ教官！」

なんでもありな日常

それは覚悟していた

だけどもさかこんなにもめちやくちやだと、疲れるな

「刑務官を舐めるなよ！社会のゴミ達がよお！」

さっきの態度とは急変し裏の顔を表した

「やるぞ、レン！」

「ああ分かってるよ！」

3人VS刑務官30名

負ける確率の方が圧倒的だが…

「1人10人、殺れよ！」

「了解！」

無謀な戦いが始まった…

次々に攻撃を仕掛けてくる相手

上手く捌きひとつひとつの行動を攻撃へと繋ぐ  
銃を撃たれても上手く躲し、カウンターをする

「流石だなあ！教官！」

「あんたもだ！刑事の癖して人を容易く殺すなんて！」

まさかまた人を殺す日が来るなんて  
思ってもいなかった

「レン！そろそろヘリの到着時間！」

戦闘しながらも時計を見る

「退くぞ！」

殺してある人間からスモークグレネードを奪い  
足元に投げる

「絶対に逃がすな！何をしてでも殺れ！」

（反政府組織に入られては私たちの野望が無くなってしまおう！）

僕らはいた所から1km離れたビルにのっている

「急げ！追っ手がくるぞ！」

屋上まで足を運ぶ

下の階からは銃を発砲されている

「真島！先行け」

「はいはい！」

屋上まで登り詰めると真島を先に出させて

ハンドガンを撃って追っ手の数を少しでも減らしておく

「何人いやがる！」

想像以上の数に若干焦りが出てしまう

「レン！行くぞ！」

一緒に発砲していたバージルは俺の肩を掴む



「乗れ！乗れえ！」

もうヘリは目と鼻の先

後は走るだけ

ヘリからは銃を撃って応戦している人の姿が

「急げ急げ！」

俺とバージルは一直線に走る

しかし、数発流れ弾が来た

俺は左腕を撃たれる

ふと心配になりバージルの方である後ろを向くと

倒れているバージルの姿が目に入った

足から出血していて歩けそうにない

「バージル!!」

「行け！反政府を頼んだ!!」

バージルは自分の状況を理解し、ハンドガンを撃ち出す

俺は再び前を向いた

初めて人を見て涙を流した

へりはもう、少しだけ高度を上げていつていた

その為、俺はジャンプをした

上半身を乗せることに成功

先程応戦していたガタイのいい男に上半身を掴まれてへりに搭乗する

搭乗して僕は涙を流した

バージルを助けられていたかもしれない

後悔と虚しさが同時に起こる

「あん時のクソガキはどこにいったんだ？」

応戦していた人間は俺に話かける

「あんた……どこかで……」

「覚えてるのか？そうさ、唯一俺がお前の首を締めた、反政府組織の人間さ」

涙を拭き顔を改める

「バージル主将はこう言つてたよ、レンみたいな奴がいれば俺は死ぬ。しつかり言う

こと聞いて政府を潰せって」

「今政府はリリイを使った実験、ヒュージの開発……どっちが正義か知らんが、これだけは

分かる」

「お前はそんな政府が嫌いだ」

「そつちの女の子も政府の悪を知ったから反政府に来た、だろ？」

「そうだけど…」

「反政府にはそんな奴が一杯いる、そのトップはお前だ。レンさん」

目を見て話させる

「一緒に政府を潰して、リリイを正式な使い方をしての平和を握ろう」

へりは町外れのスラム街に着陸

「ここが反政府の人間が集まった街、通称、ラジアータ」

街中を歩きながら説明される

道中は痩せ細った子供、死んでいるものにも関わらず子供の死体を抱く母親  
まるで戦後のよう

「ここには普通の生活を諦めたやつや、政府から追い出された追放者、元防衛省に務めていたやつから、貧困問題を抱えた家族まで、色んな人間がいる」

説明を受けながらも歩いていると急に男は立ち止まった

「ここが反政府組織の中心建築物、アイリス」

外見は錆びていておりドアも開きそうにないのだが

男はカードをスキヤナーに当てて扉を開ける

自動扉で開く度に錆が落ちてくる

「ここがあんたの部屋だ、好きにしろ」

個室の部屋に案内される

普通の部屋で特に特徴はない

「一息ついたら上の階にい」

「行くか…」

数分して俺はする事がなくなったので指定通り上の階に行く

「エレベーターもボロボロだなあ」

錆びてはいないが色が剥げている

上の階に着くと真島と男の姿が目に残った

「お、来たな！こつちだ着いてこい」

またしても彼が先頭になり歩き始める

道中でのこと

「あんた、百合ヶ丘の教官だったのか？」

「ああ、そうだが」

「言い難いが……いや言おう。反政府に入ったからにはもしかしたらリイと戦う事に

なる」

言わずらそうに小声で発言した

「リリイは一応政府が正しいと思ってるから俺らとは敵対になっている」

「覚悟は出来ている…」

心配させまいと思い考えてもいない事を言う

「そりゃあ助かるよ」

「メリア？ 入るぞ」

ドアの前で立ち止まった男は何者かの名前を言つて自動扉を開ける  
入つていったので僕らも一緒に入った

「お！ その子が隊長？ ……つてこの人…」

相手は18くらい女性の

部屋の奥にとてつもなく大きいディスプレイ

他、PCモニターが4、5枚

「紹介するよ、俺の妹、アルストロメリア」

ニコッと笑い手を振る

「反政府組織の司令塔のような役割プラス色んな物の分析官」

「よろしくねー」

「そして俺の名前はアズラーイール、呼びやすい呼び方で構わない」

力強い握手を交わす

「レン・リエスタさんだっけ？防衛軍幹部のトップの人間で百合ヶ丘の教導官、そっちの人は真島百由、百合ヶ丘のアーセナル…凄い人達ねー」

ディスプレイに書いてある事を音読する彼女

「今日からレンには反政府組織の隊長を務めてもらうつもりなんだが……」

2人とも何故か黙り込む

「了承してしまえば後戻りは出来ないかもしれない…それでも隊長をして政府を潰すか？……」

後戻り…その言葉に引つかかる

出江さんや亜羅椰、イロハに一柳隊の全員

そいつらとはもう話も出来ない、会うことすら出来ない

深く考えれば考えるほど悲しい

でもこのままならリリイは実験体にされるだけ

だったら別れより未来を紡ぐ方を俺は選ぼう

「反政府組織の隊長を俺はやる、一緒に潰して安心安全の未来を……」

その回答に驚きながらも

イールは俺の肩を強く握る

「ようこそ……反政府組織へ」